

に一聲、
「若山町ッ。」

十五

瀬藤健藏は店も倉庫も若山町の廣い路次を入つたところに有つて居つて、可なりに大きなもので御座います、此人は前章に申上げた團吉の父親で、元は里昂に住んで三十年來孜孜と製絲業を営つて、中々名高い老舗の一つ、殊に手堅いのが評判で、巴里で店を開いてからも中々の勢力であつたのでございませぬ、然るに、一寸とした拍子から相場へ手出しを致したが、二度程續けてウンと當つたので、サア面白くつて溜らない、それからといふもの殆んど夢中、何の必要あつて短い一生の三十年を屹々と稼いだものか、考へて見ると判らない、三十年汗水垂らして出来た金が纔くに此小百萬、百萬ぐらゐは相場では眼を閉つてる間に出来し得ると、瀬藤健藏斯ういふ考へになつたから、商賣の方は段々疎略になつて来たが、何しろ久しく張つて来た暖簾、舊來の客筋は依然としてあるのだから、商賣は續いて行つてゐる、併し瀬藤の頭腦は最早相場一方に傾いて、何卒して大儲をやりたいと、瞬時働いてをるので御座います、されど好い運はさうく續くものでない、近來は大分の損失續きで、其穴埋の爲に商賣の方で儲けた金は残らず相場の方へ注込んで了ふといふ始末、併し斯う相場に頭が出来

て了つては、正當や地道の利得は左程には感じない、第一金銭といふものに正當な觀念が失せて、其價値が判らなくなつて了つたので、今はもう萬事萬端手の着けられぬやうになつてゐる、家までも左前、只里昂に在る工場が何か此うかやつてる御蔭で維持するが、工場で二十萬儲ける金は相場で三十萬損するといつた風で、差引不足ばかりが出て、此頃は最早持切れないのでムいませぬ。
今日も今日とて瀬藤は類に激して、憂慮で溜らぬ顔をしてをります、全體瀬藤相場の行法は只だ他愛ない無鐵砲な行法で、其癖失敗するときは、一時非常にそれを苦に病んで、又是非如何かしたいといふ希望に焦つて、喪心自失の體に陥つて了ふ、之も詰りは質に正直小心なところがあるからございませぬ、此四月の受渡にも大損耗で殆んど立行ぬ程の仕儀となつたのだが、顔容を見ると相變らず色澤好く、豊かな頬鬚を撫して、決して可厭な顔色をしてをりませぬ、今日も庄兵衛が来たのを見て此方から聲を懸けて、

「ヤア相良さん、何か好い御話でもありませんか、そんなら大に歓迎しますよ。」

かう云つたが又考へ直して、恐ろしいといつたやうに、

『いや然し相場の話なら御免を被る、最早引張出されるのは御免です、私は寧ろ正直に生絲を弄くつて店を動かぬで斯うやつてる方が宜いのです。』

此容子を見てとつた庄兵衛、突如本題に立入るよりも他の關係の無い話をして氣を和けて、それか

「本題を持出さうと、今朝御子息の團吉君に増島の店で御目にかゝつたと、子息のことを話し、た、すると、此話は反つて瀬藤に可厭な感じを起させた、といふのは外でもない、瀬藤は今度營業を悉皆伴團吉に渡して了つて其責任で行らせやうと考へておつたのに、肝心の團吉は、如何いふものか商賣が嫌ひで、只ブラ／＼して親の財産を其の儘繼承して、懐手で遊んでゆかうとさういふ心體で居るのでございます、それを知りつゝ團吉を増島の店へ住込ませたのは、そんな事にでもしたら段々商賣の道を見習つて、自然と勵みも出て來やうと、かう考へたからであるが、公然其効も見えないので、父親も不本意で溜らない。

健藏老人モグ／＼と、

「イヤ作もな、彼の母が歿しましてからといふもの、私に少しの満足も與へて呉れませんので、マア今度増島さんとは、些たア物事を見覚えて役に立つてくれるやうにもならうかと、私は夫ばかりを祈つて居ります。」

此邊が話の突込みどころと見てとつた庄兵衛、話をクルリと本文に回はして、

「何です瀬藤さん、私達の仲間へ入りませんか？ 實は醍醐君の意見もあつて、斯うやつて上つたので」瀬藤は震く手を天の一方へ擧げて、未だ何の話だか判りもせぬのに、嬉しいやうな心配なやうな聲を發して、

「仲間へ入れて、固よりでござんす、入りませう、入れて頂かんで何するものですか、私が、入るのを御断りして貴方がたの事業が旨くゆくやうなことがあれば、それこそ私は後悔で病氣になつて了ひます、宜しうござんす、何卒醍醐さんに私も入ると仰有つて下さい。」

此家では話が纏るも纏らぬもない、庄兵衛往來へ出て、衣囊から時計を出して見ると未だ四時、五時までには未だ緩くりだ、少し歩きたい氣もするの、車はこゝで歸して了つた。

十六



庄兵衛は車を歸して、ブラ／＼とやつてくると、未

だ一二分と経たぬ内に、車を選したのを後悔することが始まつた、といふのは外でもない、少し歩行いで大通りへ出かゝると、又もや驟雨が降つて來て、然も霰交りの大ドシャ降り、コリヤ溜らぬと庄兵衛或家の軒のところへ駈込んだ、本當に仕様の無い雨の畜生、出るにも退くにも仕様が無いと、凡そ

十五分ばかり雨を眺めて、恨めしさうに睨んで居たが、馬鹿々々しくつて溜らない、有つた車を態々還して折角歩行かうとしたのを、又新しく雇つて乗る！ 業腹だと、瘠我慢はしてみたが、雨は中々止みさうにもしないから、遙か彼方を通りかゝつた辻車を呼留めた、車は無蓋四輪、馭者も雨に閉口して客をも乗せず我家へ歸らうとしてゐたところだ、庄兵衛は降る雨に一生懸命革の膝懸で體軀を包んで、濡れぬやうに氣をつけたが、約束の醍醐の岩井町の邸へ着いたときには體軀中殆んどビシヨ濡れ、それで時間はと見ると未だ三十分も約束の時間には疾かつた。

喫煙室へ案内されたが、主人は未だ歸宅致しませんから少々御待をと、取次に告げられて、庄兵衛は仕方が無い、起上つて茫乎と、壁に掛てある油繪を見てをりますと、何處からか大變に好い女の聲が聞える、廣い大な構への邸内であるから其聲は深く響いて、何となく物淋しく、沈んだ調子に聞えます、庄兵衛は窓が一つ開いてをつたから其方へ近寄つて、耳を澄して聞いてみると、其聲は外でもない、當家の夫人が洋琴に合はせて何か唱つてをるので御座います、成程夫人は有名の唱歌家だと聞いてゐたが、大方今夜何處で唱ふことになつてゐるので、其下稽古をしてゐるのだらうと、庄兵衛合點を致しました、庄兵衛は夫人の美しい聲に聞惚れて居たが、それから段々醍醐の身の上につての種々の人の噂を思ひ浮べる、就中此醍醐が淺間鐵山會社の株で恐ろしい金を儲けたこと、其行法の豪膽なこと、如何にも猛烈な手腕家であることなど考へて、内心感じ入つてをりました、夫人の唱歌は未だ止

まないが、庄兵衛窓のところから室の中央へ来て不圖前面の壁を見ると、メイソニエの油畫額が懸へてゐる、少くとも十萬圓の代物だらうと、庄兵衛見惚れきつて了ふ。

が、此時誰だか戸を開けて入つてきたので、見るといふと別人でない由利、庄兵衛は少し胸轟かせた。

『オヤ、君最早来たのか未だ五時にならぬのに、議會は最早済んだのか？』

『済むも済まぬも有りやせんは、議場は未だ混亂の最中だ。』

由利は今日の議場で反對黨の代議士が續々攻撃の鋭鋒を逞くして中々盡きる容子が無いから、大木は多分答辯を明日にするだらうと、爾う見てとつたから、議場の休憩が鳥渡あつた時間に大木が鬨を排して出て來るところを扼まへて、此方の話を持込んだと、斯う説明を致しました、少し激してゐる庄兵衛、疾く聞きたくつて溜らない、

『そして、兄の返事の工合は？』

由利は故意と直に本文に立入らない、

『イヤ何も、大木君今日は大の不機嫌で怖いくらゐ、中々近寄れん程だつた、何にも言はせず追拂はれるに定つてると思つてかゝつたんさ、それから何うか此うか機會を見て、事件の話を持出したね、自分が、自分でえな君のことだよ、自分が此事業を始めるとなれば先づ第一に見たる大木の承諾を得

ぬければならんと相良君が云ふたと、斯う僕は發言したね。」

「成程、さうしたら？」

「さう云ふたならば、大木君僕を兩腕で捕へて、揺ぶりながら、顔の前へ顔を突出して、何でも勝手に好いやうにさせとくさと斯う云つたきり、其まゝ行つて了つた。」

此復命に庄兵衛は顔色を蒼白くしながら、無理な笑を繕つて、

「そりや可かつた。」

由利も可かつたと聊か自負の色、

「先ア思つたよりは好い返事だ、夫以上は望まれぬよ、それ丈け聞いて置けば事業の着手にかゝれる

。」

談話の最中へ主人醍醐の歸つて來た足音が隣室で聞えたので、由利は小聲で付加へて、

「宜しく我輩に爲せて置き給へ、ネ、いゝか。」

由利が是非萬國銀行を設立させて自分も重役に加はりたと思ふ存念は、此一言で現然と證據立られた、頼まれた處の沙汰でない、今は自分が先棒の一人、誠に與し易い人間でござります。

聽て醍醐が入つてきたので、由利は自分から進んでいつて、握手をしながら、鼻うごめかして、

「好首尾、上々吉、萬歳です。」

「左様ですか、本當に？ 如何いふ話でした？」

「矢張大將は大將のところがある、大木君の云はく、巧く弟が行つて呉れば可いとは。」

これを聞いて醍醐は大喜び、巧く成功すれば可いとは、これは百萬の味方を得たも同様だ、其言葉解して見ると、拙くゆけば固より構へぬが、巧くゆけば援助も與へられるとかういふのだ、成程御前上等だ、

「相良さん大丈夫、成功は必定請合ひ、安心なさい、一つ大に行りませう……。」

十七

これから三人卓を圍んで、事業計畫に就て重なる點を相談する、醍醐は話を始める前に、起つて窓の硝子戸を降ろしたが、これは夫人の謠ふ聲が段々乗りが來て此室へ響いて談話の邪魔になるからだ、ところが窓を締めても依然夫人の聲は聞えて、殊に何か悲哀の曲のところと見えて氣が引張込まれるやうであつたが、此方の三人の相談の方にも油が乗つてきて、遂に話を纏めて了つた、即ち萬國銀行を創立すること、資本金は一株五百圓の五萬株で總額二千五百萬圓、それから發起人となつてシンヂケイトに加はるものは醍醐、由利、瀬藤、福岡侯爵と、外に有志者數人を加へて、是丈けで率先して株數の五分の四即ち四萬株を引受ける、それで大部分が纏つたも同様だから株の募集は安全容易、それ

から株は成丈け握つて市場へ出さぬやうにして品薄にして置けば相場は自由勝手に上げ下げすることが出来やうと、此んな打合せまでも致しました。

此迄話が纏つたところが、此で醍醐の發議から鳥渡した波瀾が起つた、といふのは、醍醐はシンヂケートの引受ける四萬株には一株に付十圓合計にして四十萬圓の割増を拂ふこととして、此高は別に取つて置かうと、斯ういふ議論を出したので、所が庄兵衛は之に反對して、第一には成るべく容易な話で事業を成立させなければならぬのを、只さへ當初は難かしいそれを、其様なことをして猶ほ進路に妨害をしては甚だ以て面白くない理由だと主張したが、由利が醍醐の説に加擔して、口調も靜に、醍醐さんの説は至極御道理、然うなくては協はぬ、世間では多く然うすると、側から賛成説を出したので、庄兵衛も仕方がない、醍醐の説に従つて了つた。

三人はこれで今日の相談を了へて、又明日會合することにして、明日は濱野にも出て貰ふことにして、これで各々袂を別つ、別れて庄兵衛は行かうとすると、醍醐は失敗つたといつた顔容で、手で額を叩きながら庄兵衛を呼留めて、

『忘れて居た、小部を入れにやいかん、彼人に黙つてると向ふから怒つてくる、是非知らしてやらなければいかん、相良さん貴方一つ御苦勞ぢやが、直ぐに小部の家へ行つて下さらんか、今未だ六時にはならん、直ぐに行つたら逢へるでせう、是非貴方自身に御出張を願ひたい、而して明日でなくこれ

から直ぐに、さうすれば、先方だつて決して黙つては居ません、彼男ならば何かにつけて役に立つて呉れますは。』

唯々諾々と庄兵衛は出懸て參る、今日のやうな吉日は本當に滅多に來ぬ、取外しては大變だ、天氣は恢復つたし家も近いから、今度こそは運動がてらと、待たして置いた車を返してブラムと歩行して參る、話が旨くゆきさうなのだから、運ぶ足も至つて輕い。

然るに門丸町へ來るといふと、又ボツリと降つてきたから、軒下を傳つて緑町上城町から眼鏡町へ出て上野町の方へやつて參ると、右手に在る薄暗い小路から瀬藤團吉が急いで出て來て、跡をも見ずにスタ〜と行つて了つた、ハテナ彼奴何處へ行きやアがつたのかしらんと、忙がしい中を庄兵衛立留まつて、小路の方を見てみると、其小路の中央に目に立たぬやうな一寸粹な小作りの家がある、ハ、ア團吉奴此家から出て來たに相違ないと、見てみると、格子戸がガラリと開いて、出て來たのは小作りの身相の、顔をペールで隠した女、熟々見ると其女は例の紙屋の小山の女房、團吉を先へ歸して後から出て行くところらしい、ハ、ア成程彼奴此家を密會の場所にしてゐるやアがる、小山の女房内密悪い事やつてると聞いてゐたが、實行の魔窟を此に構へて居やアがるのだ、可憫想に好人物の亭主、何にも知らずに、女房は商内用に駆廻ると思つてゐるんだ、だが人の判らぬ巧いところへ巢を作つたもんだ、此んな繁華な土地の中央、燈臺下暗しで却つて人目に着かぬのだ、己の眼にはいつたの

は罷り間違つた偶然の機會、巧いことをやつてやアがると、庄兵衛面白可笑しく思つて、獨り笑つて居りましたが、心の裡には羨ましいとも思つたのでございます、朝には此木系枝、夕には小山すぎ、彼奴贄澤を行つてやアがる、可焉、己も一遍來てやらう、熱く覺えて置いてやらうと、二度も三度も庄兵衛は此家を見詰めて置きました。

十八

上野町の小部の家へ來て、今入らうとするといふと、庄兵衛の耳に聞えたのは例の軽い透き通つた音楽、庄兵衛思はず知らず立留つたが、其音響は外ではない、地下室から聞える例の金貨、今朝偶然聞いて、今日一日の終りに、又もや耳にする黄金の響、庄兵衛は此音に不快な心持は致しません、事業の幸先、好い前兆だと、獨り悦に入つたので御座います。

恰度此時小部は地下室の熔解場に居りました、庄兵衛は小部の家の人とは昵懇の間柄であるからして、案内を待たずツカ／＼と地下室へ打通つた。

此地下室は工場のことだから裝飾も何にもない剝出しの室で、天上から火屋無しの瓦斯の火口が二箇所、年百年中射出してをります、鑄工が二人で亞鉛二重張の函に一杯になつてゐる金貨——今日のは西班牙の金貨——を圓匙鍬で掬出して、之を大きな四角形の籠中に据ゑてある坩堝の中へ放込むで

をります、室内の熱さといつたらそれは、非常なもの、そこへ、天井の低い閉切つた穴藏みたやうな此室で間斷なしに金貨を出入するのだから、談話などは小聲では聞えません、側に在る臺の上には熔解鑄出された新金塊、長方形の敷石の形をしてゐるもの、棒形のものなど、皆出來たてのピカピカした色澤で、それがツラリと並べてあるが、之はこれから試金方が含量を秤定するのでございませう、今日は朝から此刻迄に六百萬圓の金量が此んな風に鑄出されたといふことで、小部の利得はそれでも纔た三四百圓にしかならないが、それは此金貨や金塊の取引では、相場の差違は誠に少額で、千に若干といふ風に立てられるものであるからして、金高が大きくなければ従つて利得も大きくならぬ理由で、所謂數でこなすのでございます、即ち年百年中朝から晩まで、此小部の地下室では金貨の音が跡を絶たない、金が貨幣の形で送られて來て、金塊の形で出ていつて、それが又金貨になつて歸つて來て、又金塊になつて出てゆくといふ、永久不變同じ事を繰返して居ります、其同じことを商賣にして居りますのは、之からして僅少の手間賃を利得しやうといふ目的なのに過ぎませぬ。

主人の小部資造は色黒の小作りの、驚の嘴のやうな鋭い鼻が、濃い澤山の腮髯の中から出てゐるもので、言はずとも猶太人だといふことが判る人物、庄兵衛が事業の話を持出したのを、騒がしい金貨の音の中から聞取つて、一議に及ばず承諾した、

『宜しい、確に承知しました、醍醐君が入つて居らるゝ計畫ならば私も是非御仲間入りをする、有難

うござんす、これは態々痛み入りました。」

戸外へ出ると、天氣は持直して本當の五月晴れ、が、庄兵衛最早大分疲勞れて、歩行く氣も無くなつたので、辻車を雇つて歸りまする、

「アー今日は大分骨が折れた、が併し満足に使つた日だつた……。」

銀行設立

萬國銀行設立に就ては種々の困難が後から後へと湧いて来て、五箇月ほど経つたが何一つ纏つたことがない、最早これは九月も末旬、側目も觸らず熱心に行つて来たのに、肝心の銀行本體に就いてどころか豫備附帯の仕事の上に故障が續々と生えて来て、先づ以て其方へ餘計の心配をするといふ、庄兵衛馬鹿々々しくつて溜らない、と云つて此事業を眞面目に確實に成立させるには、前提附帯の仕事だからといつて放擲つて置く譯にはいかない、其からして固めてかゝらなければならぬので、自烈ツたくつて溜らない、此に於て庄兵衛寧ろシンヂケートなどを當てにすることを止めにして、此話を織戸公爵夫人へ持込んでみやうかと、不圖心に思つてみた、夫人へ行けば何百何千萬は屁でもない、

第一此んな好事業に資金を出さぬ理屈は無い、話が解れば創立は夢の間だ、多勢の細々した人を相手にして面倒臭い思ひをするに及ばぬ、近い將來に必定資本を増加する機運が向いて来るに相違ないから、小さな御客様は其時に來て貰つても可い、然うだ、巧い考案だ、第一斯ういふ途へ資本を費へば、夫人の金を二倍にも三倍にもしてやれるといふもの、此の如くにして慈善の資本を彌が上にも大きくし得れば、夫人も本望といふ道理だと、庄兵衛獨りで決めて了つた。

それから間も無い或朝のこと、庄兵衛は夫人を訪れて、友人の資格と又一方からは實業家といふ資格でもつて、夫人に銀行設立の趣意を説明いたし、濱野の調査に基いて案出したことやら東歐諸事業有望のことなどを、悉しく敷演いたしました、第一庄兵衛は夫人が大の加特力教信者であることを知つて居るから、今度の計畫が成就すれば東歐の中心たる聖都ジェルサレムは之が爲に大利益を被り、安全の位地に置かれ、殊に世界の加特力信者で株主が出来やうといふ機關だから、そればかりでも非常な便利で、場合に由つては法王廳の財府とも爲し得やう、何の途宗旨の爲に好都合だと、言葉巧に説立てた。

夫人の喜悅は一方でない、世にも稀なる美舉である、濱野の考案は非常の功德と、夫人も悉く賛成したので、庄兵衛めめたツと大喜悅で、本氣で話を進めてゆくと、之はしたり、夫人の賛成は主意の賛成、事柄は好い事だが、自身關係することは平に御免と、忌憚なく斷つた、自分は所有の財産を元の

貧人に返してやりたい、これが自分の本願で、神かけて誓ったこと、元來公爵家の富といふのは、投機で貧人の手から奪つたもの、之を一文たりとも殖さうなどは以ての外の心得違ひ、毒の入つた水は消散させて了ふが當然、自分の金で自分のでない、今は貧人から預かつてると同様の、其金を又もや投機事業で殖さうなどと、飛んでもないこと飛んでもない事、賍金は元へ返す、之が罪障の消滅、自分の唯一の使命である……と、夫人は中々聞き入れませぬ。

大概は巧くゆくだらうと思つて居た庄兵衛明瞭と夫人に跳つけられて、大に當が外れたが、何しろ事業其ものには同情を得たのであるから、出来る丈けの事は仕て貰はなければ嘘だと、兼てから考へて銀行設立の曉、其建物に今の夫人の所有家屋即ち自分が現在借りて住んでゐるのを、猶ほ間敷を増して使用したいと申込んだ、實は庄兵衛は初から大立派な家を銀行の爲に新たに建てたいと考へて居つたのだが、かつ子の注意で、當分は今の夫人の家を其まゝに使はうといふので考へた、少しばかり造作をこしらへ修繕をすればそれで使へる、中庭を硝子で張れば営業場になる、階下と物置を手入すれば係々の事務所になる、二階の今までの住宅は、一を重役室とし一を食堂とし、殘餘の六室を他の諸係の事務所にして、庄兵衛の住居には寢室兼居間に一室、顔洗化粧場に一室あれば充分だ、第一三階の濱野の所へ一緒に住んで、飯も食ひ夕方なども一緒に暮すことにすれば何でもない、此んな風にすれば少許の費用で早速銀行は出来るといふもの、少し狭いと云へば狭いが、當初から大袈裟にするよりも却つて眞面目で人受が佳からうと、かつ子は然う勧めたのでございませぬ。

公爵夫人は最初は飽までも斷つた、金儲の目的金銭事業の爲ならば平に御免、自分の庇裡に其様な卑しい恥づべき事業は宿らしたくない、斷じて御免を被ると、言切つたが、宗旨の爲といふこと、目的の大きなことに段々心を動かされて、平素に似ず譲歩をして、遂に承諾をして了つた、夫人に取つては實に非常なる譲歩である、斯くて夫人は承諾の旨を返事はしたものの、返事をする其側から、此自分の構内に信用の機關と云へば宜く聞えるが實は地獄みたやうな醜惡な、取引所や投機相場の猛烈な、廢滅と死の機關が出来るのかと考へて、われと我身體を震慄させたのでございませぬ。

二

謂は急拵らへ、日足らずの計畫である其上へ種々雑多の故障に遭つて行惱んでゐたのであるから、成立は容易のことであるまいと、我も人も思つてゐたそれが、數日経たかと思ふ纒の内に、急にモノになりさうになつたので、庄兵衛嬉しくつて溜らない、或朝のこと、醍醐がやつて来て、大分賛成者も出来たから事業を進行させて可からうと申すので、茲に彌々成案を熟させて、定款を決定致し、會社設立書を作る迄に相成つた。

サア此うなると濱野も中々忙しくなる、何卒して一度大資本の會社の顧問技師になりたいと思つて

居た彼れ、今や多年の夢想を實行する優曇華の花咲く秋が来たのであるから、餘り意氣地のある方ではない彼も大に勢づいて、引張られて、物事が待遠しく、一生懸命に勤めるやうになつてきた。

然るに、之と反對なのはかつ子、事業には非常賛成で大に歓迎を致してをつたのだが、いよく出て來るとなつた今日には至つて冷淡、何か考へ事をして氣乗りが致さない容子である、これは何故であるかといふと、自體心質に曲つたことの嫌ひな彼れかつ子は、此度の銀行設立に就いて種々と暗い穴や法理に合はない不正の點を嗅付けて知つてゐるので、若しや銀行が出来は出来ても、出来勿々飛んでもない事件が露顯して大騒ぎになるところか法網にも觸れることがあつた日にはそれこそ恢復がつかぬこと、何だかぐらつて曖昧に思はれて今にも然うなりさうに氣遣はれるのに、そんな危険な薄暗いところへ平素大な子供と呼びつけてゐるくらゐな親愛な兄を關係させるといふこと、それは實は止めさせたい、困つたことが始まつたと、かつ子は思つてゐるのでございます。

で、此朝、醍醐を送り出して例の圖の掲げてある室へ戻つて來た庄兵衛は、銀行が彌々モノになつたので非常に嬉しさうな色で輝いて『先づ〜出來た、有難い〜』と叫び廻はる、敏之も嬉しく、眼に潤を以て庄兵衛の兩手を痛くなるかと思ふ程握つて喜んだ、が其中で獨りかつ子は、顔を少し青くして、鳥渡庄兵衛の方を向いたきり、喜悅の色を見せません、庄兵衛は嘸ぞ喜ぶことだらうと思つてゐたのが爾うでないので怪訝顔、

「オヤ、かつ子さん、和女は何とも思はぬのですか？ 嬉しくないのですか和女は？」

云はれて始めてかつ子は笑顔をして、

「嬉しうござんすとも〜、私は喜んでをりますの、本當でござんす。」

庄兵衛は此から敏之に彌々確定したシンデケートに關する委細の事を話したが、聞いて居たかつ子は、話の中途へ、至つて落着いた調子で口を出して、

「へー？ そんなら銀行の株は公衆募集をしないで、然うやつて五六人の人だけで集つて好加減に分けて決めて了ふと、かういふのでござんすね、それで可いのでござんせうか？」

庄兵衛は勿論と云はぬばかり、

「可うがすとも、勿論です、大丈夫、和女我々共が失敗をするやうなことに御思ひの？ マア安心なさい、發起の人達は財界棟梁株の顔揃だから、立上りに萬一難かしい問題が起つたつてそりやあ平氣ですわ、第一其人達が株の五分四といふものを引受けるのだから、出來上つたも同様の理由、もう直に創立證書を公證役場へ持つていつて作成することが出來るです」筆者云、法律家でないから解らぬが佛國當時の商法は勿論我國のとは異つたところもあるでござんせう」

かつ子は斷乎として逆つた、
「へエー？ 私は會社は株式が皆な引受濟にならない内は設立へることは出來ないやうに法律は出來

てると思ひました。』

之を聞いた庄兵衛はハツと思つて、かつ子の顔を見詰めて居たが、

『そんなち和女は商法を研究したのですか和女は？』

かつ子は口へ出しては言はず又別に此うといふ理屈があるのではないが、何となく不安心なやうな恐怖いやうな心持がしてならぬから、前の日窃と商法の會社篇のところを讀んでみたのだ、それを今庄兵衛に的を刺されたので、流石にハツと思つて顔を紅らめて、會社篇を讀んだことを嘘を言つて置かうかと考へたが、思直して、笑ひながら真直に白狀した、

『正直を言へば私は昨日商法の會社篇のところを讀みました、讀んでみると馬鹿正直な私は心配で溜りません、宛然醫師の書を読むと其後では簡單とした病氣が出ても氣になつて溜らないのと同じ様に、心配が取れないのでございます。』

庄兵衛は面白くない、こりやア自分を信用しないからだ、而して婦人の細かな疑ぐり深い小賢しい眼で自分を見張つて、商法までも讀んだのだなど、頗る不愉快で溜らない、そこで遠慮が出たやうな氣がしたが、其様なことは何でも可いと云つたやうな素振りを見せて、

『ヘン、法律が如何の此うのツて、一々面倒臭い法律の文面にこだわつて居た日にやア何一つ出来やしませんわ、其様な馬鹿正直をやつて愚圖々々して居る内に、競争者はズント前を越して進んでい

つて、此方は虻蜂取らず了ひでさア、資本の金額が決るのを待つなんてそれは到底出来ぬこと、好加減のところでおツ始めるでさア、第一些たア株を我々共の爲に取つて置く必要がある。』

かつ子は其美しく重々しい聲で斷然と告白した、

『それは不可せん法律が禁じてをります。』

『成程法律では禁じてゐる、禁じてゐるが併し世間は皆此術を行つてゐる。』

『それは間違つて居りませう、悪いとなつてゐることを爲るのでござんすから、私は賛成は出来ませぬ。』

三

眞面目にかつ子の云ふことを聞いて相手にしてゐると正しい道理には服さなければならぬから、庄兵衛は此時急いで、二人の話に當惑して黙つたまゝ聞いてゐた敏之の方へ向き直つて、

『敏之君、君には我輩を信用して貰はなくちやアならん、斯う見えても我輩は些たア經驗も有つてをるし、苦勞もしてをるから、總て金銭事業の方にかけては安心して任して置いて貰ひたい、君はドンドン好い考案を作らへて持つて來て呉れ、はそれで可い、我輩はそれを活動させる方面に全力を注いで、危道に陥らずに出せる丈の利益を生んで御目に懸ける、實際家としては然う申上るより外はない。』

物事に臆病で氣の弱い敏之、直接に返事するのを避けて、談話を戯談の方へ廻はして、

『妹は監査役には持つてこいですよ、生れながらにして學校の先生ですから。』

『ハ、ハ、ハ、結構、我輩も一つ御弟子入を願はう。』

かつ子も笑ひ出す、談話は又平時のやうな打解けた一家族の調子になつて了つた。

『相良さん、かう私が詰らない心配を致しますのも、敏之が大事と思へばこそで、又貴方のことだつても失禮ながら私は他人と思つては居ないのでござんす、そりや本當に貴方が御思ひのそれよりも私は思つてゐるのでござんす、それが貴方、後暗い事に係累つて、終局に飛んでもない境遇にでも陥りましたら、貴方何うでございませう、泣いたつて追付きはしません、投機だとか相場だとか、思惑事業は私は考へても悚然とします、今度の事業は貴方が私に寫させなさいました定款で見ますと、第八條に會社は一切定期的の取引を行はずとしてあつて、私はそれを拜見して大層喜んでをりました、それは總ての投機や思惑事業をするのを禁じたのでござんせう、それが後で貴方に承れば、其規定は表面で、遵ふ遵はぬは其時のこと、何の會社でも表面には定めてあつて併も全く遵つてはをらぬ汝は本當に馬鹿正直だと、貴方は仰有るのでござんすもの、私は實は如何いふものかと、心配してゐるのでござんす、貴方、私の考案を申上げてみませうか、私ならば會社の資本を、株として發行する代りに、社債として出しますね、商法を一寸噛つたばかりで識つたかぶりをする生意氣と仰有るか

も知れませんが、株組織でありませうと、株主といふものが會社の損益に預かつて、危険も責任も存負はなければなりません、社債となると一定の利子を拂ふ丈で、詰り社債券所有者は夫丈の金額の單に貸人で、會社の損益に關係しないのでござんすから、極安全と申すもの、弊害を流すことも少い道理でございませう、ね、相良さん、貴方何故社債に御據りなさいません、其方が安心で宜いやうに思ひませうか？』

かつ子は内心庄兵衛の行法を非常に危い方法だと思つて心配で溜らぬのであるが、其心配を隠す一方には哀願的に説いて齟へさせやうと務めた。

『庄兵衛は依然同じ口調、そののみか少し戯談さへ交せて、

『社債、社債は斷じて不可ん、社債にして如何するのです、社債なんて死物ですわ、和女は投機を酷く恐れて御在ぢやが、事業を企つるに當つて中心的機軸となるものは、投機主義より外にはないです、我々が企てるやうな大企業においては投機は心臓も同様です、即ち其作用で血液の循環を行はせ、之を吸収し、之を分賦し、大企業の生命たる金銭の大流通を整へるのです、投機といふことを行はなければ、資本の大運行も其進行から生ずる文明的大工事も根柢から不可能となるのです、御覽なさい、世人は擧つて株式會社を罵つて、ヤレ賭博機關だの惡徒の集團だの、ヤレ殺人機關だの暗殺場所だのと、様々の惡口を云つてるが、若し株式會社の仕組が無かつたら如何でせう、鐵道も出來ぬし、近世大規

模の諸企業も成立たぬし、世界は舊態のままで停止して了ふ譯だ、何故と云へば、一箇の資力では大
 事業を成就させることは出来ぬし、一箇人若くは數個人が團結したからつても、進んで大事業へ手を
 出す危険を踏まうといふものはありはせん、目的が大きければ危険もそれに伴つて大きいのは當りま
 へ、計畫が大きければ種々な想像も起きてくる、富圖だつても大圖は少いが、當れば大したもの、即
 ちそこに人間の情熱が起つて來、生命が活動してくるのだ、然ういふふうの望みを抱いて人が金を持
 寄つて來やうといふのに、何處に悪いところがありますか、危険に臨まうといふのは其人の承知の事、
 其危険の度合は各自持分の額に應じて定まつて、且つ其額に限られてあるのだから、其以上危険を踏
 むことはないのです、成程損をする人もあるに相違ない、が又儲ける人もある、誰も好い數の圖を引
 きたいには相違ないが、悪い圖を引くことも覺悟してかゝらねばならぬのだ、人間といふものは誰も
 彼も僥倖を目懸ける動物で、明けても暮れても念頭には慾を有つてゐる、萬一を願つてゐる、それも
 定つた心ではない氣まぐれの慾望だ、金も儲けたい、帝王にもなりたい、神にもなりたいと、人情は
 皆其様なものでさア。』

四

初は好加減談半分に話してゐた庄兵衛、段々眞顔になり乗地になつて、其短かい脚で體軀を屹然

と支へながら、聲が天の四方へ達くかと思はれるやうな調子で猶も述立てる、
 『試に今我々の計畫する萬國銀行に就いて考へて御覽なさい、此銀行が設立られれば、世界の地平線
 上未知未開の東歐西亞に更に一廣い原土を開發し得るではありませんか、文明の進歩の爲め又黄金
 を探さうといふ想を有つてゐる人々の爲に、限りもない富饒の土地を提供し得るではありませんか、成
 程我等の志望は頗る大い、又其結果が成功に終るか失敗に終るかは素より明言することは出来ぬけれ
 ども、其不明不定なるところにこそ、我々は大なる希望と樂念とを持つて居るのだ、しかも我輩は其
 必ず満足すべき結果を擧げ得ることを信じてをる、而して此事の有望なのが知れて來れば、非常な賞
 讃を世人から博すのは必定、我輩は確信して居る、此度の萬國銀行は固より總て普通銀行の行の營業
 を悉く行、一切の金融業、割引も當座も其他の貸借も仲立も、總て普通銀行の行の行を取扱ふは
 勿論だが、我等が殊に斯うしたいと思ふのは、此度の銀行を主として敏之君の立案にかゝる事業を經
 營する機關にしたいといふ其事だ、それが新銀行の眞の目的、任務、斯くしてこそ多大の利益を擧げ
 得べく勢力を張り得べく、我輩の望みに副ふを得べきだ、要するにだ、新銀行は東歐西亞に經營すべ
 き幾多の財政及工業事業に援助を與ふることを目的として設立へられるもので、其成功は我輩におい
 ては殆んど疑ふ餘地はないが、其處へ和女は詰らぬ心配をして、ヤレ少數のシンチゲートを作るのは
 宜くないの、其シンチゲートが一割の割増を利益するのは悪いの、株が決定らぬのに開始めては宜く

ないのと、一々法律に拘泥つて細々しい事はかり言はれる、それぢやア何も困るです、成程實際資本全額が引受済にならぬのをなつたやうにして會社を成立させるのは法律に背くことは我輩も知つてを、だから此引受未済の株は名義人を作らへて其名のものにして、銀行の爲に取つて置けばそれで宜い、それで何にも差支は無い、後から欲し人は幾らもあるのだ、それを和女は、思惑だの投機だのと云つて酷く攻撃をなさるが、そりや時と場合に由りますわ、今我輩が夢想してゐるやうな大企業には、投機主義は根源の生命、焼點、第一二千五百萬といふからが餘り少額の資本では、各種の大企業大機關を動かさうとするに、夫れツばかりぢや新雜棒の一トくべにも足りませんや、我輩は事業の擴張に連れて之を二倍にも四倍にも五倍にもしたいのだ、和女、彼の不思議なほど着手すべき事業が積んであるのに資金は幾ら有つたつて足りる譯はないではないか、大な仕事をしやうとするには、少しくらの犠牲は仕方がない、大功は細瑾を顧みず、人心を驚倒しやうといふに、少し位人の足を踏潰したつてそりやア何も仕方がない……。』

油が乗つて庄兵衛滔々と辯じ立てるのを、熟々と視てゐたかつ子、元來生といふことに憧がれて剛健で活動のことが好きな女だから、庄兵衛の述立てた理論其ものには敬服しないが、其自己を信ずることの厚いのと熱心の強いのは悉く敬服して、識らずく庄兵衛の人物が大層立派なやうに感じた、固より眞直な性質のかつ子だから、自分の所信は飽くまで枉げない、只だ女丈け、一方に感心を

したので、議論に打負けた容子をして、

『宜ござんす、何を言つたつて私は婦女ですから氣が弱うござんす、此世の中に生きてゆくのに、怖いことばかりのやうに私は思ふのです、マア何でも可から、成たけ罪の無い人達は傷めないやうにして、而して私の親愛する兄は、倒さないやうにして下さい、御願でござんす。』

庄兵衛は、思はずも辯じ立てた大議論に、我ながら氣がついて、然も大計畫にかつ子を賛成させたやうなので、何か爲ることを爲遂げた氣がして、急に好人物の容子を作つて、

『マア、心配はなさるなよ、私が大層怖い悪人のやうなことをするのはそれは戯事です、諸人金満家になれば可のですわ……。』

これから三人、今後の方法順序を協議いたして、會社が設立し次第其翌日にも敏之は馬耳塞へ立つて其處から乗船して直ぐ東歐へ出向いて、一日も疾く事業着手の準備を始めやうと、打合せを致しました。

が巴里の金融市場では最早既に噂が廣まつて、相良が銀行を立てるのださうだが中々難かしからうの、駄目だらうの、何のかのと種々の取沙汰、其内に噂は變つて、何豈今度は大成功、愈々近々モノになると、最初はコン／＼囁いてゐたのが、段々眞物になつて、其聲も高くなつてきた、庄兵衛の住居の容子を見ると、昔門總公園地に住んでゐた全盛時代のやうに、何となく活氣が立つて、其應接室

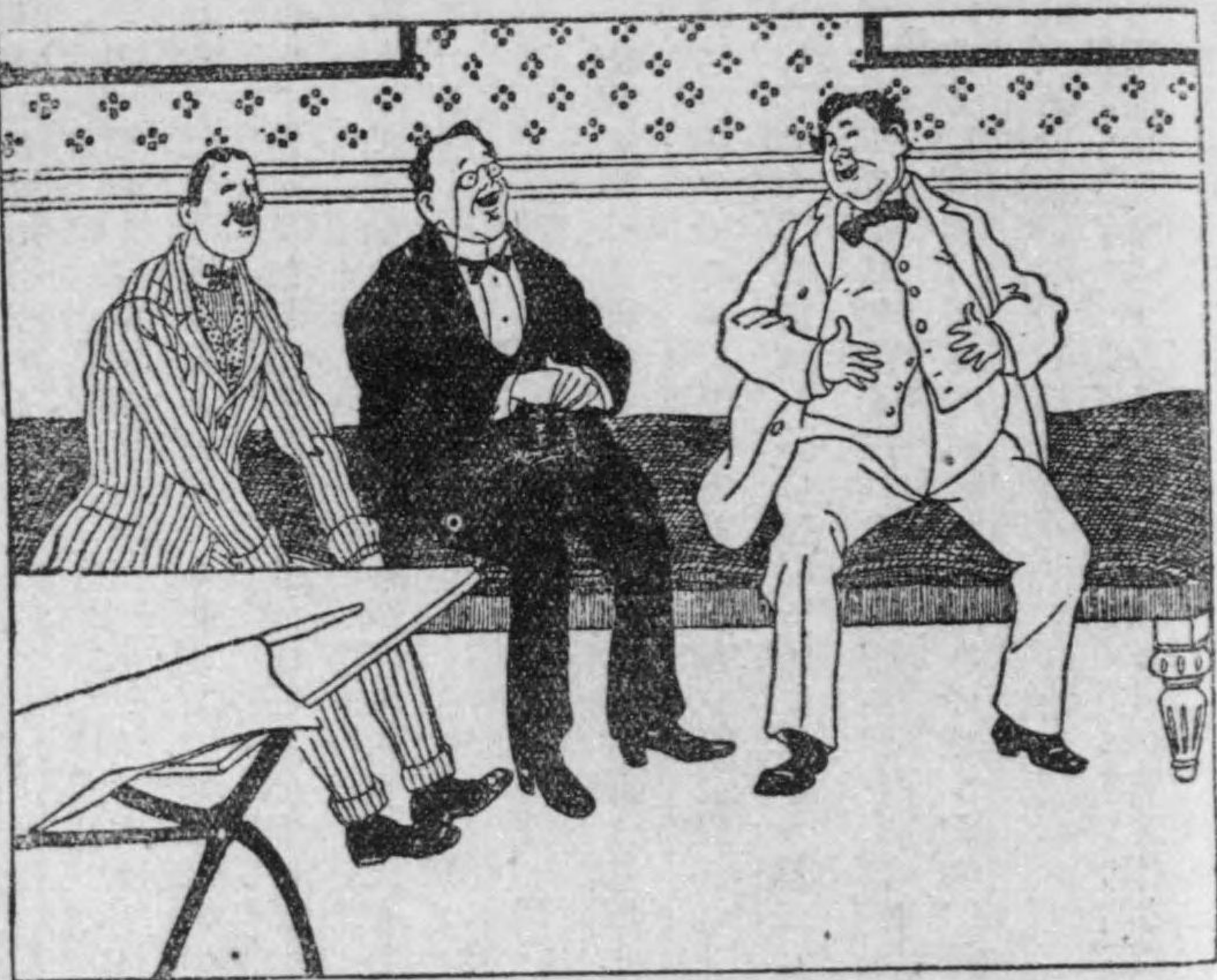
客座敷は朝から物事の願人依頼人で満員、偶然かもしれぬが増島信平もやつて来て、目下の世間談をする、それから取引所の仲買連中入替り立替り、四邊に響く大聲で話をする猶太人の谷田部、顔の赭い肥つた谷田部の義弟土井、其他才取り客引様々の株屋連中、成瀬も紛れこんでくる、馬島もやつて来る、馬島は此頃大分景氣が悪いので、大に躍起勃起して毎日のやうにやつてくるが、未だ何の話もない、此ういふ風に人の出入りが門總以來の大人數。

五

或朝見ると、未だ九時だのに應接室は疾や客で一杯になつてゐる、今日まで未だ別に來客應接の爲に雇入を雇入れず、今迄の書生一人で間に合はしてをるので甚だ不自由勝、庄兵衛自身客を迎ひにしたり、送りに立つたりしてゐるといふ始末、此日も自身で、客を待たしてある室の戸を開けにかゝると、矢野龍吉が來合はして、今入らうとする丁度出合頭だ、が庄兵衛は二日前から探してをつた阪谷が丁度來合はしてゐたのを見つけて、先づ其方に逢ひたいと思つたから、矢野を鳥渡押留めて、

『矢野君失敬ちやが鳥渡待つてくれ給へ。』

阪谷は相變らず女みたやうな狂々しい笑を作つて、謹んで相良の御用を承る、庄兵衛は明白地に事業の話を持出して、



『イヤ阪谷君、君に少し力になつて貰ひたい事があるのだ、君一つ我輩に名義を貸て呉れんか、我輩が持つ株若干かを君の名前で有つて貰う、何豈金も何にも要らぬのだよ、只名前だけ、拂込は相場で儲けて、筆の先ですれば可いのだ、ネエ阪谷君、我輩は何も隠しはせぬ、此う明白地に言つて了ふ、これも君といふ人物を識つてゐるからだ。』

阪谷は庄兵衛を凝乎と凝視つてゐたが、
『だつて貴方法律では株金は現金で拂込を了さなければならんことゝなつてゐるではありませんか、幽霊株は怖いですよ幽霊株は、何豈私や何だつても宜いですが、貴方はそれで可ござんすか、貴方さへ宜ければ私や何にも申上げぬ、私を信用して下さるのは此上も無い私の名譽、

何事でも御用を務めませう。』

庄兵衛は阪谷の機嫌の好いやうに、増島君は君に大層信用を有つてゐるから、之からは保證金なしに君の注文を受けると云つてゐるなど、好加減の煽動文句、それから前夜君が此木糸枝と歩行してゐたところを見たが羨ましい限りだなどと、大に氣を持たせた思はせぶりを云つて、而して、

『時に今の話の續きだが、差詰め君に捺印して貰ひたいものがある、委任状や其他の書類だが、書類を一ト纏めにして君のところ迄届けて差支は無いかね?』

『宜うがすとも、御安い御用、何でも御持參なさい。』

阪谷は別に謝禮のことを云ひません、此んな事を仕てやる位は禮にもならぬことと思つたからで、黙つて居りますと、庄兵衛は、眞實の禮は後のこと、差詰め少しでも手間を要することだから世間の定にならつて手間賃捺賃に捺印一箇につき一圓づゝ出すと云ふと、阪谷は點頭いたまゝ、承知の旨を答へて、而して微笑を浮べながら、

『貴方は此度大變な御身分におなりのですから、又私も何かと御助言を願ひに出ます、其節は何分宜しく。』

『宜しい、ちや今日はこれで御別れしやう、宜く氣をつけて人に知れぬやうに、而して餘り女の子に可愛がられちやア不可んせハ、、、。』

此に兩人は元氣に袂を別つ、阪谷を元の客間から歸しては人に顯るから、横手の他の戸口を開けて出してやりました。

元へ戻つて客間の戸を開けて矢野を呼入れる、見ると矢野龍吉、今日は如何にも見すばらしい容子をして、フロックを着てはゐるが袖口のところは珈琲店の卓で擦れて地糸が現て穢くろしくなつてゐる、其後人の出入るところを立回つて知人を捉まへ職業を發見けやうとかいつてゐるが、思ふやうに見つからないで、段々困つて、今日は庄兵衛のところへやつて來たのでございます、龍吉そんなに困つてはゐるが、外飾は依然何所までも張つて、取引所は大の嫌ひだなど、取引所のことゝいふと貶してゐるが、これは内實取引所では金儲が出来ないからだ、顔容は相變らず氣取つて、其立派な口髯を撫で、時々美麗ぶつた文學的の言葉を使ふところは、何處までも大學出といふことを見せたいのでございます。

『どうも失敬、實は過日から手紙を一本上げやうと思つて居つたのだ、銀行の方も追々進んで來て、役割も出來た、君の名は第一に考へて入れて置いたが、文書の方を引受て貰はうと思つとるのだ。』

庄兵衛の言切るのを待兼ねて矢野龍吉、

『御深切誠にどうも有難い、御禮を申すが、それはそれとして此に一つ貴方に御相談申してみたい事がある。』

と云つたが、龍吉は直と其話を發言さず、何時までも前置みたやうな言を並べてゐたが、其話の内に今度の萬國銀行設立に就いては新聞紙を何れくらゐの程度で利用するかといふ問を出した、庄兵衛は直ぐに火蓋を切つて、新聞は大事だ、新聞では成たけ餘計提灯を持たせる、新聞には出来る丈氣張る積り、一大虚を吹へて萬大實を傳ふといふから、大小に拘はらず總ての新聞は巧く使ふ、成らうことなら新聞といふ新聞は悉皆買収したい位だが、其様な金は無いから、と斯う庄兵衛は言つて、

『如何ぢやらう、一層銀行自身の廣告機關を設けては？ 君は如何考へる、我輩は好い考案ぢやないかと思ふが、一つ練つてみようぢやないか。』

『宜しい、貴方が然ういふ考へなら私も考へて見ませう、考へて見ませうだが、併し如何です、貴方が一つ己人的に一新聞を經營なすつたら？ 全く貴方の自由になる新聞を、不肖ながら私は主幹となつて働きます、其新聞には毎日一頁位を貴方の爲に使つて何くれとなく貴方の利益になることや貴方を謳歌する記事を並べます、要之一時的でなく永久不斷に貴方と萬國銀行を辯護して、敵銀行に競争の餘地なからしむるです、如何です、一つ行る氣はありませんか、エ、相良君？』

龍吉到頭本性を吹き出した。

『それも可が然し資金に由りけりだ。』

『資金は大したものはいりません、割安で一つ好い賣物が實はあるです。』

龍吉いよ／＼發言した、其買収の出来る新聞といふのは「希望」新聞であることを告げて、此新聞は二年前加特力教に屬する華族の一小團體に依つて經營されたもので、宗旨の爲に随分激烈な筆法を以て行つて來たものだが、賣口が至つて少く効顯も更に擧がらぬので、最早近々廢刊して丁ふだらうと評判が立つてゐるのだといふ事。

六

實は自分の糊口のため、お爲ごかしに過ぎぬのだが、矢野は熱心らしく説きつける、聞いて庄兵衛は打叫んだ、

『ア、あれか、彼新聞ちや二千位しか出ぬ新聞だ。』

『ですから我々のものにすれば紙数は勿論増させますは。』

『だが彼新聞は政府反對の新聞だらう、然うとすると大木にも反對する理由になる、こりやア些と困るなあ、當初から大木に喧嘩を買ふのは矢張不得策だからなア。』

『イヤ大木君ばかりぢやない誰を怒らしても宜くはないですが、併し一體銀行のやうな金錢商賣の會社が機關新聞を有する場合には、政府の味方にならうと反對に立とうと、それには敢て重きを置く必要はないです、何故と云へば、新聞が筆法に恩威を示して味方に立つてやれば、政府は國債や市債や其

他の公債を發行するの役に立つて貰ひたいから好く接遇してくれるし、反對を示して攻撃の態度で對つて行けば、其同じ政府は新聞が代表する銀行に向つて緩和策を執つて百万御世辭を取る、怖持たかも知れぬが味方であるよりも反つて好い恩恵に預かることが出来るです、だから「希望」の色別などは如何でも宜しい、兎に角一新聞を有するのは得策で、一の勢力を作るといふものです。』

庄兵衛は相手の云ふことを聞取つて沈黙稍久しい裡に、例の鋭く敏捷な男だから宜いと思ふと直ぐと先方の意見を自分のものにして、こいつは一番矢野の云ふ通り「希望」を買収して、其苛酷な筆法を一變し、之を見大木に提供して恩に被せ、此方は何處までも加特力の主旨を捨てず、兄の出やうに由つては脅迫の道具に用ひ、宗教の名義の下に何時でも猛烈な戦闘を開始することが出来るやうにして置いて、場合に由つては宗教の利權を振舞はして肉薄してやる、然うだ、頗る面白いと、心の裡に考へながら、突如と訊いてみる、

『ぢや「希望」新聞は直ぐ何うにでもなるのだね?』

『そりや談は容易なしです、今有つてる奴は金に困つて持てあましてゐるのだから、小一萬もくれてやつたら容易なく此方の有ですは、然うすりや後は自由自在。』

庄兵衛は又一二分考へてゐたが、

『宜しい、定めやう、では時間を約束して君の言ふ所有主の人を此へ連れて来てくれたまへ、君に主幹をやつて貰ふ、我輩は種々な材料を蒐めて君の手へ渡す、とマア此ういふ手順にする、で段々と眞面目に汽關を熱たためて、大な一動力に作らへ上げやう。』

庄兵衛は起上がる、矢野も立かゝつたが、麵包に有つことゝなつたのだから嬉しくつて、顔に喜悅の色を包みきれない、それでも表面には乙う氣取つた自惚れの笑を見せて、

『先づ々々我輩も本職に歸り得たといふもの、畢竟之も筆の御蔭、有難い々々!』

庄兵衛は矢野を見送つて立出ながら、

『君新聞を創めるとしても人間は先づマア誰も頼まぬでおいでくれ給へ、我輩も考へてみんならんから……、只一人我輩が世話してやらなければならぬ男がある、それは曾根悦郎といふ未だ若い筆の立つ中々見込のある人物、こりやあ文學方面の編輯へ使つたら可いと思ふのだ、君のところへ行かうに言つてやつて置くから、行つたら逢つて呉れたまへ。』

矢野が横手の別の入口の戸を開けると、三田男爵夫人が待合室に待つてゐるのが見えたので、少し小聲で庄兵衛に、冷かし半分、

『ヤア此んな美麗なのが待つてゐるのですね、御邪魔をして御氣の毒さま……。』

抑捺つたが庄兵衛は其實夫人の來てゐるのを知らないで居つたので、ハツと思つたが態と無頓着な容子を作る、矢野は其態に澄すには及ばぬとばかり、カラ／＼と笑ふと、庄兵衛も笑ひ出す、茲に二二

人は強く握手をして別れました。

座へ戻つて一人になつた庄兵衛、もつて行くともなしに身體を其處に懸つてる姿見鏡の前へもつていつて、頭髮を直す、頭には未だ白髪が一本も無い、色氣は未だ充分あるが、事業の話が始まつてからは悉皆其方へ氣を奪られて、女の方は構つてゐる暇が無かつた、矢野の前で夫人が居たのを見て氣を咎めなかつたのも強ち嘘ではなかつたのだ、が、いざこ



れから差向ひになると思ふと、自然と身體を取繕ふ念

慮が出て、それで鏡の前へ立つて見たので。

庄兵衛は男爵夫人を室へ招入れて、極めて町重に、

『失禮致しました、サア何卒御座り下さい……』

見ると今日夫人は、紅い口唇と輝く眼と濃い眉の下に、窪んで燃ゆるやうな眼容怪しくも人を誘惑

しさうな色を見せてゐる、何の用談で態々來たのだらうと、庄兵衛半分訝かし氣に思つてゐると、夫人は漸く訪問の目的を述べた、

『突然自分勝手な事で御邪魔を致して誠に恐れ入ります次第でございますが、此う申しては失禮でございますが、貴方も私も同じ關係の、満更御縁も無い人間でもないと思ひまして、御願ひに出ましたので……、他のことでもございませぬが、此度宅へ料理方を一人雇入れることに致したのでございますが、承はりますれば、其本人は以前貴方の御宅で働いて居つた者とやらで、それで實は其者の素性を、一應御訊ね申したいと、御邪魔を致した譯柄で……』

七

何の事かと思つたら詰らない、庄兵衛は訊かれることを一々思に被せるやうにして町重に答へながら、夫人の顔から眼を離さずにつた、これは夫人の眞の用向は此に無い、料理方詮議はホンの付けたりと、敏くも目星をつけたからで、料理方こそ宜い面の皮、さて敵本は何れに在ると、庄兵衛心に案じてゐると、果して此方の見た通り、夫人は段々言葉に懸引を用ひた後、兩人共識つてゐる間柄の福岡侯爵のことを話し始めて、實は侯爵から承つたが、此度貴方は萬國銀行を御設立になるさうだがと、話はそろく本問題、金を巧く使はうと思ふと中々心配なもの、世間に確實な株や證券は中々

少い、貴方の此度の御計畫は誠に結構なことであると、夫人は到頭語りだした、庄兵衛はハ、アこりやあ夫人も進んでシンヂケートの仲間入をしたいといふのだらう儲けさせてくれといふのだらう、然し金が拂へるか何か譯らないと、眉に唾をつけた氣で聞いてをります。

『私は自分一人丈けの、良人にも自由にさせない資金を少しばかり貯へてをりますが、正直金銭のことは中々面倒な厭なことの多いものでござんして、貴方マア女なんぞは金銭の始末にはとんと不向なもの、殊に若い身そらだと猶のこと、他人様も彼是申すやうなわけで、私も一人で如何したら可かと、途方にくれることがあつたのでござんします、過般の株の受渡の期日にも然うでござんした、誰といふ相談相手が無いもんでござんした爲に、到頭貴方少からぬ損を致して了つたやうな仕合せ、誠に心細いのでござんしますが、丁度貴方の昨今の御位置は私に取つて極都合の好いことで、種々世間のことを御承知で居らつしやる譯ですし、萬事御指揮を頂いたら、何んなにか幸福と存じまして、打付ながら御迷惑を願つて萬事相談相手になつて頂きたく、罷出ました次第なので……』

實際社會の一大貴婦人も其裏面を見ると斯ういつた投機商人、然も至つて過激な賭博師、門閥がどうの亭主が外交官だのと、知らぬ巴里の實際社會には禮拜されてゐるけれども、金銭に關した人間の前には暖味な物乞人になつて、ビヨコ／＼立回つてゐるのでござんします、此女口唇は血を濺いだやうに物凄く紅く、眼は燃へてゐるやうに殺氣立つて進つて、其熱烈な心情を露はしてをります。

庄兵衛は夫人の口調で見て解つて、ウムこりやあ自分も仲間に入れてくれといふ提供をしに來たに違ひない、それに何だか魚心に水心があるやうだが、存外面白い相手になるかも知れぬと、直ぐと折返して、

『有難い仰せ、イヤ私の經驗が貴女の御利益になることなら、何事なり御用に立ちませう、私の光榮でございます。』

と云ひながら、懸けてゐた椅子を進ませて、庄兵衛夫人の手を執りにかゝつた、此所爲に夫人は少し醒たやう、ハツと思つて手を退いた、そこまでは未だ疾い、達する時には達させやう、亭主男爵の餘りの鄙吝に愛想が盡きて、仕方が無さに凋びた黄色い檢事總長の神村老爺を綾なしてはゐるもの、それも實は今御荷物併し他の男に手を出させるのは未だ未だ、ア、もう男子も當にならぬと、夫人此頃は男には冷淡の態度を執つて、只相場熱金一方に情緒を燃してをりますので……、がそんなことを色に現はしては、身分と云ひ教育柄と云ひ外聞が悪いと、ハツと氣がついたから起ち上つて、『では相良さん、今伺つた料理人に就ては別に御不満も御有んなさなかつたのでござんしますね？』夫人が急に起ちかゝつたので、庄兵衛心の裡に物足らぬ思ひ、残念ながら一緒に起ち上る、何のことた、何しにやつて來たのだ、又しても與し易からぬは婦女、マア／＼勝手にするが可い、利益になれば何時でも相手になつてやらうと、庄兵衛心に棄て、かゝつて、而して態と一聲高く、

「何にも不満足はございません、只家の都合で暇をやつたので……。」
 起ちかゝつた夫人は何か鳥渡思案して、躊躇する色が見えたが、庄兵衛が叮嚀に叩頭するのを、軽く受けて出て参る、さて庄兵衛は、夫人を送り出しながら、戸の處へくると、案内も乞はず戸外から家の人みたやうに遠慮なく戸を開けにかゝるものがある、誰かを見ると悴の政治郎、今日親父のところへ午飯を食ひに來たのでございます、政治郎は三田夫人が出てゆくを見て道を開けて通して、黙つたまゝ自分も頭を下げて挨拶を致しながら、歸つてゆくの見送つてをります、夫人が歸つて了つたので、軽い笑を洩しながら、政治郎は父にいふ、

「其後事業の法は如何ですな、儲かりさうですかね？」

未だ至つて若輩で、揚句の上に病身なのに、いやに容子振つて大人らしく氣取つて、生意氣な事ばかり言つてをります、聽て其處に在つた肘懸椅子へ腰を下ろして、新聞を手に取りながら、

「私は構はぬで應接の方をおやりなさい、尤も邪魔になるなら彼方へ行つてゐます……、私少し早く來過ぎた、來がけに醫師の處へ寄らうと思つて寄つたが、醫師が居らぬで、それで來かたが疾くなつたんです。」

折柄書生がやつてきて、御隣家の芳村伯爵夫人が御目にかゝりたいと御入來になりましたと告ふ、庄兵衛は聞いて、ハテナ養育院で逢ひは逢つて識つてゐるが、何しに來たのだらうと、少し意外に思

つたが、兎に角直ぐ此室へ通せと命つけて、そして更に行きかゝる書生を呼留めて、

「今日は大分疲勞たし、それに腹も減ってきたから、殘餘の客は皆斷れ。」

八

芳村夫人は、政治郎が大なる肘懸椅子に後向になつて懸けてゐたので、氣も付かぬと見えてズツと室内へ入つてきた、庄兵衛見ると又意外、夫人一人だと思つたら娘の有子嬢も一緒にゐる、何の爲めの來訪かしらぬが、二人斯う打連れて來るところで見ると、何か仔細のあることだらうと、庄兵衛二人の外貌を見ると、二人共青白い顔に、何だか物哀し氣な風體、母の方は瘦ぎすで、身長が高くつて、頭には霜を頂いて、過ぎた時代の人間といふことが言はずとも見えてゐる、娘も最早年頃を超えて、醜いほど、長い頸をして、そして二人とも活氣が無い。

庄兵衛は椅子を差出し、非常に恭しい敬禮を施して上座へすゝめて、

「これは――、御尊來を頂きました、有難い仕合に存じます、御用もございませうことならば、何事も承りませう。」

夫人は何處までも尊大の風をしてゐる、が偕て中々言出し悪いと見えて、オジ／＼としてゐたが、遂に口を開いて、

「アノ、實は織戸公爵夫人に御目にかゝつて御話を致しました結果、此うやつて當家へ上る氣になりましたので、本當の事を申上りますと、最初は上らうか如何しやうかと、種々に迷つてをったのでございます、私のやうな如此な年齢になりましたは、爾う無分別なことも出来ませぬ、それに現代の事は私には解り兼ねることが多うござんして、滅多に上つてもと差控へてをったのでございます……、が娘といろく相談いたしましたして、唯只子供の爲と存じ、之が自分の義務だと思ひまして、自分の恥は次に致して、斯うやつて罷出ましたので……。」

夫人はこれから言葉を續けて、織戸夫人の仰有つた通り、成程此度の萬國銀行は通り一遍の俗人には普通の銀行と異りやうに見えもしやうが、我々宗旨の者から見ると、誠に尊い高尚な目的を以て生れたもの、東歐に於て事業を開發し、耶蘇の舊跡に偉大な利現を與へる誠に奇特の計畫で、自分達は有難い、新銀行の成功は請合である云々と、先に庄兵衛が新銀行設立に織戸夫人を立てせやうとした時用ひた宗旨を楯に取つた文句其まゝを信仰して、此夫人も有難がつるのであります。

夫人に聲までも願はせて随喜渴仰されたので、流石の庄兵衛も驚いて、少しドギマギいたしましたが、成程是程の効能があるのなら宗教をダシに使つたら銀行の設立も容易だらうと、獨り笑壺に入りました。夫人は猶も、

「そこで、ト、の詰り私共いろく相談をいたしました結果、今迄は最早どんな事があつても仕まい

と思つてをりました事を、今度は一つ行ふことに取極めました、それは外でもございませぬ、此と許の額でございしますが、所有致してをります金を働かせて、利息の生る方へ使ひたいと、斯ういふ考へになりましたので、正直のところ其様な考へは嘗て心に浮べたことがございませぬ、至つて舊弊な考へで、考へて見ますと餘り感心したこともないと思ひますが、併し先祖代々から然う育てられたをりますので、何分にも然ういふことになりませぬ、マア我々共のやうな人間は地面で食べてゆくのが本統だと思つてをりましたのでございます、所が其又地面と申しますものが誠に薄命なことではございまして……。」

こゝまで言懸けた夫人は少し顔を紅らめた、といふのは今迄繕つてゐた自分一家の凋落を、こゝで外へ現して了はなければならぬので、如何にも心苦しいのでございます、が最早此うなつたら仕方が無い、

「舊は可なり大な地所も有つて居つたのでございますが、種々と不幸が重りまして、只今有つて居りますのは、極小さな田畑一箇所きりでハイ……。」

九

芳村夫人の内幕話、聞いて庄兵衛は氣の毒でならないから、夫人の遠慮を取除くやうに、元氣を付

けて、

『ですが夫人、けふ日地面で暮してゆくといふ人は實際ございませんよ、先祖傳來の地面なんぞは、今日では別に家産に加へる資格は御座いません、それは古めかしい御話です、家産を地面にして有つてるのは金を殺して貯へて置くやうなもので、是程馬鹿々々しい事はありません、其動かない働かない地面を、金にして流通したり、又は紙幣にしたり手形にしたり、其他商業的金融的の目的に使つてこそ、十倍にも二十倍にも家産を殖してゆくことが出来るといふもの、此世は何でも金でなければ出来るもんぢやあござんせん、水みたやうな重寶な金、之を何處へも流させ、引入れ、運用してこそ、學問も効能を顯はすことが出来ると申すもの、此世の平和も安樂も出てくると申すもの、要之此世界を彌益革新して行くことが出来るんでございませう……本當に、地面の家産などは舊式のガタ馬車も同様、地面が百萬あつたつて、人間は生きてる譯にはいきませせん、それが金なら、四分分て立派に行つてゆけますよ、事實でござんすよ、好事業に下せば一割はおろか二割にも三割にも、夫どころか四割にも回はすのは容易でございませう。』

夫人は依然限りのない憂愁に沈んでゐたが、漸くに顔を擧げて、

『然ういふものでございませうかねエ、只今も申上げました通り、私達の育てられた時代には、御話のやうな金銭のことは恐ろしいことばかり言聞かされて、それどころか悪い禁制されたものになつて

をつたのでござんした……、何豈私も一人なら何でも行つてゆけるのでござんすが、娘といふものがあるります爲に、それを考へていかなければならないので、それで斯うして種々と心配いたしてをりますのでハイ、實は數年前から纔とのことで少しづつ貯蓄を致して參つたのがございまして……』

夫人の顔は又紅くなつた。

『ハイ、纔か、纔か二萬圓ばかりでございませうが、抽斗の中に入れて仕舞つてございませう、使ふことも知らないで其儘にしてございませうが、何にもならず後になつて、後悔をするのでございませう、私の考へましたのは此のことで、織戸さんから伺ひまして、貴方の御事業の誠に結構なのを承知致して、それに常日頃私共が念じてをります事業を仕て下さるといふのでございませうから、誠に御奇特のこと、感じてをるので、私も及ばずながら御力になりたいと、一つ御相談を願ひに出た譯でございませう、如何でございませう、一萬から一萬二千圓の金高に對します新銀行の株を、私共に取つて置いて下さることは出来ませんでございませうか、娘を連れて參ましたのは、其御金は儘に娘の所有になつてゐることを御見せ申す爲めでございます。』

此時迄有子は口を開かず、其伶俐らしい眼で只キヨロ／＼してをりましたが、母の言葉に辯明的に、

『アラ阿母さん私のだなんて、矢張阿母さんのぢやないのですか、私は要りませせん。』

『だつて和女の御嫁入を如何します。』

「私は御嫁になんか行きたくないと申し上げてあるではございませんか。」

眞實嫁にゆきたくないか如何か、有子は疾言で斯う云つたが、其の細いが鋭い聲音には、何となく物淋しい調子が感じられた、母は傷ましうな眼で娘を睨んで、口を利くの禁めたが、夫れツきり兩女とも顔を見合はせてゐるばかり、口にはねど母子とも毎日困苦して其日を送つてをることゆゑ、二人の間では隠すことも嘘を云ふとも出来ません、二人は千萬無量の思で、顔見合はして居ります。庄兵衛も身に詰された、

「株は最早一枚も無いのでござんすが、可ございます何か致しませう、若し出来なければ私の持分から御譲渡申しませう、實にどうも御事情は御察し申します、私を見込んで御打明け下さつた段は私誠に有難く存じます。」

酷く感動に打たれた庄兵衛、此時には心から、是非此薄命な母子に金を儲けさして喜ばしてやりた

いと思つたのでございます。これで兩女は起上つて、暇を告げて立歸る、戸口を出かゝつた夫人は急に庄兵衛を振顧つて、未だ人の知らぬ大事件の話を庄兵衛に聞かせて、利益にして、幾分でも恩に被せておかうと、

「アノ、羅馬に居ります倅の房雄から此程手紙が参りましたが、其手紙で見ますと、我國の軍隊が羅馬を退京を致した爲に大變哀しむべき事件が起つたといふこととございます、如何なるんでございませ



う。」

「ハア然うですか、宜しい、待つて御在なさいまし、何もかも銀行が出来れば安心、羅馬の法王様を大船に乗せて上げますわハ、ハ、ハ、ハ。」

これで庄兵衛、恭しく叩頭を致して、次の間から階段の降口まで兩女を送つてまゐる。

さて、二人を送り出して又此次の間を、自室へ戻つて來やうとすると、送出すときには氣がつかなくつたが、隅に在る長椅子に、年齢のころ五十前後になる、瘠ぎすな身長の高い、職人が休日で好い着物を着てゐるとでも云つたやうな容子をした一人の男が居る、面して又其傍に十八九に見える、少し色の蒼い優しさうな別嬪の娘が居ります。

十

最早客は断つた積りの庄兵衛は吃驚した、

『オヤ、何誰、何の用ですか？』

娘の方が先に立つて應對しかけたが、男の方は庄兵衛の突如怒鳴つた聲に少しドキマギして、オズと只の裡で判らぬ言を云つてをります、庄兵衛は面白くない、

『最早誰が来ても歸してくれと言つて置いたのに如何したんだッ、如何して君は此處へ来たんです？ 姓名だけでも承つて置くから、然したら歸つて頂かう。』

『ハイ、ハイ、私は、米本と申しますもので、また此に居りますのは、なみと申す私の娘でございます。』
これ迄は判るやうな口の利方であつたが、後は矢張口の裡でモグ／＼、毫末と判らない、庄兵衛は自烈ッたいから引張り立て、戸外へ追出さうと致したが、不圖考へて見ると、成程此男はかつ子から聞いてゐる男、かつ子が永らくの懇意で、今日やつて来たのをかつ子が待たせて置いたのだと合點した。

『ア、ぢや貴君はかつ子さんからの紹介で御入來のだね、そんなら疾く然うと仰有れば宜いに、マア此方へ御入んなさい、而して私や大分腹が減ってきてゐるから、御用なら疾く承らう。』

此方へ御入りと云つたが御懸けなさいとは云はない、腰を懸けさせたら永く話込まれるだらうと思つたからで、其代り此方も立つたまゝで話をする。

こなたに政治郎は先刻から芳村母子が歸つてゆくのを待つて、懸つて居た椅子から起上つたが、今又新しい客が来たので、今度は何の遠慮もせず、物珍らしげに傍に來て見てをります。

米本は遂に自分の用向を語り始した、話は至つて永たらしい。

『旦那様、御話と申しますのは外でもございませぬ、エー私は先年軍隊を除隊になりましたから、かつ子様の御亭主さんの桐生さんこれは麥酒の醸造を營つてをられます其方の事務所で手傳に頼まれて參つてをりましたが、其處を罷めてそれから吉部といふ青物市場の仲次商の店へ入り、夫から其店も罷めまして、引續いて牟田口といふ貴方も御承知でございませう銀行家の店へ小使に住込んでをりました、ところが、其人が先々月氣が狂れて商賣も出來なくなりましたので、それからといふもの仕事が無く困つて居る譯なのでございませぬ、それに何よりも先へ御耳に入れて置かなければなりませぬことは、私は獨身者ではございませぬ、女房持でハイ、私が丁度桐生さんの御店に居ります當時、女房は名前をさだと申しますが、丁度主人の義妹に當る皆川夫人の處で御針を致してをりましたので、それはかつ子様も熟く御存じのことでございます、で私が吉部さん家へ入つたときには、女房迄も一緒に連れてゆく譯にゆきませぬので、仕方がなくさだは久根町の御醫師の杉田さんの家へ奉公に出てをり

ました、其處を罷めてさだはそれから、笠屋町の三弟館といふ勸工場へ雇はれて參つてをりましたが、それからといふもの如何いふ薄命か、私は未だに無職でをるのでございまして……』

『解つたく、要之君は何か職業が欲しいと斯う云ふのだらう、エ?』

云はれても米本は引込まずに、遠慮なく喋りたてる、自分の身上の情ないこと、御針女と夫婦になつたは可が一緒の家に住込めないから夫婦と云つても名ばかりのこと、碌に一緒に暮したこともなく漸く近處の酒屋の隅で出會ふか、臺處の片端して接吻をする位が關の山、何が夫婦だか判らない、其内に女の子が一人、なみといふ名が生れる、夫婦の手で育てることが出来ないから八歳になるまで里に出しておいたが、自分も一人で淋しいから引取つて、狭い居室に男の手一つでの養育、男であつて娘の爲に母親の役目、段々大きくなつて學校へも通はせる、何のかのと面倒を見ると、それに連れて恩愛の情も生てくる、側から離れたことは無い……などと様々の愚痴八百、

『イヤ斯う申しては何でございしますが、本當に此娘は良く出来ました娘で、私は何の不足も御座いません、事物も能く出来ますし、性質も至つて柔順でございませすし、第一御覽の通り優しく、可愛いと云つたら、此娘に追付く娘は世間に澤山ございませすまいハイ。』

庄兵衛其娘といふのを見ると成程中々可愛らしい好い容子の娘、巴里の町の花とも云ふべき、身長の小作りな、軽く房さりした頭髮に、クリツとした圓い眼容の、見るからに至つて無邪氣で、何事も

父の言なり放題になつてらしい娘でございませす。

『貴方御覽の通り、此娘も最早嫁く年齢ごろになりましたので、私も心配してをりましたところが、幸と一人好い相手が見つかりました、それは、私共の近所の板紙の職工でございませすが、其男は之から獨立して商賣を始めやうといふ男で、資本の金が六千圓要るといふ立場になつてるのでございませす、貴方六千圓ばかり別に大した金高ではございませせん、其男にして見ればもつと餘計持つてくる女をと云つても來人はあるのでございませすが、それが是非私共の娘をと斯う申しますので、私も妻が生きてさへ居れば、又何うにでもなるのでございませすが、其妻には四年前に先立れました、それでも妻が御針をして居る内に、小遣の内から溜めた金が四千圓になつてをりますので、之を娘に使つて宜いのでございませすが、先方の要る六千圓には未だ二千圓不足いたしてをる勘定、如何にか致して其六千圓に致したいと焦つてをり、又先方も急いでをり、なみも矢張急いでをります様な譯でございませして……。』

冗長しい老爺の話は中々盡きませせん、此時迄側で笑顔をしたまゝ冷かに聞いてゐた娘も、急に口を出して、

『本當に其通りでござんす、本當に私も面白くありません、何でも可いから、いけないとかいけるとか疾く定めて貰ひたいのでござんす。』

十一

先刻からクドク云つてるのを聞きながら、庄兵衛は米本の人物を研究して見たが、大概判断がついた、此男は勿論伶俐ではないが心立の良い真直で深切な、而して軍隊に居たといふから規律の習慣があるに相違ない、相當の仕事に使へやう、第一かつ子が寄越したのだから無論危険なことはあるまいと、庄兵衛見て解つたから直ぐと、

「宜しい米本さん解つた、此度私は新聞社を一つ設立へるから、失敬だが君に小使になつて貰はう、番地を置いておいでなさい、今日はこれで御免被る……。」

庄兵衛勿々と行懸けたが、未だ一向御構ひない米本、愚圖々々と、

「左様でございますか、御深切の段誠にどうも有難う存じます、有難く御請を致します、なみの身上が定つても、矢張私は働ける丈けは働かなければなりませんから、宜しく御願ひ申します……、それに今日上りましたには猶一つ外に伺ひたい事が御座いますのでハイ、かつ子様や外の方々から伺ひますれば、旦那様は此度偉い事業を御計畫になりますさうで、其事業は大層御金の儲かることだと皆様も申して居られますが、何んなもんでございませう、若し私も御深切序を持ちまして、其御裾分けの御餘りを頂戴いたしたいと存じまするが、幾らでも宜しうございませう株を分けて頂くことは協ひ

ませんでございませうか？」

今しがた芳村夫人から娘の爲にと云つて株を分けてくれと頼まれて、大に心を感奮いたしたるばかり、それが又斯う米本にまでも同じく娘の爲にといつて申込まれて、庄兵衛大に感動を禁めません、此單純素朴な人間、一錢二錢といふ金から溜め上げて作らへた小さな資本、資本家！斯ういふ眞面目な堅い信用のある人達が揃つて集まつてこそ、眞正の安全鞏固な金融機關が出来るといふもの、この殊勝な人達が、未だ碌に發表もせぬ内から斯う續々とやつてくるのだから、彌々店を開くとなつたら千客萬來は瞬く内だと、庄兵衛此最初の株主の舞込んで来たのに、ホク／＼笑を作つて、將來大成功の前表と心中で大満足。

「宜しい約束した、株を上げやう。」

米本の顔は何處から斯う思懸けない運が向いて来たかといふ風に、喜悅に輝いた。

「旦那様、何とも御禮の申上げ様も御座いませぬ、しまするといふと、半年経つ内には私の資本の四千圓で二千圓は上つてくる勘定になつて、入用の六千圓に達するといふことになりませぬので、成程どうも、有難い仕合でございます、もう御承知を下さいました上は、後とも云はず善は急げと申しますから、只今直に御取引を致したいもので、私は此に金を持って参りました。」

彼は懷中を探して、金の入つてゐる汚ない状態を取出して、其まゝ之を庄兵衛に差出したが、流石

殘忍酷薄なる庄兵衛も、米本の此罪のない眞律な仕打に、悉く威に打たれて、暫らくは言葉も出でず、身動きもせず見惚れてをりました、併し考へると餘り正直なのに又可笑しく、終には我知らず笑出したが、ア、愛すべき彼等、こんな人間には金を儲けさせて大に喜ばしてやりたいと、庄兵衛眞正直な心を起した。

「マア待給へ、然ういふ風にするもんぢやアない、此で出されちや困る、金は持つて居つて呉れ給へ、君の名は確然と加へて置く、拂込をする時と場所が極り次第知らせるから、其時に拂込んで呉れ、ば宜しい。」

これで此度は二人を歸らせる、米本は立かゝりながら、なみ子に宜く御禮を申上げろと命令けたので、なみ子もホク／＼大満足、其可愛らしい率直の眼を輝かして、厚く禮を申述べた。

父子が出て去つたので、跡は漸く庄兵衛と政治郎と二人、政治郎は傲慢な人を愚弄するやうな容子をして、

「阿父さんは若い娘達に嫁入資金を作らへてやるのですね。」

庄兵衛は笑ひながら、

「可ぢやないか、さういふ、他人の幸福になることは、好い金の使途といふものだ。」

これで済んだから出懸けやうと、庄兵衛其處邊に在る書類などを片付けてゐたが、片付けながら不

圖思出したやうに、政治郎に訊いてみる、

「さうだ、汝はどうだ、幾らか新銀行の株を持たんか？」

室の中を運動的に往つたり來たりしてゐた政治郎、ハタと歩を止めて親父の前へ突立つて、

「阿父さん、そればッかりは御免を蒙りやせう、其様な阿房者だと阿父さんは僕を思つてるんですか？」

此言葉に庄兵衛怒らざるを得ない、親に向つて無禮千萬、怪しからんことを云ふ、此度の事業は有望で且つ立派な事業、それを一ト向に盜賊でもすることのやうな今の言葉、無禮千萬の言草だと、庄兵衛大小言を云はうとしたが、見ると如何にも身體の柔弱い、纔た一ト粒の俸、廿六で最早老年者のやうに痛々しい健康、それを思ふと親子の情が出て、惘然な氣もし、云ふべき小言も云へなくなつて、遂に心を和げる、それから見ると自分はどうだ、人生の五十を超えて、それで斯んなに健康のだと、内心に自慢しながら、俸の肩を軽く打つて、

「サア／＼食事に行かう、併し汝疾くその汝の儂麻室斯を癒さなくちやいかんぞッ。」

十二

これから二日経つて十月の五日といふに、庄兵衛は敏之及醍醐と打連れて、穴守町の船越公證人役

場へ参つて、登記の手續を致し、創立證書は公證人の手に交付されました、之で彌と銀行は成立つて、名稱は株式會社萬國銀行、資本金は總額二千五百萬圓、一株金五百圓で總株數百萬株、當初は四分の一拂込といふことに取極つた、さて又銀行の場所は、庄兵衛が借りて住んでゐる山屋町の織戸公爵夫人持家の一部を其まゝ借用することにいたし、それから定款作成のこと、其寫を船越役場へ差出し置くこと、其他種々の手配り、茲に彌と設立の手續は悉く済みました、此日は秋の最中の、空氣も朗かに澄渡つた天氣で、三人は公證人役場を出て各次に葉巻煙草を燻らしながら、心も爽快と勇立つて、大通から安部井町の方へブラ〜と参ります、宛然學校から脱出して來た生徒のやうに、何となく氣輕に嬉しい。

さて今度は彌と創立總會を開くのであるが、これは直ぐといふ譯にも参らぬので、前申した登記をした日の次の週間に、白木町の舊勸工場であつたのが倒産してそれから後は山師の手で繪畫の展覽會などに使つてゐる建物内で開くことに相成りました、シンヂケートの連中は、固より株を有つてゐやうといふ念は無い、皆賣飛ばして儲けやうといふのであるが、兎に角此の日は段々と集まつて、出席株主の總數百二十二名、其株數は四萬株近くと成りました、尤も出席及投票權は二十株につき一箇といふことになつてゐるから、投票箇數は合計二千票でございます、而して又いくら多い株數を有つてゐても一人で十票以上の投票權を行ふことは出來ぬ事になつてゐるから、本當の出席投票數は千六

百四十三しかない譯でございます。

庄兵衛は當日の會長を是非濱野に行つて貰ひたいと思つて、先へ立つて發議をいたした、狡猾なる庄兵衛、自分は何處までも無責任に行かうといふので、普通の株主として列するだけの積りでございませぬ、其庄兵衛は何うかといふと、自分も敏之も大まい五百株を引受けることに致してあるのだが、之に拂込をする氣などは毛頭無い、投票をはつてペン先で誤魔化して拂込をしようといふ其目算でございませぬ、さて此日は、シンヂケートに加はつた人々は皆出席を致した、醍醐、由利、瀨藤、小部、福岡侯爵、皆各自に其與黨の株主連を随へて居ります、例の阪谷も見えました、固より名義丈だが大株主、それから矢野龍吉これも大株主であるが、矢野は銀行側の人間として既に前日來他の高等事務員數人と一緒に立働いてゐるのでございます。

で、彌と開會と相成つたが、元來何もかも申合せて細工をしてあるのだから、總會とは申せ、喧しい議論は一つも出ない、何事もスラスラと参つて、鳥渡見ては誠に平和で美しく、手數のかゝらない靜謐な總會でございます、株式全數の引受済になつたこと、各株は四分の一を拂込むこと、皆満場一致で議決され、遂に會社は成立と相成つたと嚴肅に宣告された、それから取締役の選舉となつたが、其數は二十名で、報酬は年俸合計五萬圓を出席日數に應じて受ける外に、定款規定の通り賞與金として純益の一割を受けること、随分割の宜い役だから、シンヂケートの連中は誰も彼も重役になりたい、

そこで言ふ迄もなく筆頭には醍醐、續いては由利、瀬藤、小部、福岡侯爵、及び頭取にしやうといふ濱野が選まれて、後の十四人は重要な點からいふとズツと落ちるが何事にも言なり放題になりさうな且つ飾りになりさうな人物を株主中から撰抜しました。

さて彌々支配人選舉といふことに相成つたが、此時まで出しや張らずに成たけ小影に隠れるやうにして控へてゐた庄兵衛は、急に人に見えるやうに顔を現したが、濱野は一刻も猶豫せず發言して、相良を此に推舉致す、一同口々に賛成を稱へて歓迎致し、これも満場一致で確定に相成りました、残つたのは監査役二名の選定、監査役の職務は資産負債表を検査して之を總會に報告し、取締役の呈出する諸勘定を監督するに在るので、本當に職責を盡さうと思へば中々手加減の難かしい役、本當に行らなければ實は有つても無くつても同じことである職掌でございますが、此人選は庄兵衛の發言で、何處の人間だか識らぬ大草といふ人と佐々田といふのを二人指名した、此大草といふ人は佐々田の全くの乾分で、佐々田の自由自在になる人でございます、佐々田といふ人物は身丈の高く恐ろしく禮儀の正しい、何でも直ぐ賛成する人で、多分内心には監査役として何でも賛成して置けば將來取締役になれるだらうと、大望を描いてをる人物でございます、監査役二人が選まれて此に總會の議案も濟んだので、會長は閉會を宣告する段になつたが、其の前に一つ御相談を願つて置きたいことがあると、會長が言ひ出すのを何かしらんと聞いてみると、シンヂケートの權利に付してある一割の高此金合計四

十萬圓を創立費と認めるといふことで、忽ち一決を致しました、甚だ些少の金額だが設立發起人に對する報酬だと、斯う會長は申すので。

これで總會は終了して、小株主連は羊の群が長く列つてゆくやうに、ウヅウヅゾロ〜と歸つてゆくと、大きい株主は未だ後に留まつて、往來人道のところなどで互に握手をしながら、莞爾々々笑つて別れて參る。

十三

翌日から最早勿々山屋町の銀行の店に重役は集會を致します、其の室は舊庄兵衛が使つてをった座敷で、集會室に造り直されたのでございます、見ると、室の中央には崩立つやうな草色の卓布で蔽はれてある長方形の卓、其周邊には同じ色の布で張つてある肘懸椅子が二十配置されてあります、其外には書棚が二つあるきりだが、其硝子戸の中には之も同じ草色の絹の小さな帷幕が下つてをります、室の一面には三つの窓があつて、芳村家の庭を見下すやうになつてゐるが、窓布の色が濃い赤なところへもつていつて窓から庭の樹葉の色が映るので、室内の明味は少し減殺されてをります、何となく閉籠つた陰氣くさいところはあるが、嚴格で高尚で、昔風の奥床しいところも見えます。今日は事務の分擔法を定めやうといふので、案内の午後四時にならぬ内に重役は大抵打揃ふ、中に



も福岡侯爵は身丈高い體軀と、貴族的の白い頭髪で被さつてゐる小さな頭の、風采は如何見ても古代佛蘭西人の典型を現はしてをります、醜態の一見いかにも濃厚な風采は、之で何うして其大資産を作つたかを疑はせまする、瀬藤は平素よりも苦勞が少くなつたやうな顔容をして、小部と商賣が急に景氣づいて來たといふ話をしてをります、自餘の取締役達は、元來眞の仲食であるから只だ側に立つて圍繞いて、以上諸人の話を聞いてゐる丈、捉へ可き話があれば捉へやうし、それでなければ各自自分々々の商賣話をして、只此座へ列つて頭數に入つて、利益の分け前の権利だけ得て置けばといふ風に、集まつてをるのでございます、相も變らず時刻を外すのは由利、喘ぎくやつて來たのは議會で委員會があつたのに出席して大急

ぎに此方へ駆つけたので、失敬したの何のと辯明やら謝罪やら、こゝに彌々人數が集まつたので、各自卓を圍繞いて椅子を占めました。

取締役中での年長者は福岡侯爵で、今日の座長席に着きます、庄兵衛は政府委員的の支配人として其の眞向に着席する、座長は先づ第一に頭取の選舉をなす旨を告げましたが、座長の言葉が終るか終はらぬに、濱野敏之はツト立つて、承れば諸君は自分を頭取に推薦するといふことだが、自分は之を御断り致す、第一自分は明日にも事業の策源地なる東歐へ出立致さなければならぬし、夫から此金銀のこと勘定のこと銀行のこと取引所の事は、自分に於ては全くの無經驗、到底責任は盡されず、其重任に堪へないから、是非共これは御断りする、此段前以て述べおくと、明白地に断つた。

之を聞いた庄兵衛は大周章、大周章どころか非常に意外だ、何故と云へば濱野に頭取を受けさせることは、昨日前以て本人に話をして、相談を纏めて置いたことで、今日は形式丈の手續をすることになつてたからだ、それを今更替する、併も自分に一應の話もなく總會席上で断るといふ、ハ、アこりや矢張かつ子が入智恵をしたに相違ない、今朝兄妹がコン／＼と永い問話をしてゐたが、無論此事に就いてはあらう、飛んでもないこと、とんでもないこと、濱野以外の人間に頭取に座られては大變だ、こりやア是非共濱野を据ゑなければと、此に於て庄兵衛は、勢ひ込んで嘴を入れて、説明的に辯じ立てた、頭取は云はゞ名譽的の位地職掌、其主な役目は總會に出席して座長となり、取締役が決し

た事項に協賛を與へて之が保持に勉め、而して只足りきつた式辭を述べさへすればそれで済む、第一副頭取といふものがある、それが諸々の捺印仕事を行ふから、頭取は眞に名譽職、以下の銀行本務、専門的の業務、即ち營業のこと計算のこと取引所關係のこと、其他内部諸般の事務、それを行ふのは支配人、自分は其爲に専任されてる、支配人は定款や内規に従つて各係の事務を處辨し、出納を掌り日々の業務を指揮經營し、重役會決議事項の施行を監視する、一言で云へば銀行の行政總理大臣、頭取は即ち王だ、責任は大臣にある、と滔々と辯じ立てた、大層理屈が宜さうだが、敏之はそれでも、又更に言葉を盡して、飽までも斷るので、此まで黙つて聞いてゐた醍醐も由利も、側から庄兵衛の説に言葉を添へる、此間に會長福岡侯爵は何事にも利害を感じないのだから何方つかず、只双方を聞取つてをりました。

様々に説立てられて、自體氣の弱い敏之、遂に屈伏を致して了つて、直に頭取と事定つた、偕副頭取には誰が選まれるかと見てゐると、重野子爵といふ何人も餘り聞いたことの無い仁、なんでも農學者で、以前貴族院議員を勤めたことがあつたとかいふ、極和かな鈍い人、官判を捺す器械としては持つてこいといふ、人物でございませぬ、それから書記長は取締役以外の銀行の人間から採ることになつて、發行係主任の兼務といふことに相成りました。

相談が此迄進んで參りましたところに、日も暮て大きな室も薄暗くなつてきたので、今日は大分な勉強をしてこれで最早澤山だから仕舞うことにして、今後は取締役會を月二回、十五日と三十日に開くことに申合せて、遂に散會を致しました。

十四

諸人が歸つた跡に庄兵衛と濱野は一緒になつて、例の繪圖室へ戻つて參る、かつ子は此に二人を待受けてをりましたが、兄の間の惡さうな困惑したやうな顔容で見て解つたかつ子は、今日又もや兄が弱い氣の爲に、負けて、頭取を引受けて了つたと覺つて、大の不機嫌。

庄兵衛は怨むやうな辯明のやうな言葉を並べて、
「ねエ、判らんぢやないか君達も、頭取になれば三萬圓といふ大した年俸を取れるぢやないか、事業が大きくなつてゆけば其が倍にもなる、目に見えて倍になるのだ、失敬ながら濱野家は其様な利益を無にするほどの金満家でもないだらう……一體何が憂慮で其様な柵の牡丹餅を嫌がるのかね、それが我輩は聞きたいね。」

かつ子は答へて、
「私は心配性と仰有られるか知りませんが、萬事心配になつて堪りませんのでござんす、第一兄は明日にも立つて行つて了ふのでござんすから、此には居ないことになりませし、私には金錢のことは

全部解りません、本當に困るのでございます、貴方は兄に五百株丈取つて置いて下すつて而して拂込はせぬでも宜いと仰有いますが、本當にそれで宜いのでござんせうか、法律に背いてるやうなことは無いわけでムんせうか、事業が旨く行けば可としたところで、之が拙くいつた日には大變な事になりやアしませんか?』

庄兵衛はカラ／＼と打笑つた、

『イヤ大變な御心配だ、マア考へて積つて御覽じろ、如此旨い商法は又とありやしませんわ、株數五百株、其第一回拂込額が六萬二千五百圓、それを拂へば大變だが拂込ままで置いて、左様、半季待つて御覽なさい、五百株に對する第一半季の利益配當は優に第一回拂込金額を生んで餘りあるのは此銀行は請合です、若し然ういかない場合には、宜しい清音川へ身でも何でも投げて御目にかけやう、其様な事がある道理がない、マア／＼安心なさるが宜い、半年間何もかも知らぬ振をして眼を閉つてゐれば、それで可がす、そりや投機といふことは危険かも知れぬが、拙く行ればこそである、然うぢやありませんか。』

かつ子は、室の漸々暗くなつてゆく裡に少しの身動もせず黙つて庄兵衛の言ふことを聞いてゐたが、聽て下女が洋燈を二つ持つて來て其邊が明るくなつたので、壁に貼付けてある東歐の圖や繪やが眼につく、それと同時にア、此んな未開の土地を文明と金の力で思ふ存分に開いたならばなど、いろいろ

ろと夢想を浮べた。

が其内に機械的に、心に懷疑の念が起つてきて、口の外へ洩して了ふ。

『投機、投機といふことを考へると、相良さん私は何しても恐ろしいと思ひます。』

庄兵衛はかつ子の何時も此う考へてゆくといふ考の順路を知つてゐるから、凝乎と、其顔を凝視しながら、

『投機、左様さ一六勝負、一六勝負といふと人間が悪いが、投機といふ事が和女は何故再う怖いのです、解りやうに由つて怖いと云へば怖いかも知れんが、投機即ち思惑は、人間が生きてゆくに當つての誘導物となるのです、抑も人間は何の爲に生きてゐやうとするのでせう、競争して此世に立つてゆかなければならない、何か前途に希望がなければならぬ、即ち人生の前途には、何時も變らず投機——思惑が、希望となつてゐるではありませんか、僥倖心——投機といふものが無ければ、事業といふものも商業といふことも成立ちません、人が仕事をやる氣を出さぬでせう、一か撥かの樂があればこそ、人は種々の事を爲る氣になる。』

と、これから庄兵衛、人事は萬事不定不測で賭博のやうなもの、賭博の精神を抜取れば人間は人間でないも同じこと、老少不定のその點にこそ人性の妙味はあると、投機と人生と離るべからざる理屈を一生懸命になつて説いた、かつ子も終には我を折つて笑つて了ふ、眞直一方な性質だが、流石は婦女

子の分限を守つて、口角泡を飛ばしてまでも争ふことはいたしません、
 『ちやマア、投機は人間の常で、自然は然う出来てゐるから仕方がないと、斯う貴方は仰有るのでござんすね、然う仰有られて見れば其通り、人生といふものは到底潔白清浄なものではござんせんね、宜ござんす、兎に角一步でも百歩でも私は貴方に譲りませう、又相變らず負けて了ひませう、だが、少しでも善い事をして、罪は軽くしたいもんでござんすね。』

『大丈夫々々々、マア安心なさいませよ。』

これから猶ほ少しの間、三人は笑話に打解けて、さまざまの世間話、而して敏之は彌々旅立といふことに取極めて、三人は各自の室へ引込んだ。

十五

庄兵衛自分の室へ引込まうとすると、書生がやつてきて、何處かの婦人の方が見えて御目通りが致したいと言はれるから今日は會議があつて主人は多分御目には懸かれますまいと返さうとしたが、是非にと云つて待つて御在になると告げた、今日は非常に疲勞れてゐる、チョツ！ 歸してくれと、舌打しながら庄兵衛は命じかゝつたが、イヤ待てよ、此んな時は誰でも歓迎して逢つておく方が可いかもしれぬ、門を締めて舞込んで來る好い鳥を逃がして了ふことも無いとは限らぬと、考へ直して面會

することにした、實は此頃は面會人が段々殖えて蒼蠅いくらゐらなつて來たので……。

室には洋燈が一つしか點いてゐない、庄兵衛は入つて來た客を能く見ない、客は挨拶を致す、

『私は皆崎さんに頼まれて出ましたのでござんすが……。』

可厭な奴が來やがつたと、庄兵衛は坐りもせず突立つたまゝでゐて、又御坐りなさいとも申しません、此客は外でもないおせん、例のデブ／＼肥つて、小さいが鋭い聲なので、庄兵衛は直ぐそれと知りました、誰かと思つたらイヤハヤ大した株の所有者、重量で株券を買ふ株屋は閉口だッ！

おせんは落着拂つた語調で、皆崎に命令られて來たが其用向は外でもない、此度の萬國銀行の株の募集に就て承はりたい爲である、未だ賣つて呉れる株があるか如何か、シンヂケートが引受けたのを割増を付けたら同じ割で手に入れられやうかと、それを訊きに來たのだと斯う申すのでござんすが、それは口先の言前で、おせんの目的は外にある、然う云つて家の中へ入つて、家内の模様を見て、何をしてゐるかを探つて庄兵衛の心をも揣摩してみやうと、之がおせんの本心なので、彼女の脂ぎつた顔の内に錐のやうに開いてる細い眼が家内の四方八方へ鋭く働いて、働いてるかと思ふとそれをチロリ庄兵衛の方へ回して、魂の底までも見透さうといつた鹽梅なので判ります、皆崎問齋は庄兵衛の計畫は何うせ投機で、巧くゆく譯はない、少し待たへて好加減のところへ飛込んで、儲けられる機會があつたら濡手を突込んでやらうと覗つてをるので、兎にも角にも此邊で、一つ問謀を放つてみや

うと、おせんが之に當つたのでございます。

「何條おせん如きに謀られることを致しませう、庄兵衛言葉つきさへ暴々しく、

「最早一つも有りませんツ。」

と纒た一ト言言放つた、ハ、ア此上訊いても駄目だわいと、そこは機を見るに敏なるおせん、夫れツきり何にも云はず、追出されぬ内に此方から歸ると、辭儀をして出口の方へ立かゝると、意地の悪い庄兵衛一つ突込んで困らしてやらうと、

「何故貴女、貴方自身に株を買ひなさん？」

おせんは人を愚弄したやうな口調で、軽く答へて、

「私？ 私の商賣は些と違ひます、私の商賣は外にございます、私は今買はずと、悠然待つてれば可

のでござんす……。」

庄兵衛は此時、おせんが例の手から離したことの無い革の古靴を持つてゐるのを發見けて、ブルブルと身を顫はせた、今自分の事業が巧くいつて兼々望んでゐた銀行が漸くに設立やうといふ其矢先へ、此乞巧みたやうな奴が舞込んで來やがつたのは飛んでもない縁起、待つてると云やアがる、何を待つてゐるのだ、榎樓會社や破産銀行の反古同様の株や證券で充塞つてゐる古靴を、汚らはしくも目の前へぶら下げやがつて、こりや彼奴脅迫的の當こすりに、此方に見せつけてゐやがるのだ、いつまで

も氣永に構へて、萬國銀行の倒れてくる日待つて、二足三文に其株を買つて、一ト儲けしやうといふ……成程此古靴へ我株を葬ると云はぬばかりの行法だ、忌々しい畜生婆め、縁起でもない奴が來やアがつたと、庄兵衛忌々しくつて溜らぬであると、おせん婆肥つてゐる體軀に呼吸を喘ぎ、併かも可厭に叮嚀に、

「御邪魔を致しました、ハイ左様なら。」

澄し込んで歸つてゆく、庄兵衛悉皆馬鹿にされて了つた。

小怪物

一

それから一ト月経つて十一月の月に入つたが、銀行の店の準備は未だ落成の運びに至りませぬ、大工はカン／＼行つてゐる、ペンキ屋は入つてゐる、左官屋も手をひかぬし、中庭へ一面に硝子張りの家根を造らへて營業場にしやうといふのだが、其硝子の縁を塗つた油石灰が纒と乾いたといふくらゐ。

如何して斯う遅くなつたのかといふと、これは庄兵衛が餘り店構が各齋臭いのが面白くなつて、

もつと大々的立派にしたいと、種々手の要かる注文を出した爲でございませう、何事も大袈裟に行りたい大きな店を造りたいと庄兵衛は思ふのだが、何しろ新規に建てるのと違つて、華族の住でゐた家の一部を使ふのだから、爾う思ふやうにいけるものでない、庄兵衛は遂に自烈に腹を立て、かつ子に命じて請負人を中途で断つて了つたが、かつ子こそ宜い面の皮、それからは仕方が無い、かつ子自身が残りの工事、受付窓や其他仕上造作の監督をするといふ合せだ、中庭の家根を硝子張りにしたのを営業場にして、其周圍に各係を設け、受付窓を澤山造らへたが、各係と客の居る場との境は堂々と細か細工の眞鍮格子で仕切つてあつて、見た目も立派に、黒文字で一々係りの名が現はしてございませう、要するに、少し狭いことは狭いが、店構は巧く出来上つたといつて宜しい、それから階下には總て出納其他直接に客に接する營業の諸係りが設けてあつて、二階以上には言はゞ内部の機關即ち支配席、通信係、計算係、秘書係などが設けてございませう。

で、斯んな狭い限りあるところに、事務を執つてゐる人間が其數二百以上、直ぐ側では職人がカンカンガターとやつてゐる、金や銀や銅の正金を扱ふ音がジャラ／＼する、といったやうな風で、騒がしいこと一通りでない、が何しろ古い舊華族の住邸を直したのだから、窓から薄暗い樹の葉の蔭が入つてくるところや、何となく陰氣なところは、寺院へでも来たやうな心持、些と意外な、心にそぐはないこととでございませう。

庄兵衛は、何事に由らず意外の事情が湧いて出ると、直と夫を利用して行くのを自分の行法にしてゐるのでございませうから、建物の此んな出来榮を直に使用人の氣風に應用して、使用人は總て建物に準じて、僧侶になつた氣になつて、正直神妙に且つ堅固博愛に其身を持ち、客に對してゆかねばならぬと、訓戒を下しました。



最早チャンと支配人席に容を現はして、来た書状を檢分し、急ぎの分には勿々と自分で返事を認めて出す、十時か十一時頃迄そんな始末をして居ると、追々に客が詰かけて參る、友人、知人、得意客、仲買、仲買店の外交員、才取り、金融界の有ゆる人間、後から後へと列を作つて、殆んど間斷がござい

此頃の庄兵衛の勉強は非常なもの、斯んな混雑の中に、有らん限りの精と根とを使つて、活動して居ります、朝は七時といふ未だ行員も出勤せぬ行員どころか小使が暖爐の火さへ未だ用意せぬ早い時刻から、

ません、其合間々々には行内諸係の主任が入代り立代り事務上の指揮を受けに参ります、又一分でも透間があると、安閑としては居ずに、自分で各係を見廻つて歩行、係員は突然の支配人の見廻りに面食つて、大周章をやることも珍らしくはない事で、不意打を食ふから寸時も油断は出来ません、十一時が打つと、自分の住居へ引込んで午飯を喫りますが、性來瘠せてゐる體軀だから食物に喧ましいこととは無い、何でも心から旨さうに食べ、何でも心地好さうに飲みます、食事の時間も之を無駄にせぬやうに考へる、即ち此時間を利用して、食べながら又飲みながら、かつ子に銀行内の人間のことや用向のこと何やかや、訊ねることを訊ね言ふべき事を申します、尤も切角かつ子が献策をする好い智慧も、庄兵衛は滅多に利用することを肯んじはいたしません、十二時になると出懸て、誰よりも早く着くやうに取引所へ参ります、そんなに疾くから行く必要はないのだが、これは諸人に會ひ又談話をする爲で、全體取引所へ参るのは、公然商内を爲るのでない、此所へ來れば自ら銀行の得意客や又利益になる人達に逢へもし話しも出来て、何かにつけて重寶だからでございます、庄兵衛が斯う出入をするのが此頃は人の目に立つて、誰彼の口の端にかゝつてきた、今は先頃中の相良庄兵衛でない、正真正銘何百萬の金を陣頭に控へてゐる實業ある人物、先時のやうな虚業家とは違つて、得々として取引所へ乗入つてゐるのでございます、口善悪なき輩は目ひき袖ひき、いろ／＼と噂を致す、追つて相良は又昔しのやうな株式界の大立者になるだらう、イヤ又失敗は目に見えてゐると、彼是れの取

沙汰でございます、三時半頃になると庄兵衛は取引所から歸つてくる、すると匆々卓に着いて、山のやうに積んである各種の文書に、片つ端から捺印を致す、これは至つて煩はしい仕事だが、慣て了つて只機械的に手が働く丈、頭腦は明いてゐて自由に使へるから、捺印をやりながら代る々々事務員を喚つけて命令をする、仕事を與へる、返事を出させる、手も頭腦も、寸時たりとも明けて置くことは致しませぬ、夫から六時まで又千客萬來の應接に勤める、其日の仕事を片付ける、明日の準備をする、遂に六時に仕事を終つて、我室へ引取つて、かつ子と一緒に晩飯をしたゝめる、此食事も矢張晝飯の時のやうに、割合に多量を夷げます。

二

庄兵衛或時かつ子に、笑ひながら此んな事を申した、
「ねえかつ子さん、私は褒めて貰はんけりやならん、随分此頃は大人しいでせう、女の尻を追かけ廻はすぢやなし、俱樂部入りをするぢやなし、芝居さへ一つ行きませず、斯うやつて毎晩和女と一緒に泰平無事に暮してゐる、エ？ 大人しいぢアありませんか、安心するやうに敏之君の所へ爾う云つてやつて下さい。」

其實庄兵衛些とも大人しいことはないのである、此頃中から彼は武平座の若い歌優に關係してゐる

ばツかりか、又兼て見ておいた例の谷田部や若瀬藤が遊んでゐた此木糸枝をも捉まへたのでございませうが、之は別に面白いことも無かつたので止めて了つた、銀行で勤める合間に庄兵衛は今申上る通り晝遊びをやるのであるから、夜になると最早身體が疲れる、戸外へ出る勇氣がない、仕方がないから家に居るので、大層神妙らしく見えてるが、内實は右の通り、尤も彼は今度の事業を始めてから、是非大成功をせねばならぬと思ふから、其方へ一心を奪られて、他の慾念は滅殺されてをります、是非金權の大將軍となり、財界に覇を振ひ、勝利を占めぬでは止まぬと、大に用心をしてかゝつてゐるので。

「宜うござんす、兄の所へ爾う云つてやりませう、ですが貴郎、兄は品行から云ふと正しい方でござんすから、兄に云はせると大人しいのは人間當然の事で、別に感心する譯は無いと、必定斯う申すのでござんせう、何でもマア物事には飾りツ氣の無い方が宜うござんす。」

こゝに十一月の初旬の一日の午後、大變寒い日であつたが、かつ子ペンキ屋の親方が働いてゐるのを側に居ていろ／＼指圖をして居ると、受付の男が一枚の名刺を持つて来て、此方が是非御目にかゝりたいと云つておいでだと告げました、かつ子其名刺を手に取つて見ると、如何にも汚い名刺、粗末千萬な西洋紙へ二號活字で大々と刷つてあつて、姓名は皆崎間齋とございませう、かつ子は此姓名の人を知らない、マア何の用か逢つてみやうと、敏之の室へ通せと命じました。

皆崎間齋が何故六ヶ月間も辛抱して例の庄兵衛の眞實の子だといふ非常な金儲口の發見物を其まゝ放棄つて置いたかといふと、それには種々の理屈がある、第一には、若し金を此度の事件が判つたとき直に請求したならば、取つたところで證書面の六百圓、それでは元金で何にもならぬ、此非常な振出物で總た六百圓は安過ぎるから、せめては幾千と纏つたモノを取らなければ虚だ、のみならず先般發見のとき取るとしたなら、其時は身輕な獨身の庄兵衛で、羈絆も係累もない時だから、何を云はれても怖がらず、對手にならずに拒絶して了ふに相違ない、先アおせんが簡單と書出した勘定書を見ても、夫丈は取る價値がある、初め一寸々おせんがおせんの從妹で子供の母たる金岡はんはんに立替へてやつた三十錢五十錢、それからはんが病氣の時藥禮や何かの立替金、歿つた時の葬式費用、墓の建立費、それから後子供を引取つて養育して來た諸費用、着せたものに食べさせたもの、利に利を加へ、何やかや、引括めてが六千圓、是丈は取れるのだが、相良が父子の關係を認めぬと云つたら何とせやう、大きな聲では云はれぬが、證據といふのは纔た一つ、顔が肖てゐるといふ夫丈けた、假に其等が通過しても、證書が時効にかゝつてると云はれたら之も困る、時効の問題を持出さぬで證書が口を利くとしても、證書面の額だけしか取れぬといふ理由になると、斯う間齋は考へたから、種々と考案を練つて、機會の來るのを覘つてゐたので。

もう一つ間齋が庄兵衛肉迫を遷延してゐた理由は他でもない、弟の病氣でございませう、弟眞次が宿

病の肺病は、此頃中から稍募つて、床に横になつたまゝなので、問齋氣が氣でございませぬ、弟の寢床へ附添ひきりて、只ワク／＼して居ります、殊に此半月來といふもの、流石猛烈なる此事業家も、事業の方は悉皆怠つて、逃げる債務者も追かけず、取引所へも出懸けず、怒の眼を病弟一人に注いで、宛然慈母が小兒に接してゐるやうに、二六時中世話を行届かせてをります、貪慾非道な彼れ問齋、それが弟の病氣の爲には入費を厭はず、巴里第一流の國手幾人にも來て貰ふ、良い藥があれば幾金でも奮發するといふ、恐ろしい氣張方、醫師が書物を読むのを禁じたのを、眞次は強情を張つて讀書をしやうとするので、問齋は書籍も書類も悉皆隠して了ふといふ、まるで此時は兄弟喧嘩面でございます、看護婦が疲れてウト／＼でもしやうものなら眞次はそつと起上つて、熱氣に驅られ汗までも流して、其邊から鉛筆の使ひかけを探出し、白紙が無いから新聞の餘白を切取つて、其處へ種々と書いてみる、正義と眞理に従つて世界の富は如何分配をしやう、人間誰彼を問はず生と幸福を興へるには如何勘定を立てたら可からうと、頻りに計算を立て、見る、何處までも哲理の妄想に沈んでゐるのでございませぬ、側に寝てゐる問齋、眼が覺めて此態を發見して吃驚仰天、到底短命であらうのに、情なや求めて生命を縮めてゐる、ソレ見たことか餘計咳が出るではないかと、我知らず心を激して怒つてもみるのでございませぬ、本當に愚にもつかぬ哲學的妄想、身體が健康の時ならば、小兒に玩弄物を持たして置くのと同じ考で許しても置かれうが、今は重病の體態でないか、それに馬鹿々々しい空念夢想、實地行ふこ

とも出來ぬ考案に頭腦を使ふ、何の爲めになる、誰が喜ぶ、戯言ぢやない愚の骨頂だと、脅しつ腫しつ諭してみる、流石に兄の眞心を仇に開流す譯にもいかぬ、眞次も漸次顧みて用心をするやうになつたので、此頃は幾分力もつく、病氣も良い方に向いてきた。

三

弟の病氣が大に愈つて來たので、問齋、に自分の職業に身を入れることが出来るやうになつたが、時も時折も折、彼の庄兵衛又々頭を擡げて、大銀行の親玉となり、金も大分自由になり、大手を振つて取引所などへ出入りをしてゐるといふことを聞付けたので、こゝそ一件を持出す時節到來と、先づ以ておせんに斥候の任務を授けたことは、前段申上げたる通りにございませぬ、然るに、其おせんの報告が御膳上等なので、彌々強請の狂言に取掛る用意を致した、で何處までも堅固にゆく積りなので、考へて見ると、突如庄兵衛本人に肉薄しては面白くない、如何なる方法に由つて此仕事を成功させやうかと、とつおいつ考へたが、おせんの話の中に聞いたかつ子といふ女のこと、然うだ此女を一つ使つてやらうと、斯う問齋は考へた、聞けばかつ子は庄兵衛の家の取締をしてゐる婦人で、近處の出入りものは皆識つてゐるとのこと、此女は若し萬一庄兵衛の妾ではあるまいか、それとも單に女中同様のものであるか、悉しい事は判らぬが、何の途庄兵衛に最も近いものに相違ないから、之を辿つて

それから本人に遇つても遅くはない、後は臨機應變に行れば可いと、斯う作戦を立てた間齋、かつ子に面會を求めたのでございます。

かつ子は間齋を待たしておいた階上の兄の繪畫室へ上つていつて、其人を見るといふと、骨組のがつしりした、碌に剃刀も當つてない鬚武者の、穢ならしい平たく大きい顔の、古くつて脂ぎつてキラキラと光つてゐるフロックコートを着て、白い汚れた襟飾を着けてゐる男、かつ子は心中ハッと躊躇いた、間齋は間齋で、かつ子を穴の明く程視てゐる、見てみると成程心に思つてゐた通りの婦人、身長のスラリとした、如何にも健全らしい、頭髮の白いのが却つて神々しい、又元氣で柔和さうな、殊に口元の少し強氣勝ちで、見るから事理の辨別の宜さうな外貌なので、間齋は話の都合が好いと、内心に喜んだ。

早速に發言して、

「御初に御目に懸ります、私は實は相良さんに御目に懸りたいと思つて出たのでございますが、承はれば御留守だと申すことで：：エー：：」

初から嘘を言つてをります、庄兵衛が居るか居ないか入る時に訊いてみた譯でも何でもない、先刻庄兵衛が取引所へ出懸けていつたのを見ておいたのだから、そこを付け込んでやつてきたので：：。「エーそこで止を得ず貴女様に御目通を願つた次第、イヤ實は、貴女に御目にかゝる方が都合は宜し

いので、誠に幸福でございました、エーお話を申しますのは些と重大な、實は御話致し悪い事柄でございますまして：：」

こゝまでかつ子は立つたまゝ、相手に御坐りなさいとも何とも云はずに居たが、事由ありげな間齋の口振に少し心配になつて、漸くに椅子を薦めて、

「何事でございますか、何卒仰つて下さいまし。』

間齋はそれ程でもないフロックコートを、皺にしてはならぬとでも思つたのか、後の方を捲つて椅子へ腰を下したが、此婦人はこりやア必定相良の妾だと、心に決めて了ひました。

「其御話と申しますのは實は少し申上悪い事柄で、貴女に御話していか悪いか、口まで出かゝつては引込んで了ふ次第で：：、併し申上れば成程と御合點が行くことゝ存じます、私が此事柄を貴女の御耳に入れるといふのは、然うして相良さんに、相良さん御自身が爲さつた古い過誤を御改めなさるやうに致したいと、それが私の心願なので：：」

こりや大に意味があると思つて解つたかつ子、相手に成丈け遠慮させずに云はせる方が宜いと、熱く聞取れるやうな容子をして受けて聞いてゐると、間齋そろゝ話を進めて、狂言の講釋に立入つた、金岡はんが原居町の家で誘惑されたこと、相良が妾を隠した後になつて小兒が生れたこと、母親が小兒を遺して貧窶と悲惨の裡に死んだこと、小兒の幸吉が亡母親の従姉に當るものゝところへ養育の爲

め引取られてゐたが此従姉も中々忙しい婦人なので手も廻り兼ねて、小兒は惨めな境遇に育てられてゐることなど、剩餘に剩餘をつけて話した。

かつ子は皆崎は何か庄兵衛が金に關して後暗い事でもあつて、それを談じに來たのだらうと思つてをつたのでございますが、此小説みたやうな話を聞いて、事の意外に悉く驚愕いたし、只管胸を轟かせましたが、其母親といふもの、憫れ淺ましい運命のこと、父に棄てられ、母に死別れた小兒のことを考へて、子供を有つた経験の無い身ではあるが、かつ子は痛く同情に堪へません、暫くは暗涙を禁め兼ねてをりましたが、癒て、

『ですが貴方、今貴方の御話になつた事柄に就きましたは、何か正確な證據にでもなるものが有るのでございませうか、斯ういふ事柄に就いては確然した證據がございませぬでは……。』

間齋ニタリと笑顔をしながら、

『證據が無くつて貴女何御話が出来ませう、争はれない證據といふのは外でもございませぬ、小兒の顔が父親の相良さんに生寫しといふことなのでございませぬ、それから又時日が符合してをります、詳しく御話すれば御判りになりませうが、何から何まで能く合ふので、露疑ふ點はございませぬ。』

かつ子は身中戦慄を禁めない、間齋は疑乎とかつ子を視てをります。
間齋は又續けて、

『御解りになりましたでせう貴女、斯んな御話でございませぬから、いくら何でも面と對つて相良さんに申上る事は出來ないんでござんす、何豈貴女、私は其間に鑑一文利得を仕やうといふのぢやアござんせん、私が今日上つたのは只今御話した従姉のおせんの代理に出ましたので、おせんも詰らない迷惑を引受けて困つて居たところ、不圖其父親が相良さんだといふことを知り當て、私に相談を致しましたので、只今も申す通り金高五十圓宛の手形を十二枚、鹿戸といふ印を用ひてはんに御渡しになりましたので、異つた名前で偽證文を發すなんて随分非道い行法と申さねばなりません、そんな理由でござんすから、私が突然相良さんに御目にかゝつたつて誤解でも招いては面白くないと存じまして、斯うやつて、先づ以て貴女に御目通を願つて、御内話を致した次第で、此の處置を如何致して宜しいか、一つ一緒になつて相談をして頂きたいと思ふのでございませぬ、貴女如何御考へでいますか、それとも相良さんの御歸りを御待して、今日直接に御話をした方が宜しいでござんせうか？ 御考を承はりたいので。』

四

間齋の肉薄にかつ子の當惑は増すばかり、

『マア御待下さい、御待下さい、そりや後にして……。』

と云つたが、飛んでもない打明けての相談は、自分も如何して宜いか判らない。

問齋は何時までもかつ子から目を離さず、かつ子が自分の話に非常に心を動かして憂慮らしく見えるのが思ふ壺に陥つたので、心の裡に「めたと思ひながら、猶は彼是れと方法を考へる、相良へ直接に談判するよりも此女から間接にすれば、屹度金は餘計になると、心裡に喜びながら、追撃に容赦がない、

『つまり執らにしても可いから方法を決めて、安心したいと斯う申すのでございます。』

『宜うござんす、私參りませう、私これから直ぐと鍋屋横町へ參つて、其おせんさんと小兒とに一逼逢つてみませう……、此處で何のかのと承つてをるよりも、實地へ參つて見る方が宜うございませう。』

庄兵衛へ話出すにしても此男から只だ聞いた丈では話が薄弱だと考へて、かつ子は直ぐと行くことにした。

『御道理、只御斷り申して置きたいのは、事が迫つてをることでございます、小兒も營養は足らず全然打擲り放しで、非常衰弱致してをるので、第一酷くつて御話にならないやうな所に轉がつて、惘然な光景になつてるのでございます。』

問齋の肉薄は歩一步増すばかり、かつ子は遂に起上つて、

『今私は仕度をして直と參ります。』

問齋も起上りながら、

『只今御話した手形の外一々御話は致しませなんだが、未だ外にも細々した入費が出て居るのは勿論でございます、子供といふものは中々金のかゝるものでござんしてね、それから又、母親が存生中に立替へてやつた金もポツ／＼あると申すことで、幾らになつてるか私にや其んなことは判りません、私は全然無關係なのでムいませうから、兎に角其悉しい勘定の書付はおせんの所で判つてをるんで。』

『承知しました、拜見致しませう。』

問齋は此時外の事に話題を轉じて、心を和らいだやうにして、

『イヤ奥さん、世の中は様々なもので、私のやうな職業を行つてをりますものは、種々不思議の事を見聞いたしました、正直な人でも、若い時の己の不所存から、年齢をとつて困難の端目に陥つたり、酷いのは、親が悪いことを働いた其の報が子供に廻つて來たり、これなんざア本當に氣の毒でござんすよ、今一寸想出したから一例を擧げて御話いたせば、貴女の御隣の芳村一家、此家の母子などはそりや本當に御氣の毒なものでございます。』

問齋はツト起つて、窓の方へ行つて、頻に隣家の庭内に目を注いで見る、實は此家へ參つたときから、儼眼をしては一生懸命、芳村家の内部の容子を少しでも見たいと、試みてをつたのでございます、

其の次第は外ではない、故芳村伯が黒田れんに與へた一萬圓の約束證書、これをモノにしようといふ魂膽なので、此證書を、安多摩の深澤から買取つた書類の内から發見けた時に、自分が推量したこと、正に間違かなかつた、後で安多摩で調べた結果推量の通りであつた、即ち黒田れんといふ小娘は芳村伯爵に慰みものにされて、一萬圓の約束證書を貰ひは貰つたが、其後伯爵が思懸ない横死をしてつたので、證書は無効、れん子は反古同様の證書を握つてただで、全然一文無し、如何かして巴里を出たいといふ一心で金が要る段になつて、其金策の方法として右の一萬圓の反古證書を高利貸の酒井へ抵當にして何がしかの金子——多分五十圓位——を借りた、と斯ういふ成行になつてをたつたので、問齋の考へたところと違はなかつたのでございます、で其後芳村家の遺族の所在は容易に判明つたもの、れん子の所在はおせんが半費つて探したが判明らない、本人れん子は巴里へ出てから如何いふ風にやつてゐたかといふと、最初或る獨身者の執達吏書記のおさすり兼下女に住込んだが、そこを下がつて、それから二三軒渡り歩いた、最初の奉公先が判つたので問齋はそれから夫へと探してみたが、れん子は最後の奉公先で何か良からぬ事を働いて追出されて、それから行先が判らなく、馬鹿骨折つて探したのも皆徒勞に屬してつた、問齋腹が立つて溜らない、いくら芳村家が發見かつても、肝心要の生きた本人脅迫の玉に使ふれん其者が居なくつては、所謂玉なしといふものだ、酷く残念に思つたが併し手段は相變らず講じてゐる、そこへ偶々此相良の談判にやつて来て、不圖庭先丈けで

はあるが芳村家の内幕を多少とも窺ふことが出来たので、問齋好都合に思つたので。

かつ子は芳村母子に同情の念を以て、心配さうに訊いてみる、

『ぢやなんですか、御隣の母子の方も、矢張何か心配になることに迫られてお在のでござんすか。』

問齋は澄した顔、

『否然ういふ譯ちやアござんすまい、只私の考へますに、故伯爵が評判の不品行の方でしたから、必定遺族の方々は今迷惑な哀しいことを有つてお在と存じますのです、私は芳村家の所領があつた安多摩に友人が居りまして、其友人から聞いて多少内幕を知つて居ります。』

此時まで窓邊に立つて芳村家の庭を見てゐた問齋は、元の座へ戻りながら、急に思ひだしたやうに、『併しです、金に原因する困難話も、一家に死人が生るといふことと較べると、何でもない事でござんすねエ。』

今度は問齋の眼に本當の涙が見えた、これは外ではございませぬ弟眞次の事を想出したからで、想出して胸を塞らしたのでございます、かつ子はこりあ此頃皆崎の親類に不幸でもあつてそれを想出して涙ぐんだのかと考へたが、そんな事は訊くでもない、別に訊ねも致しません、が問齋といふ男は下等な職業をする賤しい獸的の人物氣に染まぬ厭惡な奴だと思つてをつたが、それが今意外に涙などを流したので、流石女氣のかつ子は少し問齋の手に乗つた形になつて、自分も疾く鍋屋横町へ行つて

見る氣になりました。

間齋は

『では奥さん宜しく御願ひ申します、當にして御計ひを御待申してをります。』

『宜しうございます、直ぐと之から參ります。』

『では左様なら。』

五

かつ子は直ちに車を雇つて、これから門丸臺の後方を彼處此方と惑行いて探してみたが、鍋屋横町といふのが中々発見らない、彼れ是れ一時間ばかり尋ねた揚句、丸山町の角を曲つて人通の少い町へ来ると、一人の年を取つた老女、若い老女がある譯はございませんが、深切に教へてくれました、教へられた通り其左側の横町へ入つて見ると、此町は往來と名の付けられぬほどのジメ／＼した悪路で、其邊中塵芥が散在して臭氣は鼻をつくばかり、足の踏みどころもございません、兩側に在る家を見ると、ポロ／＼した古材木を集めて造らへたかと思ふやうな棟割長屋、軒は傾き壁は落ち、何うして人間が住はれるかと思ふやうだが、それでも皆人が住んでをります、此長家の入口のところは一軒の二階家があつて、これは稍々小清潔としたもの、此家は即ちおせんの家、おせん婆さん躬自ら、長家の

の入口に牢屋の看守然と熊鷹眼で頑張つて、其日暮しの店子達を、二六時中責めさいなんでをりますので。



何卒御入り下さい、サア何卒、宜く御判りになりました、此鍋屋横町は未だ新開町で、番地も碌に付い

かつ子車から降りやうとすると、おせん婆さん疾や既に其大きな圖體を敷居の所へ現はしてをります、其大きな咽喉頭と腹で、古物のくすんだ青い絹の着物は破竹切れさう、兩方の頬が大層赤く且膨らがつてゐるので、有るか無いか判らぬやうな鼻は二つの炭火の間に挟まれて好い鹽梅に灸か

れて了つたやうに見えてをります、此風體のおせんを見たかつ子、不快な心持が先へ立つて、一寸躊躇つてをりますと、鳥の笛のやうに甘つたるい其癖鋭い聲で、向方から言葉をかけた、

『オヤ奥さん入來ッしやい、皆崎さんの御話から幸吉の事で御入來になつたのでござんせう、サア

てないのでございますよ、サア貴女、御入んさいまし、何は借置き子供の事を御話をしなればなりません、本當に困つた情ないことでございます……。』

かつ子は家の中へ入つて、突立つてゐる譯にもいかないから、破けて臟腑の出かゝつてゐる椅子へ腰を下ろした、此室は食堂で、見るもの觸るもの脂ぎつて、黒光りに光つてゐて甚だもつて心持が好くない、加之に暖爐に火が一杯詰つてると見えて眞紅になつて、熱度の酷いところへ、妙な臭で呼吸も詰つて了ひさうでございます、おせんは愛想やらチャラツボコやら取交せながら、貴女は本當に御仕合でござんす、私は市中に用の多い身體で平素六時前に家に居ることは滅多にないのでござんすなど、餘計な言を喋り立てるのを、言はして置けば限が無いから、かつ子は好い加減に押留めて、

『私は今日子供の事に就きまして上つたのでござんすが。』

『ハイ畏まりました、御目に懸けませう、最早御存じでございますが、子供の母親と申すのが私の従妹でございまして、マア私も今度の事に就いては出来る丈け義務と思ふことは致した積で、ハイ此が一件の書類で、これは其の諸勘定書でございます。』

おせんは戸棚から宛然辯護士の事務所まで仕てあるやうに整然と一つの大きな袋へ一纏めにしてある書類を取出して、此はんといふ娘も、元は誠に好い職工で評判も良かったのだが、相良さんに飛でも無い目に遇つて、加之に逃げられて了つてから、悉皆墮落して、相手は選まず、酒は飲む、仕様の無い

女になつて了つたと、言葉巧に説いて聞かせた。

『御覽なすつて下さい、此通り、ヤレ一圓貸せソレ二圓要るといふ風に、皆此に記けてあります、日附も此通り、六月廿日に一圓、廿七日に又一圓、七月三日に二圓、然矣々々、此時分にはおはんさんが病氣の時でございます、二圓が幾つも續いてをります、其から又、子供に着物も着せなくツちやならないので、それも皆私の手から出る、此通り子供に出した金額のところへは、幸の字が記けてございます、到頭おはんが亡くなる、其亡なりかたといつたら夫は、實に可憫な姿でござんした、何て言つていいか、マア襪を被つたまま、掃溜の中へ突のめつて死んだも同様で、其跡始末は何から何まで、私が背負込んで了つたのでござんす、死んだあと子供の費用に出した金が毎月ざつと五十圓、其位は當然でござんせう、父親さんが金持なんですから、子供に五十圓位出したつて可いちやござんせんか、ねエ貴女、マア夫れや此やの費用の合計が五千四百三圓、これへ約束證書の金高六百圓を加へると、丁度六千圓になるのでござんす、ハイ何もかもで六千圓あれば済みますので、これを御覽なすつて下さいまし。』

かつ子は一々呆れて、胸がムカ／＼、顔が蒼くなる程嫌厭な心持になつたが、併し一ト考考へてみた、そして、

『ですが、其約束證書といふのは、そりやア貴女の所有でなく子供の有なんでござんせう？』

おせんは言葉鋭く突返して、

『御氣の毒さま、然うは参りません、私は其證書に對して金を貸してやつたのでござんす、おはんを助けてやる爲に證書を割引して融通してやつたのでござんす、御覽なさい證書には私の裏書がしてございませう、私は元金ばかり返して頂けば宜しいので、利子を御請求致しませんのは大奮發の積りでござんす、何卒熟く御考へなすつて下さいまし、私みたやうな貧乏人に、一文でも損なんどさせるやうなことは御仕なさるまいとは思ひますが……。』

かつ子が兎も角も勘定を承知したので、おせんは和らいで、聽て又笛のやうな猫なで聲、
『では之から幸吉を此へ招びませう。』

六

丁度近所に遊んでゐた三人の腕白小僧を代り／＼頼んで、幸吉を呼んで貰つたが、暫く経つても幸吉はやつて來ない、おせんも自身敷居のところへ出て大聲上げて喚んで見たが、毫末其甲斐がございませぬ、多分此處、くるのを嫌だと我儘を云つてるのであらうと、仕方が無いからおせん自分で行つて、耳を引張つても連れて來やうと、立かゝつたが、考へると幸吉の有の儘の、怖ろしい容子を見せる方が却て可からうと、

『奥さん、宜しければ私に跟いて一緒に來ては下さいませんか。』

案内しながらおせんはかつ子に、此鍋屋横町の家作は自分の亭主が伯父から貰つたのだといふことを話して聞かせた、此亭主といふのは何者であるか誰も知つてゐる人はない、無論亡なつて了つたのでございませう、おせんも家作を如何して有つてゐるかといふことを話す時の外は、亭主の有つたことに就いて話をしたことは無いのでございませう、只貰つたといふと大層割の好い話だが其實手數ばかり懸つて利益なんか有りはせぬ、殊に市役所から蒼蠅いことを百萬遍云つて來て、此家作内では住人間が蠅の死ぬやうにコロコロ死ぬから、衛生に適ふやうに修繕をしろの改良をしろのと、始終小喧しい検査人さへ寄越す、多少の面倒ぐらゐは見もするが、金のかゝることなら一切以て眞平御免、黙つて諸々言つてゐれば何んな贅澤な命令をしてくるか譯らない、一週間大まい一圓といふ安家賃の裏店家作に、如何其様な間尺に合はぬ事が出來やうと、おせん飛んでもない愚痴をかつ子に浴せかける。其癖本人店子に對する仕打は何うかといふと、手殿しいことは一通りでない、一週一圓の家賃を、只の一度でも滞らせやうものなら直に其店子に店立てを食はして、一日も容赦はない、少し氣の利いた貧乏なら只でも御免を被りさうな軒の下に、おせんは宛然亂暴な警察官が怒鳴るやうな恐ろしい權幕を行つてゐるのでございませう。

胸が詰るやうな思ひをしながら、かつ子道端や兩側の容子を見ると、イヤハヤ御話になつたもので

ない、満目荒廢に委棄した光景、臭い汚ない窪地、塵芥は勝手に棄つ放しになつて、一面に掃溜場かと思はれる、地面がデメム／＼ジユク／＼してゐるから毒瓦斯の籠つた空氣が立騰つてをります、今日は幸に寒い日だから可いやうなもの、これが暖かい日でもあると、此有毒瓦斯が遠慮なく人の鼻孔から人體を襲はうから危険千萬、かつ子は危険に思ひ／＼、此塵芥の菜葉や骨の屑の腐つた中を拾つて歩行く、中々他見をしてゐられない、只少しでも眼を外へ使ふ餘裕があるときだけ、兩側の住家へ使つて見ると、形容の出来ない鳥獸の糞見たやうな人の住家が、ガタビシ震動つてゐる、それが種々異様の材料で間に合はせに繕つてある、碌そつば戸の無い家があつて、中から眞黒な穴のやうなのが見える、其穴の中から人の呻吟く音が聞える、一家七人も八人もあるのが疊も薄縁もない泥床の上に住んで、寢臺などの無いのは勿論、男も女も子供も、皆一緒に、宛然腐りかゝつた果物が一緒に置いてあるやうに、然もこれが人間と生れた孩兒時代からのだから恐ろしい、だから此にゐる人間は何れを見ても亡者のやう、蒼い瘦こけた畸形的の、頭髮は蓬のやうな、皮膚は垢に染つた、氣息奄々たるものばかり、肉破れ骨現はれ、歩武踰跟恰も喪家の狗に似たものばかり、物凄くも亦恐ろしく、一朝室扶斯とか天然痘の風でも吹かうものなら、忽ちにして人間の半分は墓場へ持つて行かれるのございます。

おせんは續けて、

『如此な所でござんすから勿論幸吉は悪いことばかり見てゐるんでござんす、最早十三にもなるんですから、教育のことも段々考へてやらなきやアなりません、尤も母親が生きてる時から、悪い事ばかり見覺えて、第一母親からして酒をくらつて、亂暴ばかりして、子供に構ひツこなしたつたんですから、此兒は良くなりツこはありやアしません、私も猶且側で宜く監てやれば可のですが、第一市中に忙はしい用のある身體、さう／＼は手が廻らず、學校へ遣らうかと考へてもみたんですが、毎日此濼端なんぞ遊び廻つて、碌に家へも寄付かぬ體たらく、今日迄他人様のものを盗んだといつて、尻を持つてこられたことも、一度や二度ではござんせん、尤もそれは眞の惡戯でござんすが……、そして貴女、此年齢だのに女の子に押搦ふなんて、大それた眞似をするのでござんす、それも悪い母親が手本を見せたからでござんすが、然ういふ風に、爲することなすこと大人びて、とても十二三の兒とは思へません、申上げずとも一ト目御覽になれば御判りになるのでござんせう、私も心配でござんすから、些と何かさせた方が可い全く他人中へ出すのも可からうと、實は過般から湯澤とくと申す青物を背負つて門丸臺界限を賣つて歩行く御婆さんの所へ頼んで、毎日一緒に市場へ行かせたり青物を擔がせたり、行つてゐるのでござんすが、それが貴女困つたことは、其おとくといふのが此頃中から腿のところへ腫物が出來て、商内にも出られないで引込んでゐるといふ始末で……、オヤ／＼貴女、參りました此處でござんすよ、サア御入んなさいまし。』

かつ子は入らうとしたが、此家だと指示された家が恐ろしい程汚穢ないので、思はず知らず後退りした、此家は此横町の一番奥の家で、物置小屋にも劣つた土間小家、少し地を掘て柱を掘立てたのだから、穴みたやうな、何の事はない芥溜場、窓などは無論無いから内部は眞暗、毀れかゝつた古戸があるが、それを締めると内部が眞暗になるから締めることが出来ない、夫故に寒い風はビユウ／＼遠慮なく入つて来る、土間の片隅を見ると、穢くるしい藁床が追放出したやうに置いてある、外に何一つ家具らしいものはございませぬ、有るものはビールの明函それも大分古いのと、半分腐つた大きな籠、明燈が一つ置いてあるが、之は食卓や椅子などに使はれてるのでございませぬ、壁は落ちて骨が現れてゐるし、蜘蛛の巣は天井や隅々に張り放題に張つてある、雨の洩るのは勿論のこと、所々其跡が現然と判明つてをります、第一に臭氣、其臭氣が大變、殆ど鼻を撞いて刺すやう、要するに此世の姿は此處には見られないのでございませぬ。

おせんは大聲で呼立てた、

『おとくさん、おとくさん、在家かえ？ 今幸吉の心配をして下さらうつて方が入來しつたから、御連れ申して來たんだよ、オイ幸ちゃんや、何をしてゐるんだへ、疾く出て來ないのかえ？』

やがて藁床の中で汚い大風呂敷見たやうなものが懸けてある眞黒な塊がモク／＼と蠢きだしたので見るとそれは人間、四十格好の肥つた婦人で、殆んど全裸と云つてもいい容體、縮れた頭髪が顔を圍繞してゐるが、それでも容貌はさして醜くもありません、呻吟の聲を喘へぎ／＼、

『何か好い話があるのなら入つて下すつたら可い、噫々矣最早逆もやり切れない、貴女、私が腿へ出た腫物の爲に、斯うやつて起ることが出来ないのが今日で最早十五日、勿論今は鑑一文あるぢやアなし、商賣も行れませぬ、無けなしの襦袢があつたが、幸吉に紙屑屋へ賣らせて了つたし、此上賣るものも無いませぬ、今夜にも餓死んで了ひはせぬかと、心配してゐるのでござんす。』

そして更に聲を高くして、

『如何したんだよ幸や、出ろといふに何をしてゐるんだ、奥様が好い事で來て下すつたんだ、執つて食はうといふのぢやない……』

土間の左の端に猶一つの古籠があつて、それに古風呂敷が懸けてあつたから、かつ子は襦袢でも纏めて置いてあるのだらうと思つてゐると、此時ムク／＼と其黒い山が動き出したので、愕いて少し慄へながら見てゐると、それは矢張人間で、即ち幸吉が寝てゐたのでございませぬ、幸吉の服装も矢張酷い、襦袢々々した衣服で、穴のところから膚が見えてをります、戸口に近いところの明るい方へ向いてゐる爲に、悉皆と顔も服装も見える、其顔をかつ子熟々窺つて見ると、似たとはおろか瓜二つ、

庄兵衛に生寫しなので、かつ子開いた口が塞がらない、暫らくは茫然と見詰めたまゝ、呆氣に奪られてをりました、今は疑惑も何もない、親子といふことは争はれぬ事實となつて了ひました。漸く幸吉は口を開いた、

「おらア厭だ、又學校へ行けなんていふんだらう。」

かつ子は依然見詰めたまゝ、心は益々不安に鎖されてをりましたが、遂に口を開いて、

「おまへ、何故學校が爾う怖いの、學校へ行つての方が此處に居るよりか何んなに宜いか知れませんか、エ？ おまへは何處へ寝るの？」

幸吉は糞床を指して、

「そこへ寝るんだ、おばさんと一緒に。」

飾りの無いところを言はれて、餘り酷いと思はせるのも悪いと、おとくは困つて辯明らしく、

「何豈貴女、幸吉の床も作らへてやつたのでござんすが、それもお金が足りないので、賣つて了つて此始末、何も仕方がございませぬ。」

おせんも今は幸吉が金儲の資本だから大に庇はなければならぬから、

「おとくさん随分酷いねエ、幸ちゃんおまへ寝る時には私んところへ歸つて寝たら宜いちやアないか、おばさんと如此なところへ寝なくつても。」

年齢には、早生た生意氣な幸吉は、

「一緒に寝たつて宜いやい、おばさんは己の嫌だ……。」

大それた幸吉の言葉に、おとくは流石に極りが悪い、冗談に紛らして、

「呆れた言をいふ、本當に大人も蹴したよオホ、。」

是等の會話や現場の光景に、かつ子は只々心に戦慄を感じて、畜生道へでも陥ちた心持、悲惨、腐敗、卑陋、墮落の極底、到底形容に辭が無いと、暫し茫然としてをりました、此上は一刻も此場に居たゝまれない、疾く此場を離れたいと、懷中から十圓札一枚を取り出して、見舞にと差置いて、ソッコにしておせんを促して、おせんの處へ歸つてまゐり、何とか話の方法をつけて幸吉の始末をせねばならぬと、いろいろと考へたが、思ひ出したのは養育院、然うだ斯ういふものを入れるのが養育院、幸吉は差詰め養育院へ入れやうと、心に浮べて見たのでございませぬ、現在此化者のやうな姿を庄兵衛に見せるに忍びない、尠し垢汚でも取つて身清麗にして、それから連れて行つて、初めて委細を話して名乗らせる方が可からうと、そこは流石に優しい女ごころ、當分幸吉のことは、庄兵衛には告げぬでおいて、兎も角も二三ヶ月間幸吉を養育院へ入れやうと、然うかつ子は取決めました、そこでおせんにも其事を話すと、おせんは譯つたやうな譯らぬやうな、

「さうでござんすねエ、何でも宜いやうになさいませ、話は只今御話いたしました六千圓を拂つて頂

きさへすればそれで宜いので、外に申分はございません、夫丈の御金を頂かない内は、幸吉を私の手から差上げる譯には参りませんので。』

八

六千圓と引替といふおせんの要求には、かつ子も當惑して了つた、自分は其様な金は有つてをらぬ、親庄兵衛には當分一仔始終を告げずに置きたいのだから、今之を出させる譯にはゆかぬ、仕方がないから、種々と論じたり頼んでみたりしが、おせんは一向に受け付けない、そこへと行くとケンもホロロ、が併し突如六千圓纏めてといふのも少し無理難題で、剛情を張ては反つて蛇蜂取らすになるかも知れぬと、見て解つたおせん、一の割引條件を呈出して、

『それぢやア如此なさい、大まけにまけて、現金で、二千圓頂戴して、殘金は少し御待申しませう。』條件は輕くなつたが、かつ子の當惑は依然同じ、何處から如何して此二千圓の金を得やうかと、種々に考へた、が突如胸へ浮んだのは政治郎、政治郎へ一つ頼んでみやうといふ考案、然うだ政治郎ならば秘密で一緒になつて心配してくれるに相違ない、大した額でもないのだし、他の事とも違ふからまよや嫌とは云ひはすまい、第一一時の立替で、後では父から返させるのだから、差支はないわけだ、爾うだ、然うしやうと、此に心の裡に取極めて、明日金を持つて幸吉を引取に来ると言葉を番つて、

おせんの家を立出でました。

時計を見ると未だ五時にしかならない、此事は是非一つ今日中に纏めて了ひたいと思つたから、待たせてあつた車へ飛乗るが疾いか、かつ子は車夫に政治郎の住んでゐる飯王町の町所へ急がせた。

政治郎の所へ来て見ると、取次の書生が、旦那は今湯に入つて御在だが兎も角も申上げてみませうと、奥へ引込んで行きました。

通された一ト室に、かつ子は纔と一ト息つく隙が出来たので、心を落着けてをりました、此政治郎の住居と申すのは、さして大きくはないが中々贅澤に且つ氣が利いて出来てる家で、窓掛や敷物などは殊に驕奢を極めたもの、整然とした一ト間へ入ると、何とも云へぬ静かな、空氣の和かなところへ、仙香が馥郁と薫つてまゐります、政治郎は獨身者、殆んど女氣がないのであるが、家の中は宜く整つて清潔になつてをります、だから男鯨に蛆が湧くといふ言は此家には通用致しませぬ、疾くに妻を亡つた政治郎は妻の遺産を繼承いで、それなり自分丈の幸福を圖ることに汲々として、餘り世間と交際せず、此う安樂々と其日を送る、之も詰りは亡妻の御蔭、折角無事で幸福なのに、又他の女を引入れて、平地に風波を起すでもない、全然婦女慾を忘れたやう、以前は競馬の道樂も有つてたが、それも昨今は止めて了ふ、第一身體が健康でないから、節制主義が必要と、爾來全くの獨身生活、働かうが遊ばうが氣隨氣儘の美ましい誠に幸福者でございます。

やがて取次の書生が戻ってきた、

『何卒此方へ入来しつて下さいまし、旦那が御部屋で直と御目にかゝると仰有いました』

かつ子が相良家の家事取締をするやうになつてから、政治郎は始終父のところへ飯など食べに行つて、かつ子の忠實しいのを観てゐるので、二人は至つて打解けた間柄になつてゐるのだから、今日も遠慮なく政治郎の居間へ入つて参ると、室は窓懸布を皆下して、壁に沿つた暖爐の上の棚と一脚の圓卓の上に、六七本の白蠟が點けてございます（彼國では電氣や瓦斯は餘り文明的で反つて高尚でないとしてございます）此室は空氣がソヨとも動かないのだから、火先は穩かに真直に上方へ點つてをります、其火の光りで室内を見ると、宛然藹たけた美人の住つてゐる閨房のやう、翠帳紅圍の觀がある、政治郎は此室を自分の極樂淨土と考へ、かけ放題金をかけ、有らゆる贅澤三昧を行つてをるのでございます。

やがて隣室の湯殿兼化粧室に續いてゐる戸が開いたと思つたら、政治郎出て参つた、

『イヤアかつ子さん、何御用？ 何か始まりましたかね？ 親父が死んだとでもいふ譯ぢやアないでせうね？』

湯上りの白フランネルの麗雅な浴衣姿、サラ／＼して新鮮な皮膚が、石鹼だか香水の爲だか好い匂をしてをります、顔は美麗で娘子のやうだが、鮮かとはいかない、頭腦は空虚だが其明瞭した眼容は

一寸伶俐然に見えます、開いた戸のところから風呂の水の出る音が未だ聞え、湯には強い上等の香水が注してあると見えて、湯氣の好い香が和かに立騰つてをります。

戲言とは云へ随分非道い非肉を言ふものだと思つたが、かつ子は答へて、

『否々そんな大事ぢやございませぬ、大事ぢやアございませぬが、實は少しばかり貴郎に、ソノ申上悪い事なのでござんすが、マア何卒御勘辨なすつて下さいまし……』

『僕は之から市中で飯を食ふ約束があるが、マア可いや、衣服を着替へる時間があるから、着替へながら承らう、何です一體其用といふのは？』

九

政治郎は待構へられる、さて待構へられると發言者は躊躇する、かつ子は只だ口裡で咳くばかり、第一此萬事贅澤で出来上つてゐる光景に心を打たれて、言ふことも出なくなつて了つた、ア、如何して斯う生涯が異ふのだらう、幸吉のやうに裏店の隅の芥溜に轉つてゐる犬みたやうなものが居るかと思へば、斯う仕たい三昧の贅澤に包まれて、其日を送つてゐるものもある、一方は窮困饑餓汚穢の極底に陥つてゐるのに、一方は留度の無い贅澤の仕法に困つて、それで不足も言兼ねぬでゐる、加之にそれが兄と弟、本當に世の中は不公平だと、かつ子は熱々考へた。

「アノ、御話と申すのは、實は長い因縁談でございます、これは貴郎には申上る方が宜いと存じて申上げますので……申上げる方が宜いどころか申上げなければならぬと存じました事柄で、是非貴郎にも御相談を願ひます。」

之から政治郎はかつ子の言ふことに耳を傾ける、立つたまゝ聞いて居たのが、話の意外なのに終には立つてゐる足が利かなくなつて、かつ子の前へ椅子を寄せて、腰を下して耳を差出す。

「何です？ 何ですって！ 何もハヤ呆れた事だ、そんなら僕は一人ツ子ぢやないのですね、言葉も懸けずに突如天から怖ろしい弟が降つて湧いて来たといふ、驚いたね、どうも、愕かざるを得ませんね、どうも！」

これで政治郎も本氣に心配しだしたと見て解つたから、かつ子は此上段々と、金を出させる方へ説いてゆかねばならぬ、兄弟が殖えれば父の財産も相當に分けなければならぬから、其事もそれとなく説いて聞かせたが、政治郎は鼻の先でフ、ンとばかり、

「親父の財産ッ？！ 財産も聞いて呆れる、寧ろ抱腹絶倒の至りだ。」と獨りで笑つて、

「イヤ最早呆れて物が言へぬ、御免、御免。」

と云ひながら起上つて、隣室の化粧臺から貝製の爪擦具を持つてきて、澄して爪を擦つてをります、

擦りながら又かつ子に、

「だが貴女は、其の怪物の始末を如何なさらうといふのです、真逆監獄へ打込む譯にもいきまますまいな。」

そこでかつ子はおせんの勘定のことを話を致し、幸吉は養育院へ入れることにして、此に差當り二千圓の金が必要が、一時立替へて呉れぬかと請求に及んで、

「私は此事は未だ親父さんには秘密にして置きたいと思ふのでござんす、親父さんに云へばお金は出来ませうが、未だそれを云ひたくありません、そこで御相談するのは貴郎ばかり、何卒一つ考へて頂きたうござんす。」

言葉を盡して頼んだが、政治郎は遂に断然と断つて、

「親父には到底も貸せません、一文たりとも出せません、僕は誓つて貸さんと云つたら貸さん、こゝに親父が橋銭が一銭なくツちや其橋が渡れんといふことがあつても、僕は断じて其一銭を貸しませんね、判りましたか、エ？ 戲談にも程がある、人を馬鹿にしちやア困るでさア。」

政治郎が随分非道い不人情な言を云つて、他人の自分さへ聞くに聞かれぬ程なので、かつ子は最早喋る勇氣もなくなつたが、金が無ければ何にも此うにも出来ぬのだから、更に考案を工夫して、之を自分の責に任じて借りることにして、唐突に言出した、

「貴郎私なら如何でござんす、私に貸しては下さいませんか、二千圓文？」

「貴女に？ 貴女に？」

云ひながら依然爪を擦つて、而してチロ／＼上は眼を使つて、かつ子の心中の底の底まで見透さうと致してをります。

「貴女にか？ 宜しい、貴女になら御用立しやう、貴女なら正直だから、返す時に返して下されば宜しい。」

政治郎は直ぐと立つて別室へ行つて、二千圓の紙幣を出して来てかつ子に渡した。

「ちやア此に二千圓……餘計な言だが、一體貴女は親父を買被つてゐなさるよ、用心なさるが可ござんすせ、イヤ併し貴女は貴女の御隨意だが、一體女ツてえものは不思議なものだ、直に人を信用したり、信用すると悉皆心を許して了ふ、好い時には宜いが悪くなると大騒ぎ、マア行つて御覽なさい、困るときには又御相談相手になりませう……。」

室の中の空氣の和かさと自分の衣服へまで染込んだヘリオトロプの匂で息が詰つたやうになつたのを、戶外へ出て車の上で一ト息ついて、かつ子は幾分か心も安らいだ、兎も角も金は出来た、子供も助けることが出来る、明日は如彼しやう如此しやうと、種々に考へる。

+

翌日は例時よりも疾く起出でて、入院に就いていろ／＼手續が要るので、其處此處と奔走したが、何しろ自分は理事委員付の人間になつてゐるのだから、事の運びが頗る容易で、其日の午後には何時幸吉を入れても差支がないまでに成りました、で、衣服も小清潔したのを着せなければならぬので、急に調べて持つて参る、只心配したのは幸吉又學校へやられるのは嫌だと云つて駄々を捏ねはせぬかといふことだ、そこで、おせんへはこれから行く先づもつて電報で知らせました。

おせんの家へ参ると、おせんは入口に待受けて、差詰め意外な報道をかつ子に聞かせた、それは何事であるかといふと、前夜突然おとくが死んだ、醫者も間に合はないので判然した診断は下せぬが多分腦充血の爲といふこと、幸吉は一緒に寝てゐたが暗がり死んでゐたのを知らず、體軀が冷たくなつたので氣が付いた、と斯ういふ事でございます、かつ子も意外な悲報に胸轟かしたが、何が幸になるやら知れぬといふのは、幸吉此事に怖氣が出て、其夜一夜を慄へながらおせんの家で過ごしたが、もう嬾アも死んで了つて穴へ入つて腐るのだから此に居る氣もなくなつた、之から好い庭のある家へ行けるのは嬉しいと、今更心が進んだやうで、イン／＼とかつ子持參の衣服に着替へて、即刻にも行く氣になつてをります。

おせんは二千圓の金を請取つて請取證を書きながら、かつ子に念を押して、
『ちや宜しうござんすか、然うしますと、残金は今日から六ヶ月後に一度に御拂ひ下さる、確に願ひ
ましたよ、で若し御約束が違ひますれば、直接に相良さんへ御懸合申すと、斯う致して置きませう。』
『相良さんへ直談判つたつて、残金は相良さんから御拂申すのですよ、只今日のは私が立替へて拂つ
ておくだけの事です。』

愈々取引が済んで、幸吉はおせんに別れを告げる、可なり永い間の親しみも別れる今日は至つて冷
淡、幸吉は碌に挨拶もせず、疾く車に乗らうと致します、おせんは間齋に何故六千圓を一時に取らず
に現金二千圓の、残金六ヶ月拂としたかと大層叱られたので、今此大事な人質が出てゆくのを恨めし
さうに見送つてをります。

『ちやア奥さん、私には正直にして下さいませよ、宜ござんすか、罷り間違つて後で後悔なさらぬや
う、呉々も願つて置きます。』

鍋屋横町から養育院のある美納町へ行く途上、かつ子は種々と幸吉に問を懸けてみたが、返事は只
々單語ばかり、全然要領を得ません、幸吉は物珍らしげにギョロギョロと、其光る眼を幅廣い往來の大
並樹だの通る人だの立派な建物などに配つてをります、彼は書くことは皆目出来ず、讀むことも數へ
るほど、學校へ送られは送られたが、何時も直と逃出して濠の土手縁などで遊び暮すといふ始末、何

しろ恐ろしい貧苦と悲惨の裡に野生的に生長して來たのだから、年齢にしては早生で古こびて、性の
悪い餓鬼でございます。

彌美納町へやつて參つて、車から下りて院内へ入つて、其中央の大廊下右に男子部左に女子部を見
て參りますと、幸吉は只呆氣に奪られて、獸の眼みたやうな峻しい眼は益々光つてをります、大きな
中庭に美事な樹木が栽ゑてあるのに疾くも氣が付く、續いては陶器製の瓦で壁が張詰めてある臺所に
目がつく、其開けてある窓から出てくる炙肉の香が鼻につく、夫から大理石で飾つてある大食堂、寺
院のやうな式場、其他織戸公爵夫人が貧人に還してやる爲に其富の大部分を費つた有らゆる贅澤、一
として幸吉の目に驚嘆の種とならぬものはございませぬ、總てこんな所を連れられて、幅の廣い階段
を上つて、同じく幅廣の廊下を、規定の入院手續をする爲に遂に事務局へ參りましたが、先刻新たに
給與はれた靴が此廣々した果しのない廊下と壁へ響くので、本人はキョロ／＼キョト／＼、併しそれ
でゐて鼻うごめかして歩行くところは、此が自分の住家になるのだと、聊か自慢のつもりでございま
す。

更に證書へ印形が要るので、かつ子は幸吉を連れて階下へ下りて、又異つた長廊下を通つて行きな
がら、廊下に沿つた硝子戸の戸口の前へ立つて内部を見ると、此處は彫刻細工をする作業場で、幸吉
と同年位の子供が數人、長い臺を圍んで木彫を習つてをります、かつ子は幸吉に言つて聞かせる、

「幸ちゃん、ソラ此を御覧、此室では衆人が如彼やつて働いてゐるよ、人間といふものは幸福を好くし身體を健康にしやうと思へば誰でも皆働かなければならぬからね……夜になると種々の御稽古もあるよ、だからおまへも之から能く勉強をしなければ不可せん、大人しくして能く勉強をして、偉い人にならなければいけません、之からおまへが立派にならうと悪くならうと、皆おまへの心懸け一つに在るのです。」

幸吉は額に八の字を寄せて、勉強などは嫌だといふを現はしたきり、別に返事も致しません、只其小狼のやうな眼で、横眼をチロリ〜と使つて、さも忌々しく立派だと、羨むやうな容子をして、何にも働かずに皆自分のものにするならと云はぬばかり、かういふ彼の心だから此院へ入るのは本意でない、巧く盗んで巧く脱出さうと考へてゐる囚人のやうな心しか有つてゐるのでございます。

「サアこれで手續が悉皆済みました、御風呂場へ行きます。」

十一

規則として新規入院者は先づ以て湯に入ることになつてを、湯殿は二階で、病室の隣にある、此の病室は二つに區分してあつて、一は男兒一は女兒のでございます、而して病室に接して、敷布だとか手拭だとか其他洗濯物などを入れて置く室がござります、布置場といふと物置みたやうだが其體裁は中々立派で、漆で塗上げた樅材製の棚が三段、壁に沿つて造つてあつて、其上へ點一つつかぬ純白な敷布や布類が順序よく置かれてある、其明るくつて清潔なことは、完全な健康といふことを顯はして、實に心持の好いほどでございます、此室へは屢々委員の貴夫人が集まつて、午後の一二時間を過して參りますが、名目丈は院務の監督の爲とは申せ實は夫程でもない、只此へ來さへすれば貴夫人が何れ程此慈善事業に力を入れてゐるかといふことが譯るので、其主意でやつて參つてるのでございます。

今日も恰度芳村伯爵夫人が娘の有子嬢と來てをるが、夫人が有子を連れてくるのは娘に慈善事業に興味を持たせ用の無い時の氣晴しにもと思つての爲でございます、有子は今日は保姆の一人に手傳つて、病氣が少し癒りかゝつて二人の院見に、醫師から許された間食の、麵包にジャムを付けたのを造らへてをります。

伯爵夫人は、湯に入るまで其處に待たしてある幸吉を發見けて、

「ア、新規入院者か。」

通例夫人はかつ子に對してイヤに改つた隔意を有つて、顔を合はしても只鳥渡頭を下げるきり、別に言葉を交はしません、これは隣家の人間だから親しくされて來られて家の内情でも知られてはと、心配してからの事でございます、それが今日かつ子が幸吉を連れてきて、其世話の仕方がいかに

も親切で優しいので、それが夫人を感せしめたのでございませう、平時の隔意を悉皆捨て、中音で打解けた話を始めた、

「新規の入院者でござんすか此兒は？」

「ハイ、本當に御話になりませぬ非道い地獄みたやうな所から引張出して參つたのでございます此兒は……、何卒マア何分御世話さまに預かりたうございます、皆様にも御願ひ致しました。」

「此兒は両親があるのでござんすか、貴女御存じのござんすか？」

「否、母親は亡くなりましたので、誰一人世話の仕人はございませぬ、私がマア唯一人の頼りと申すやうな譯でございまして。」

「可憫想にねえマア、氣の毒でござんすねエ。」

此間に幸吉の眼は何處を見てゐるかを見ると、保母と有子が造らへてゐる麴包から離れない、奪つても食はうといふ恐ろしい色を現はして、有子が細白い手でジャムを麴包へ庖丁で敷いてゐる其手先を恨めしさうに凝視つてをります、若し此時外に人が居ず、此細い襟頸の、嫁き損なつてゐる弱々しい處女一人であつたならば、腕力で飛付いても奪ひ取つて麴包を喰ふに相違ない、否此有子其ものも酷い手籠にあはぬとも限らぬと、思はれるのでございませぬ。

幸吉がいかにも欲しさうな容子をしてゐるので、有子は保母に「一言二タ言話をして、幸吉に訊い

て見た、

「汝御腹が減いてるのかえ？」

「ア、。」

「此御菓子は嫌ひぢやないかい？」

「大好きだ。」

「ぢや今二タ切ばかり造らへておいて上げるから、御湯から出て來たら悠然と御喫り。」

「ア、。」

「麴包の多いよりもジャムの多い方が汝は好いだらう？」

「ア、。」

有子は興じて面白さうに笑つたが、幸吉は眞面目になつて口を開いたまゝにして、麴包も有子其ものも一緒に食つて了はうといふやうな相貌を致してをります。

此時男兒の運動場の方で、急に大勢の男の子が嬉しさうな聲を上げて騒ぎ出したのが聞えたが、之は午後四時の休息の時間で、作業場で仕事をしてゐた男の子達が一人残らず待兼ね出て來て、三十分間ハメを外して遊び廻はるとこなのでございませぬ、かつ子は幸吉を運動場が見える窓のところへ連れていつて見せながら、

『ソラ御覽、勉強すれば此うやつて又遊ばしてくれる、おまへも勉強したいだらう?』

『否。』

『だが遊びたいだらう?』

『ア、。』

『だから遊びたければ働かなければいけませんよ、今に段々判明つてくる、必定おまへは判つてきます。』

幸吉は返事もせず、運動場に嬉々として騒ぎまはつてゐる今後の友達の方を羨ましげに、又自分も嬉しさうに見てをります、應がて見て居たかと思つた眼はいつしか又有子が約束の、出来上つて皿の上へ二タ切乗せてあるジャム麴包の方へ向きました、唯只年が年中自由自在に遊んでゐたいのが幸吉の望、始末にいけません、が、風呂の準備が出来たといふので、到頭厭々ながら引張られて、其方へ連れてゆかれました。

跡を見送つて保姆、

『あの兒は中々手に負へさうもない兒でござんすね、顔容で判ります。』

有子、

『ですが顔容はそんな醜い方ではござんせん、貴女を見てゐる彼の子の顔は如何しても十八九に見え

ます。』

云はれてかつ子もハツとばかり、

『本當に然うでござんす、年齢にしては老けて見えます。』

十二

三人は之から、病氣の癒りかゝつた子供がジャム麴包を食べるところを見てゆかうといふので、子供の居るところへ参りましたが、此子供の二人の内の一人に就いては一寸面白い話がある、此子供は十一歳になる女の子であるが、年齢にしては早熟な子で、病氣の爲に發育が悪いか、疾や大人らしい一人前の顔をしてをります、父親といふのが大の放蕩者で、酒と女に身を持崩し、素性の判らぬ白首を引すり込んで、遂に其一人と姿を隠した、母親の方も斯うなると自暴自棄になつて、遂には負けず劣らず、幾人も情夫を拵へ、果は女にも似ぬ飲んだくれの不品行、如此な鹽梅だから娘もさんざんな目に遇つて構ひ人なく、到頭養育院に收容されたといふわけ、尤も母親は元來可憫な端目に陥つたので、小娘が養育院へ入つたのも母の願出に由るのであるから、娘が收容されてからも院へ来て娘に逢ふことを許されて、母子の情は些しも異りません、今日も母親は恰度此院へ來合はせてをりました、が、瘠せた、顔色の少し黄ばんだ、全然かまはぬ風をして、娘が清潔した白い布片の被さつてゐる蒲團

の上で枕へ倚懸りながらジャム麴包を食べてゐる其側に坐つて、涙で爛らせた臉を娘の方へやつて嬉しうに見てをります。

此母親は娘を養育院へ引取つて貰ふに就いて相良の家へ行つたことがあるので、かつ子を識つてをりますから、

『おや奥様でムんしたか、御蔭さまでまちも斯うやつてマア救けて頂いて、誠に有難いことでございませう、彼兒も一家の不仕合を一人で背負つて了つたやうな譯で、御醫師様の申されますには、家へ置いては生命も満足に有つてく譯にはいくまいといふくらゐ、其が此院へ参りましてからは、美味しいものも滋養になるものも、食べ放題に食べさせてくださいますし、靜に落着いて養生させて下さいます、本當に勿體ないと思つてをります、これと申すも偏に有難い旦那様の御蔭、瞬時も御恩は忘れません、何卒貴女様から熱く旦那様へ御禮を申上げて頂きたく存じます。』

心から有難い容子をして嬉し涙にかきつけてをります、此旦那様といふのは即ち庄兵衛の事で、養育院は庄兵衛其人が主となつて經營してゐるものと思つて、庄兵衛を徳としてゐるのでございませう、素より當院は織戸公爵夫人が創めたもので、夫人の資金で行つてゐるのであるが、中以下の人は事實を知らず、皆相良が行つてゐるものと思つて居る、公爵夫人は姿を見せたことはなく、働く方面は相良がやつて、直接に貧民に接してゐるのは庄兵衛であるからして、此院へ救はれてくる程度の人達は、

皆相良の御蔭だとばかり思つてをるのでございませう、尤も相良も大に助力は致したに相違ない、大に徳を養つて何かにつけて自分の爲にしてゐるから、悉く貧人の友達となつて、如才なくやつてをる、だから貧乏人達は相良庄兵衛其人を大の恩人どころか神様のやうに敬ひ尊んでをりますので。

『奥様、旦那様に何卒申上げて頂きます、此世に旦那様の後生を祈念してゐる女が一人あるといふことを旦那様の御耳に入れて下さいまし、かう申上つたつて何も私は信心深いからといふ譯ではございません、私は信仰して居ないものをしてゐるやうな風は決して致しません、正直を申上げませば、神様なんて何にもありません、神様だの御寺だの最早御免でございませう、神様なんぞ何にもありません、御寺なんぞへ行つたつて只時間潰しでございませう、そりや私達よりも一層偉い神とか天とかいふものが有りはしませう、善い事をした人には、其天に祈つて好い報酬がくるやうに仕なければなりません、何も御寺が何うのといふことはございません……。』

出かゝつた涙を拭つて今度は娘に、

『まぢや、汝熱く御聞き……。』

娘は雪のやうに白い院服に、蒼い顔をして、滅多に食べたことのない麴包に付いてるジャムを美味さうに嬉しうに舐つて居たが、頭を擧げて依然御馳走を食べながら聞いてゐる、

『まぢや、アノネ、おまへ毎晩御床へ入るときにね、かういふ風に兩手を合せて、忘れずに相良様の

方を拜んで、相良さんの御身體が息災で幸福であるやうに、御天道様に御願ひ申すのだよ、相良さんの御恩で如此やつて居られるのだから、解つたかい、忘れちやいけないよ。』

十三

それから數週間、かつ子はいろ／＼と、精神上道徳上の考想に頭腦を悩ました、庄兵衛が眞實如何なる人であるかといふことが、考へれば考へる程判らなくなつて了つた、はんといふ少女を獸慾的に手籠にして、然も其爲め不具にしたこと、反古同様の證書を當がつて、姿を隠したことを、幸吉といふ子供が生れたこと、それを全然構付ぬこと、其子供は野獸のやうに生育つて今日に至つたこと、それや此れや聞いても戦慄とするやうな事どもを考へると、心に不安不快を禁じない、さうかと思ふと養育院にゐる子供の母親のやうに、涙迄流して庄兵衛の恩に感じ入つて、庄兵衛を活神のやうに子供に毎日拜ませるものもある、非常に不徳不潔な人間かと思ふと、崇拜渴仰すべき高德の人格であつて、如何解いて宜いか判らなくなつて了つた、かつ子は種々と考へたが、如何といふ判断がつかないので、此頃は自分で考へて、其様に立入つて庄兵衛の人物を斯うと定めず、誰しも男子には毀譽褒貶があるのだから、庄兵衛といふ人にも善いことも悪いこともあり、別に深く咎めるにも足らぬと、第

一に吾身が婦女であることから考へて、其儘にして了ひました。
庄兵衛の人物に就いての考へは其まゝにして了つたが、自分が一度之に身を許したことに就いて考へ出すと、かつ子は今更ながら氣の濟まぬやうな恥辱のやうな心持がして、居ても立つて堪へられませんが、併し爾う思つたとて恢復のならぬ事だから、最早濟んで了つたこととして、一寸した夢のやうな機、飛んでもないことを二度と繰返すまいと、心に念じて、氣を取直してをりました。
彼は是れてゐる内に三月経つたが、かつ子は一週間に二度づゝは、養育院へ行つて幸吉を見舞つてをりました。

ところが、或日のこと、かつ子不圖吾身を顧みると、如何したことか身は庄兵衛の腕に抱かれてをります、如何して然うなつたのか判らない、偶然としたことからでもないやうだ、一時的の成行からでも無いやうだ、そして夫からといふもの、定つた關係の、夫婦のやうに、身を委して其日を送つてをるのでございます、如何したことございませうか、心の一部では恥辱とも飛んでもない事とも思つて呪つて居る他の一部では、只恥しいと許り、物珍らし氣に、娘のやうに、昔を懐出して、再び出來心に捕はれて了つたのでございませうか、それとも又、幸吉といふ子供が楔となつて、父と子と、偶然其間に立つて母の役目をするやうになつた其んな縁が、動機となつたのでございませうか？ 今迄かつ子は子を有つたとのないのを非常な不幸として哀しんでをりました、そこへ心には染まなかつた

が一度夢の裡に誘惑された庄兵衛其人の子が、圖らずも現てきたのを見て引受けて世話をしてみると、何となく情愛が出てきて、我を忘れて妻と母となり子と思ふやうになつて、心を弱くして了つた。多分然ういふ理由でございませう、流石にそこが女氣の弱いところと申すもので。かくしてかつ子は、到頭庄兵衛の有となつて了つた、或は心は欲しないのかも知れない、庄兵衛に夫れだけの尊敬を有つて居らぬのかも知れないが、兎にも角にも庄兵衛が活動家で精力家で所謂ヤリ人であるからして、其點から自然に氣を奪はれて了つたので、それに庄兵衛は、非難もあるには相違ないが、人の爲を思ひ人に好い事をし又人の役に立つことをするのだから、氣弱い女氣は如何しても心を碎かすにはゐられない。

それから二月と三月と漸次經つてくる内に、かつ子庄兵衛の動靜を見ると、事を爲るのに如何にも細心に、又中々熱心で、感すべき事が多い、萬國銀行の創立に伴ふ困難は一通りや二タ通りではないの、庄兵衛は能く其困難に打勝て、加之に誠心誠意一寸人に眞似の出来ない行法でやつてゐる、今迄は庄兵衛が何となく法律に觸れさうな、後暗いことをしてゐさうに思はれて、自分だの兄などが、連累を食ふことにも至りはせぬかと疑つてをたのだが、今日此頃の容子では其様な心配は更に無く、疑念は悉く消えて了つた、庄兵衛の熱心と勉強は全く以て偉いもの、朝は疾くから晩は遅くまで、ゆるる困難と打闘ひ、只々此新しい大機關を疾く作らへ上げ、巧く働かしたいと、側目も觸らずやつて

をるので、其熱心と勉強に感じ入つて、かつ子今では庄兵衛に、感謝と敬服の念を禁じません。

一體新しいものを作へるといふことは固より中々困難なこと、殊に他に競争的大銀行が澤山にあるのだから、邪魔をされたり、中傷されたり、陰に陽に反對に出られて、思ふやうにはすまされず、さう疾く運ぶことも出来ません、思ひも懸ない悪い噂を云ふものがある、種々の故障が起きてくる、金融迄も引締つて了ふ、資本金の使途にも障礙を來す、といつたやうな鹽梅で、もどかしくつて堪らないが、大器晩成主義も反つて宜からうと、一步一步焦心らず力まず、徐に進んで行く、が實は庄兵衛自烈つたくつて、胸をモヤ／＼させてゐる、宛然競馬の馬が駆出したくつて溜らないのを、制せられて足をムズ／＼させてゐると同様だ、が此漸進主義は勿怪の幸、世間からは着實主義のやうに見られて、流石大銀行は創立の時から立ち方が立派だと、取引所や金融社會から言囃される、然るに樂屋は全然反對。

十四

如此な風にして進んで、纔と第一回株主總會を開く迄に相なつた、で其開會日は四月廿五日といふとに定められた、さて、濱野敏之は頭取のことだから是非出席しなければならぬ、是非させなければならぬから、急いで出てくるやう庄兵衛から言つてやる、そこで敏之は二十日に東歐を立立致

して急いでやつて参つた、敏之のもたらして来た土産は誠に上等で、此度合併させる諸汽船會社間に結ばれた契約書とカルメル銀鑛開掘に就いて得た特許状とを懐中に入れて、其外には君士坦丁堡に萬國銀行の支店ともいふべき土耳其國立銀行といふのを設立する大體の準備を調べて来たといふ、誠に好い土産である、尤も小亞細亞幹線鐵道敷設といふ大問題は未だ熱さな爲に宿題にしてきたが、それは總會が済み次第直と又引返して、引續いて研究をしなければならぬのだ、萬事此んな工合に運びが好いので、庄兵衛は大喜び、そこでかつ子も一緒になつて、三人で悉く熟談を遂げた末、庄兵衛は如此な大企業に應ずるには今の資本では足りないから、其増加は是非共必要であると言立てた、尤も此増加の事に就ては庄兵衛は既に大株主たる醍醐にも由利にも瀬藤にも小部にも相談を致して、賛成を得たのでございます、由つて敏之にも賛成させて、案を立て、其案を總會の前日開くことになつてゐる取締役會に提出して、其から總會へ持出さうと、斯ういふ運びに致しました。

廿四日には、豫定の通り二階の重役室で取締役會が開かれたが、緊急公式の重役會であるから嚴かで、取締役は一人の缺席なく出席いたし、隣の芳村家の庭の樹立の爲に室内が少し青くなつて反つて其れが又、今日の會に重々しさを加へました、通例取締役會は毎月二度開會することになつてを、第一會は十五日前後に開會、此日の會は、二重役會の内でも名義こそ小集會となつてゐるが其實後



會よりも重い會で、當日重役の外に列席するものは各部各課の責任主任者以上でございます、第二會は三十日前後に開會して、此日には營業機關にそなはつてゐる行員は誰彼問はず、眞の飾だけに顔を列べて、前以て用意してある案を承認し調印をするといふ形式だけのことをするのでございます。

偕て今日の會に第一に参着したのは福岡侯爵、其貴族的の小さな顔を振立て振立て、別に腦裡に何にも考へが無いらしい顔容をしてやつて参る、次には副頭取の重野子爵、有つても無くても同じ様に大人しうな其癖慾張一方な風をしてゐるが、此人の職掌は一々取締役の顔容を占つて、此人には今日の議案は能く解つてゐるか、反對をしない迄に承知をしてゐるかを見定

め、少し異論のありさうな容子の人は小蔭へ引張つていつてそこを巧く説伏せるといふ大事な奔走役でございませす、これで皆な内相談が出来て了つて異論者は一人も無い、頭を一寸縦に振れば可いといふ運が悉皆整つてるのでございませす。

遂に重役會は開會されたが、敏之は第一に立つて、明日の株主總會に朗讀すべき東歐調査の結果を報告する、此報告の原稿は敏之の自身作へたものでなく、其實庄兵衛が長い前から種々に工夫用意して作へて置いたのを、敏之が齎した材料で斟酌致し、おまけにおまけを附加へて、重役會の二日前に巧手に作へ上げたもので、自分で作らへたのだから悉皆知つてゐる理由だが、今敏之が朗讀するのを、一字一句庄兵衛はさも初めて聞くといつたやうな、感じかたで聞いてをります。

さて其報告は如何な事を云つてゐるかといふと、萬國銀行創立以來爲した事業のことを並立て、其營業は日常銀行の爲る普通の業務で、小さいことは小さいが誠に性質の好い一として有望ならざるはないもの、殊に今期目立つて利益を得たのは墨西哥公債で、本公債は先月マキシミアン帝が佛國から同國へ歸られた後に巴里で發行されたもの、此の公債は性質が性質だから資金さへあれば猶且澤山買つて旨い利得を吸ひ得たものを、資金が不足なばつかりに充分手が伸ばされなかつたのは残念の至りだと、庄兵衛は結論した、併し全體から云へば開業の十月五日から十二月三十一日迄僅々三月にも足らぬ短日月であるから、此短い第一期間の成績としては頗る満足すべき勘定で、純益金は纔に四十

餘萬に過ぎないが、其中で創立費の四分の一を償却し了り、五分を株主に配當し、一割を準備積立金に繰込み、其外に定款の規定に従つて一割を賞與金として重役へ與へ、差引残額六萬八千圓餘を次期へ繰越といふ報告、見たところ普通の、誠に穩當な計算で少しも不當らしい點はないから、銀行の株の取引所に於ける相場も至つて順調、五百圓の株は徐々と六百圓になつたといふ堅實な氣配、信用の鞏固な第一流の銀行株の相場と同じ調子にいつてをります、今のところ差當り變化を起すべき材料が無いから、此二月、相場は動かぬでをりますが、根柢の氣配は至つて眞面目な、手堅い相場を願してをります。

十五

此所まで報告は現在の有様に就いて言つてあるが、之から將來に説進んで、東歐の有望なことは殆んど譬ふるに物無い程で、廣い豊饒なる原野は企業家の來るのを待つてをる、濡手で粟と云つても宜しく、中にも萬國銀行が其株を引受けることになつてゐる共同汽船會社は非常有望の大事業、此會社は從來地中海沿岸商業上に互に競争を事としてゐた中海汽船會社と海上運輸會社の二大會社と、其以下二流の會社三四をシンケートの合同させて、更に五千萬圓の資本で經營しやうといふもの、然らば地中海全體の海運業を獨占して、今迄詰らない競争に殆んど共潰れになるほどに要してを

つた營業費を節約し、之に由つて得た資金を新規新式速力の疾い設備の完全な船體の建造に用ひ、發着度數を頻繁にし、寄港地を増設し、以て東歐へ行くのは一寸つと隣國へ行く位の簡便なことにいたし、殊に一朝蘇士運河が開通する曉には（此小説を書いた時は未だ同運河が開通せぬ以前でございませす）印度東京支那日本への交通は容易になつて、従つて新共同汽船會社が重要な地歩を占めるのは火を視るよりも明かな理由、之をしも有望と云はずんば何をか有望と云はんやと、報告は此點に就いて大に説立て、ございませす。

報告は更に進んで、萬國銀行が土耳其國立銀行に與ふべき保護援助の事に及ぼし、之が又非常に有利な結果を生ずると、専門的詳細なる説明計算を擧げて解説した、それから、終りに臨んで特筆明記すべきはカルメル銀礦會社のこと、此會社も新銀行の手で設立して、資本金を二千萬圓として經營するものであるが、其銀塊の見本を化學上の分析に附した成績に由つて見ると著しく多量の銀分を含んでゐるといふ報告でございませす。

此の如くに、何れを見ても此を擧げて、一として有望ならざるなき實況だから、新銀行最初所定の資本では到底引足るわけがなく、斷然増加の必要がある、少くも之を倍加しなければならぬ、二千五百萬を五千萬にしなければならぬ、で増加の方法は頗る簡單で、誰にも合點がゆく方法、即ち新規の五萬株は現株式一株につき新一株を割振つて引受けさせる、と斯ういふ事に致すので、從來の株

主が引受けて了ふから公衆募集は必要が無い、只新規株券は額面五百圓を五百二十圓で發行する、然うすると一株に付二十圓の此割増は五萬株に對して百萬圓となるが、これは其ま、準備積立へ繰込む、二十圓の割増は不當のやうに考へられるかも知れないが、銀行の株券の相場から打算をし其將來から推定すると、毫も不當と云ひ難く、又斯うする方が堅固であつて、それに斯くして出來た資金は、其ま、積立になるのだから、之より用心の法はない、況して新株も舊株同様、拂込は四分の一だから差詰め至當と云はねばならぬ……と之が報告説明の大體でございませす。

濱野の報告が濟んだときには、異議は一つも無い、彼處此處賛成の聲ばかり、イヤ道理千萬の案である、一言もいふ處がないと、固より萬口一致でいませす、濱野の報告中諸人の動靜を見ると、各自違つてをります、醍醐は指の爪先を見ながら何を考へてゐるか知らぬがニヤ／＼と笑顔をしてをります、由利代議士は椅子へ長々と身體を伸ばして眼を閉ぢて議院に居る心地になつてゐるらしいございませす、此方に小部は靜に、人が見て居ても何でも構はずに前以て配附された書類と首ツ引になつて細かな計算をやつてをります、瀬藤は相變らず不安な顔容をして、若し現株主が、與へられた權利を放棄して割當てられた新株を引受けぬときには其株は如何なる、其株は銀行自身が自己の勘定で保有することにでもなるのか如何か、併し株が全額引受済にならなければ増加と登記も出來ぬのだから、増加といふことも有効にはならぬし、何の途株が悉く決定しなければ進行されぬ、それを銀行の所有

株にしたり又は其まゝ進むことは法律上違反となるが、其邊は如何なるなど、質問を出して見る、瀬藤が猶も其正直な憂慮を述立つてゆかうとするので、庄兵衛は側で堪へかねて、もどかしく思つてゐると、斯くと見て取つた福岡侯爵、瀬藤を遮つて嘴を入れて、貴族風のさも勿體らしく、其んな細かなことは今此所で論ずるに及ばぬ、其邊の事は職に忠實な頭取と支配人があつて萬事心得てをるから、一任して置いて宜からうと、到頭抑へつけて了つた、最早一言もいふものはない、諸人は只々御目出度うといふばかり、遂に此重役會は諸人歡喜の裡に、散會を告げました。

翌日は彌株主總會を開くことゝ成つたが、此總會も亦目出度し々の裡に美事スラ〜と濟んで了つた、總會の場所は以前の時と同じく白木町の舊と舞踊場に使つてをつたのが所有主が破産をした爲に明家になつてゐる其家屋、其處で開催いたされました。

當日は頭取が未だ來ぬ内に場内は株主で満員となつたが、場内には銀行に取つて非常都合の好い取沙汰が傳へられ、株主は三々五々其話を致してをります、其風評は何だといふと、近時政府反對黨の勢力が日に日に増して來たところが、其態度が此數日來急に著しく顯れて現内閣の實際主腦たる逓信大臣、即ち相良の兄の太木惟文に肉薄する度合が更に烈しくなつて、大木は遂に兜を脱いで、以前に加特力教の機關、今は萬國銀行の機關紙「希望」新聞が此際政府黨になるなら政府は銀行を支持してゆくと、さういふ内約が成立つた、と斯ういふ風評でございませう、株主間の語草は之で持切り、彼

處でも此方でも、喧々囂々としてをります、然るに此蓋を開けて見ると、矢張庄兵衛が矢野や阪谷を使つて巧く運動をした其結果が思ふ壺に陥つたので、斯うしておいて銀行を景氣づけ、増資を容易ならしめやうといふ魂膽なのでございませう。

十六

總て場内のザワ〜は一齊に鳴を静めたが、それは頭取の濱野と重役一同が現はれて座席に着いた爲でございませう、庄兵衛は如何したかと思つて見ると、相變らず自立たぬやうに多勢の株主の蔭へ隠れて、態と出しやばらぬ風をしてゐる、つまり報告養成の合圖をし、易々と通過を圖れば可ので、後は成丈責任を避けたい注文でございませう。

斯くて總會は開會されたが、濱野の報告も第一期の資産負債報告も、拍手を以て通過を致し、遂に資本金増加の問題に移つて、株主大歡聲の裡に此案も可決と成つた、金の生る樹の話をしてある跡なのだから其筈でございませう。

總會は會を閉づるに先だつて、新銀行が甚だしい短日月に此の如き好成绩を擧げたのも、又幾多有利の大事業を發見して前途頗る多望の行運とならしめたのも、偏にこれ重役諸氏の盡瘁と又着眼の宜しきを得たのに由るから、此に總會は特に頭取取締役及支配人に對して感謝を表する旨を議決したい

といつて、満場一致で議決を致す、諸人は満足と喜悅の色を輝かして、遂に散會を致しました。

總會が濟んで二日目に、濱野と相良は此度は副頭取重野子爵をも伴つて、穴守町の船越公證役場へ行つて、資本増加の申請登記を致した、固より法律上の規定であるから、増加資本は悉く引受済となつたと申出たのでございます、ところがその實如何かといふと、増加資本は悉く引受けられては居りません、株主の内三千株ばかりの株主は新株引取の権利を放棄して、引受けるのを好みませんので、夫丈は引受未済、即ち銀行の手に残つてをるのでございます、が、然うしたまゝで登記は出来ず、其まゝで進んで行くことは法律違反となるのであるから、此度も亦筆先の手品をやつて、引受未済の新株は悉く阪谷の名義にした、どうも怪しからん譯、又しても不法行為をやつたのでございます、が、斯うやつて銀行の手許に吾銀行の株券を藏匿して置くのは相場場の職團準備の爲で、取引所で弱氣連が聯合をして賣崩しでもして來る時に、相場を支持する必要がある其時の懸引に使はうといふ其魂膽でございませぬ。

一體敏之は如此云つた不合法の細工をするのを賛成しない、第一危険千萬であるから、庄兵衛にも止めさせたいのだが、之を強て諫止する程の權威も威光も無い、殊に金錢に關したことであるので、此度も全く庄兵衛の爲るがまゝに任せて了つた、濱野が無理に庄兵衛に勧められて引受けさせられた最初の五百株と、増加に由つて割當てられた五百株、合計千株の拂込方に就いても、濱野兄妹は大

に心配いたしたので、此一千株の拂込は四分の一拂込としても合計十二萬五千圓となり、外に後の五百株に對しては二十圓宛のプレミアムが付いてゐるから、二五の一萬圓を加へて都合十三萬五千圓の金が要る譯、此事に關しても兄妹は心配して、庄兵衛に種々と相談したのでございませぬ、然るに此に、兄妹に取つて降つて湧いた幸運の事がある、といふのは外でもない、兄妹に取つて伯母に當る人であるが、小金を溜てゐたのが今度急に窒扶斯で亡なつた、此伯母に續つた一人の息子があつたが、其息子が窒扶斯に罹つて死んで了つて、それが伯母に感染した次第で、要之十日の内に二人とも死んで了つた、で遺産の三十萬圓が自然と最近親の濱野兄妹へ來た譯で、誠に思ひ懸けない幸運の事でございます、そこで、何處までも正直眞面目な敏之兄妹は、此遺産の金では非引受けした株に對して拂込をするといふと、庄兵衛自身は如何いふ工面で拂込をするかは説明もせぬで、到頭かつ子兄妹には正直に拂込をさせて了つた。

かつ子は笑ひながら、

『本當に思ひ懸けない大きな遺産、之れも貴方の御蔭かもしれないませぬ。敏之は三萬圓といふ年俸を頂くし、旅費は旅費で大變に頂くし、此上最早要りもしないのに、御金が降つてきてゐるやうです、やつとこさで金満家になりました。』

かつ子の容子を見るといふと、眞實嬉しさうな有難さうな風をして、庄兵衛を凝視つてゐる、彼様な

「恰憫な、あんな頭腦明晰な婦人であつたのが、此頃は悉皆庄兵衛を信用して、魅せられて了つて、段々親しくなるにつれて、物の黒白が判らなくなり、庄兵衛の前には日一日と其明識を失ふやうになつて了つた、それでも依然性質は淡白で快活なところがあるから、言ふことは虚心平氣、
 「ですけど、これが貰つたから宜いやうなもの、正直をいふと、若し此御金が私の力で儲けた御金なら、私は貴方のなさる事業に使ふことはしませんねえ、貴方の手には御渡し、ませぬねえ、危険でござんすから：：、ところが今迄全然識らないと云つても宜いくらの伯母さん、其伯母さんから思ひもつかず渡つて来た、天から降つたか地から湧いたか知らない御金だとして見ると、何だか盗んで来たやうな、不正直を行つて手に入つたやうな心持がして、私や些と間が悪いのでござんす、泡銭は身につかないやうな気がしますから、損をしたつて構やアしませんアハ、ハ、ハ、ハ、」
 庄兵衛も矢張戯談に取交せて、
 「其御言葉は恐れ入つたね、併し其金は増す一方、今に容易に何百萬といふ高になりますぜ、エ？盗んで出来たと思ふほど金が出来来る、夫より旨い話はありませんわ：：、最早五六日も経つて御覧なさい、株はドン／＼騰るから。」

十七

敏之は總會を濟したから、再び東歐へ引戻さなければならぬのだが、いろ／＼と用が出て来て出立を延ばしてゐると、成程萬國銀行の株は急速の勢ひで騰つてゆくので驚いた、五月の納會には相場が七百圓ドタを抜いてゐる、一體資本の増加といふことがあると、其銀行會社の株の相場は通例騰るのに極つてゐるが、此萬國銀行のは實際之から經營する事業が有望であるといふのが原因で、非常な景氣を有つてゐる、カルメルの銀鑛開掘が近々着手されるといふ廣告は大な黄色い廣告札になつて、巴里市中到るところに貼出されてゐる、誰も彼も此に目を時てぬものはない、といつたやうな有様で、今取引所の人氣は、一に萬國銀行株に向いて来て、其景氣は素晴しく、それにつれて總ての株が引立つて、騰る底が判らないといつたやうになつてきました。
 遂に敏之は又もや東歐へ出立を致したが、跡はかつ子と庄兵衛の二人差向ひ、極々親しい狭い間柄の生活をやるやうになつて、鳥渡見ては夫婦としか思はれぬくらゐの有様、今では金も大分出來たのであるが、それでもかつ子は依然家の經濟を取まかなつて、成たけ金の要らぬやう家の爲になるやうにと、心懸けてをりまする、誠に家内安全無事、他に心配なことは無いが、只一つ始終心に懸るの他でもない、例の幸吉のことである、かつ子は此事を何時迄も庄兵衛に隠しておくことが良心に咎めてならぬので、告はうか如何しやうかと、口迄出かゝつたことは幾度か、第一幸吉の養育院に於ける評判が悉く宜しくない、所謂箸にも棒にもかゝらぬ手甲摺者、院でも持餘してをるのであるから、

かつ子は餘計心配だ、それに約束の六ヶ月も経つて了ひかゝつてゐるから、後金の四千圓も拂はなければならぬのだ、幸吉も六ヶ月間も入院の経験をさせたのだから些とは改良の實を擧げたらう、此邊で一遍庄兵衛へ紹介させて、親子の名乗をさせたものか、成らうことなら悉皆人間を改良して餘り恥しくない姿にして、それから父に見せたいが、如何したものであらうかなど、時々種々に考へ出して、迷つて了ふことがございます。

かつ子はいろ／＼途方にくれたが、仕方がない、此事を庄兵衛へ斷然發言さうかと考へた、今日も養育院へ行つてみると、幸吉の亂暴は益々非道い、友達の間へ喰ひついて大怪我をさせたなどいふことを聞く、何も實に困つたもんだ、兎も角も思切つて一度庄兵衛へ話をしてみやうと、こゝに愈々決心して、さて家へ歸つて來ると、庄兵衛は恰度大工を呼んで何か相談をしてゐるところ、其話は、銀行の建物や設備が小さ過ぎて何うしても氣に入らぬから、幸ひ隣家の二階が明いてるのを借込んで、店を擴げたいと斯ういふので、重役の承諾を得て營業場を取廣げ、仕切りを取拂ひ、應接室を殖すなど、大工を呼んで話をしてゐるところなのでございます。

遂にかつ子は思ひ切つて、庄兵衛に言出した、
 『相良さん、私少し貴郎に御話があるのでござんすが、二階の室へいらつして下さいませんか？』
 二階の室へ連れてはいつたが、庄兵衛が店を擴げることが出来ることになつたので喜ばしさうに浮立

つてゐるのを見ると、かつ子は可厭な情ない話を仕出すのが如何にも辛い、思懸けない一件を話して驚かす勇氣が出ない、口まで出かゝつたのを纒と押留めて、然うだ此話は猶少し待たう、猶少し彼の子の行狀が修まつた時を待つて發言さう、切角事業に勇氣を持つて、進んで行つてゐるのを躓かせるやうなものだと、遂に話を止めにして、他の事に紛らして、
 『御話ッていふのは相良さん何でもないでござんす、店を擴げることは私も貴郎に御同感、御話といふのはそれだけです。』

一 か 撥

庄兵衛は矢野の話込に從つて、舊と加特力派の機關新聞で昨今維持が困難になつてゐた「希望」新聞を、萬國銀行經營の道具に使はうと思つて、到頭買収したが、其新聞社は三條町に在つて、建物は随分古く、内部は薄暗いジメジメしたものでございます、入口に受付があつて、それから廊下になつてゐるが、其處には年が年中瓦斯が點しきりでございます、廊下を入つた左側の第一室が主幹兼主筆矢野龍吉の室になつてゐて、其次の室は相良の取つてある、其向側に有るのが合同編輯局で、其次が支

配人室、外に二つ三つあるのを事務用に使つてをります、廊下の突當りから右へ曲ると、重役室と會計室があつて、室内に有る戸を開けると、編輯室へ通するやうになつてをります。

曾根悦良は希望新聞が相良の手に移つたと同時に、相良の厚意で記者の一人になつたが、今日も人の居ない静な中に書かうと、疾くから出社して、合同編輯室で或雜報を書いてをりましたが、四時が鳴つたので廊下へ来て、主幹矢野の處へ行かうと思つて出懸ると、廊下に米本が居るのを發見けた。

此米本も豫て庄兵衛に頼んで置いた通り新聞社の小使にして貰つてゐるのでございます、未だ戸外では六月の太陽が輝々してゐるといふのに、此處は瓦斯を點して仕事をいたす、其大きな火光で、米本は配達して来たばかりの取引所氣配状を、未だ誰も見ぬ先にと、蚤取眼で見をります。

曾根は聲を懸て、

「オー米本、矢野さんが見えたやうだねエ？」

「ハイ御來社になりました。」

来たかといふ事を聞いたくらゐだから、来たといはれたら喜びさうなものなのに、何うしたことか曾根は何か躊躇の容子、不安の面容をしてをります、其理由は外でもない、彼は此頃女房の貰ひたてで、幸福である一方に種々に種々と失費が重なる其最中へ、古い借金が出て来て、債権者が喧しく、それで困つてをる次第で、今度新聞社へ入れて糊口の途が出来たやうなもの、新聞社へ入つたといふことが

聞えた爲か、債権者の攻方が一層激しく、今日も或一口の債権を濟まさなければ新聞社の月給が差押になるのみか、無けなしの家具財産が競賣に付せられるといふ場合に臨んでるのでございます、これまで二度程矢野に俸給の前貸を頼んでみたが、二度とも斷られて了つたので、今日も到底、難かしいと思ふが、さりとて外に方法も無いから、又發言して頼んでみやうと、それでとつおいつ考へてるので……。」

曾根は矢野の室の戸の前へいつて開けにかゝつたが、米本は側から注意して、

「アツ矢野さんは今御客様が来ておいでです。」

「誰が来てをるの？」

「今朝は相良さんと一緒に御來社になりましたが、只今御話中、で由利さんが來たら直に通してくれと、相良さんが私に御命令でございました。」

曾根は一時も疾く矢野に逢はなければならぬのだが、逢ふのが如何にも辛い氣がする、辛いから此相良が來てゐて直と逢へぬといふのが何だか此方の勝手のやうな氣がして、ホットト息、

「宜しい、そんなら書きかけた原稿を書いて了はう、矢野さんが一人になつたら一寸知らしてくれ給へ。」

言置いて行かうとする曾根を、米本はいかにも嬉しさうな顔色で押留めて、

「曾根さん、貴君萬國銀行株は到頭七百五十圓とまで漕付けましたな。」

が曾根はどうでも可いとはかり、サツ／＼と編輯室へ入つて了つた。

さて相良庄兵衛は、斯ういふ風に毎日取引所の歸途には必ず新聞社へ立寄つて、時としては別の時間にも約束をして置いて、來ては自分のと定つた室へ入り込んで、秘密の事や特別の用向やを處理してをります、矢野は表面の名前こそ主幹となつて居るが、實際は庄兵衛の手代も同様、總て秘密のことだの其他庄兵衛の如彼したい如此したいといふことを、陰になり陽になり仕てやつてるのでございませす、尤も、彼れの大學仕込の都雅流麗な筆致で書く政治社説や時評などは中々巧く、反對派の新聞記者さへ其點は正に認めてをるのでございませす、矢野は萬國銀行廣告吹聴の爲め随分種々の仕事をしましたが、就中著しいのは佛蘭西全國中の小さな金融經濟専門の新聞雜誌凡そ一打を買収したことだて、殆んど無代も同様の價で地方へ發送致します、それから又買収はしないまでも、巧く取込んで味方にした政治經濟方面の新聞雜誌も少くない、中には随分有力なものもございませす、此等へは直接矢野から懸合つて請負はせて、好按排に作らへた雜報の原稿を送つて、一行幾干で載せさせ、一方銀行が資本を増加した時の新株若干を贈つて機嫌を取つてをります、以上は外部に於ける懸引で、自分の「希望」紙上には毎日巧妙な筆法を用ひて、叮嚀反覆萬國銀行の便利功德を説立て、段々に公衆を

吾物に引付けて了はうといふ、中々巧なものでございませす。

二

今日庄兵衛がやつて參つたのは矢張種々是等の事に就いて矢野と相談を致す爲で、兩人一間に閉籠つて密々と協議をやつてをります、今日殊に問題になつたのは外でもない、今朝の「希望」に昨日議會で大木がした演説を由利が非常に褒めちぎつて書いた其が掲載されてあるので、是を見た庄兵衛は大變な立腹、早速由利を社へ呼付けて説明を聞かうと、今待つてゐるところなのでございませす、「希望」は大木の御用を勤める爲の新聞ではない、大木の利益を圖らうとて月給を出しはせぬ、それを餘計な讃辭を呈して御機嫌を伺つて、我社の綱領を没却して了ふ、以ての外だと、庄兵衛さん／＼の不機嫌。矢野は聞いて只黙つて、指の爪先を見詰めて苦笑のまゝ、飛んだ飛沫が來なければいゝと心配してをりました、何しろ肝腎の由利が居る譯でなく、徒に激して無暗に怒つてばかり居ても仕様がなから、それよりも猶且大切な用談があるそれを相談したらばと、種々に庄兵衛を宥めて、遂に新聞紙に關する相談に入りました、矢野が豫てから銀行の廣告法に就いて頭腦を練つてゐる其第一考案は外でもない、鳥渡とした一冊の、紙數二十頁ばかりの冊子を作らへて、萬國銀行が創始經營しやうといふ事業の利益や計算を説明する、尤も其も只眞四角に説いては面白くないから、筋道や文體を最も通俗

の筆法で小説的に作らへて、而して之を國中津々浦々へ撒ける丈け撒く、勿論無代價で、要之引札だ、此が第一案、夫から第二の考案は、一係を設けて取引所から出る公報を猶且叮嚀深切明細なものに編纂し、而して夫を無代價で重なる地方の新聞社へ贈呈する、とかういふ案でございます、此な事について彼是れ相談を致して、遂に萬國銀行の次の三ヶ月間の廣告費豫算割當に及び、重要な新聞社へ支拂ふべき補助金、競争銀行の機關となつて新聞へ沈黙を守らせる爲に食はせる鼻薬料、其他或最有力新聞の第四面を此方の藥籠中のものにする爲に拂ふ保護金など、一々相談を遂げました、其金額は誠に少なからぬ高でございますが、其高の多い丈け其丈け、一方正直な公衆を馬鹿にした理由で、誠に以て怪しからぬ次第、無数の公衆はそれに釣られ騙され乗せられて、無けなしの資金も皆はたかれて了ふ、正直な田舎漢が屢々共謀の詐僞賭博に引懸けられる、それを相良の連中は白晝大仕掛で致すので、此んな新聞紙は世間に少くないやうでございますが、誠に一大罪惡でございます。

こなたは曾根、あともう五十行書けば自分の受持の二欄が終了になるので、一生懸命になつて従事つてゐると、米本が来たので呼留めて聞く、

『矢野さんは未だ一人にならんかい？』

『否未だでございます…、ですが貴方、奥様が入来しつて御目にかゝりたいと仰有つてござんすよ。』

女房が来たと聞いて、曾根はドキンと胸にこたへて、座を蹴つて起上つた、それは何事であるかといふと、曾根は此數ヶ月、おせん婆に跡を跟けられて居つたが、到頭此頃「希望」新聞社に出てゐるといふことを嗅ぎ付けられて—尤も姓名を現はして紙上へ書いたからではあるが—夫が爲に皆崎間齋から例の曾根が洋服屋へ渡した一枚金五十圓の約束證書六枚の請求を持出されて、大に弱つてゐるのでございます、元金額三百圓丈なら曾根も譯なく拂つたのでございませうが、此元金の上へ持つていつて非常に馬鹿々々しい費用をかけられて、合計が積つて七百三十圓十五錢といふ大きな高になつてゐるので、それが癪に觸つて拂はない、拂へないばかりではない拂はないのでございます、が怒つてみても仕方がないから、其後種々談判して、毎月百圓づゝ濟崩して拂ふこととして示談を調へたが、女房を迎へて新世帯を持つた當座であるから、費用が多端で、中々思ふやうに百圓の入金が仕きれない、のみならず、毎月々々生計にも不自由を感ずるといふ、遺算段も昨今は随分苦しい端目に陥つてゐるのでございます。

曾根は應接室へ来て待兼ねてゐる女房へ言を懸ける、

『何が始まつたんだえ？』

女房返事を仕やうと、言を口迄出すと、其途端に主幹室の戸が内部から驟飛ばすやうに開かれて、現はれたのが相良庄兵衛、米本を大聲で呼んで、

「オイ米本、如何したツ？ 未だ由利さんはやつて来ぬか？」

怒鳴られて米本はオドドッ、口の中を吐くばかり、

「ハ、ハイ、未だ御見えになりませぬ、どうも私の力で猶且疾く御いになるやうにいたしたいので

ございますが、然うも参りませぬでハイ……。」

庄兵衛は舌打して、暴々しく戸を締めて了つた、此に於て曾根は女房を、平日餘り使はぬ側の小室

へ引張つていつて一人が使はない室だから落着いて話が出来やうと思つて、

「何が始まつたんだ？」

と訊いてみる。

曾根の妻のまる子といふのは、體軀の小肥りに肥つた、愛嬌のある、眼のバツチリした、健全さうな口元をした、心配事がある時でも厭な顔一つしたとのない婦人、通例元氣で快活であるのだが、それが今日は全ツきり勇氣がなく刺々してをります。

三

「貴郎飛んでもない事が始つたんでござんす、今宅へそれは怖らしい可厭な外貌の男の、何だか臭い匂の、酔つたくれか何かのやうなのがやつて来て、今日となつては最早仕方が無い貴女の宅の家

財は彌々明日公賣に附するからと、斯ういふのぢやアありませんか、而して貴郎、一枚の貼札らし

いものを靴の中から出して、是非共其れを門口へ貼出すと、かう申すぢやアござんせんか……。」

「そりや酷い、そんな事が出来る理由はない、己は前以て通告を受けぬで其様な手續をされる覺はな

い、突如其様な事は出来ぬ筈だ、それ〴〵話といふものがあるツ。」

「だつて貴郎、何時も文書が来ても貴郎はそれを碌に御覽なすつたことはないぢやござんせんか、

兎に角、差當つて宅の入口へそんな外聞の悪い貼札なんぞをされては、大變でござんすから、二圓包

んで與つて、貼札だけは止めて貰つて、還して、急いで駈つけて来たのでござんす、貴郎如何したら宜

ござんせう？」

兩人何の思案もない、溜息吐息、顔を見合はせるばかりでござんす、嗟、栗島町の小さな世帯の、

無けなしの家財も皆な奪られて了ふか、一度に拂へないので毎月幾許かづゝ拂つて、やつとの思ひで

買入れた彼の茶箆筒も、火鉢も、内心人に自慢にしてゐた不似合に立派な道具も、新婚の夜から手が

けてゐた嬉しい世帯の小道具も、悉皆鬼の手に引括られて持つて行かれて了ふのか、好いた同士なら

貧乏も何のその、日當りの好い、平和な小じんまりした二間住居に、嬉しく其日を送つてゐた其家庭

が、明日にも鬼共に蹂躪されて了ふかと思ふと、涙さへ禁め兼ねない、悦良は、

「實は僕は主幹に少し金融を頼まうと、言出してみる積りでゐたのだ、マア頼めるだけ頼んでみるが、

何も難かしいかと思ふ。」

此時まで少し思案して躊躇つてゐたまる子、思切つて言出した、

『私は少し思付いたことがござんす、勿論貴郎が御嫌だと仰有れば止めます、それで實は今其事を御相談しやうと思つて此社へ来たのでござんす、他でもございませぬ、此事に就いて一つ両親に相談してみやうかと思ひますので。』

悦良は手を振つて留めながら、

『何してどうして、そんな事は不可ん、其ばかりは可厭だ、お前の家の人に一文たりとも世話になるのは僕は可厭だ々々。』

何故悦良が爾う主張するかといふと、悦良の父が、相場が原因で家産を潰して、其爲に自殺をして死んで了つてからといふもの、まる子の實家毛利の人々は萬事悦良に對して冷淡な態度を取つてゐたので、悦良は其を胸に思つてゐる、夫から、實は娘を呉れることも、毛利のものは好まないでゐた爲に、永らく延引になつてゐたのであるが、肝心の娘其ものが是非悦良のところへ嫁きたいといふので、仕方無く嫁入らせる事にはしたものの、其様な理由であるからしてまる子の身には一文の金も付けて寄越さず、勿論一人娘のことだから、いづれ將來は遺産を譲ることにもならうが、それ迄は新聞社から得る金で世帯が張れるならと斯ういふ條件で寄越した次第、それから平生口癖に、折角資金をか

けた娘を溝へ棄てたやうなものだなど言つてゐる位であるから、悦良も大に意氣張があり、まる子も幾分か瘠我慢がございます、只マア一週間に一度日曜日に晩飯を馳走になりゆく位が關の山、其外には成丈世話にならぬやうにしてゐるのでございます。

まる子は續けて、

『一體私達は餘り遠慮し過ぎますわ、何しろ私は毛利の一人ツ子でござんせう、親達が亡なれば毛利家の財産は籠の下の灰まで悉皆私が貰ふのぢやアございませぬか、阿父さんが屢く人に言ふのを聞いてをりましたが、村川に在る晒布の製造場から擧がる高丈でも一年一萬五千圓からあると云つてゐるですもの、それから今住んでる家だつても地面だつても然うです、其様な生計をしてゐる癖に、私達が此様に困つてゐるのを他人のやうに構はず打棄つておくといふのは、本當に餘りぢやアありませんか、だけど阿父さんだつて阿母さんだつて、何も心に惡氣のある人ぢやアないんですから、一つ行つて熱く判るやうに話をしてみませうよ。』

まる子は花嫁の若い身そらであるのに、量筒が確固してゐるから別に含羞んだりなどせず、顔に微笑をさへ浮べて、いとも殊勝に決心した容子で、何處までも良人を助けたいといふ一念を顯してをります、良人悦良は随分一生懸命になつて勉強してゐるのだが、未だ文壇に成功を得ず、碌に名前も顯れない、始終クヨクヨしてゐるのを、殊勝な彼女は傍から慰めては、元氣を付けて、力にならうとし

一か 撥
てをるので實に感心な心懸でございます、まる子はいかにも愛情に充ちた面貌をして、良人の手を執りながら。

『ねエ貴郎宜ござんせう、貴郎を一人で心配させて置くことは私には出来ません、何とかして私も貴郎の手助になりたいんです。』

優しい女房の切なる言葉に、悦良遂に涙ぐんで、まる子の言ふことに従つた、そこでまる子は直に里の両親の許へ駈つけて金を出して貰つて、若し出来るなら夕方にも金を皆崎へ持つていつて落着をつけたいと、斯う相談を致して、偕てそれでは行つておいでと送り出しかつたが、悦良は何だか女房を危険な淵へやるやうな氣がして、躊躇てをりますと、此時到頭由利がやつて来て、廊下を入つて参つたので、由利が主幹室へ入つて了ふまで兩人は元の室へ一寸隠れる、でそれを待つてまる子は到頭社を出て参りました。

悦良が編輯室へ立戻つて書きかけた雑報を書いて了はうとすると、此時矢野の室から大層喧ましいい争論の聲が聞えた。

四

庄兵衛は此頃又もや舊の景氣に立返つて、豪いものになつたから、誰にも諾々して貰ひたい、服従

して貰ひたい、人に儲けさせやうと損をさせやうと、自分の方寸にあるといふ考案があるから、何うしても慢する氣がある、由利の入つて来たのを見るや否や大喝一聲、



「纒と来たのか、何んて遅いんだ一體、ハ、ア君の大事の文章を額に仕立て、大木大臣朝臣へ奉獻しやうと、議會へ寄つて来たのだから、それ程大事な文章でもあるまいぢやないか？ べらぼうな！ 最早我輩は御免を蒙りたい、大木への追従もに立つ事を行つて貰ひたい。」

奥底なく詰問されて、由利聊か極り悪げな體、仕方が無いから矢野の方へ眼を向けたが、滅多に加勢に出て飛んだ飛沫を食つても馬鹿々々しいと思つた矢野、指の先で其美髯を捻くりながら、當途もないところへ眼を使つてゐる、何とか矢野が口を出してくれるかと思つてゐたのが當が外れたので、由利も其まゝ黙つて居られない、

「他の事？ 彼の事とは？ 我輩は君が我輩に仕て欲しいと註文したことを大に忠實に行つてる積りだがね、君が加特力教及王統機關として從來絶對的に大木反對であつた「希望」を買収した時には、君は我輩に、之からは極力大木頌議の文字を掲げて相良の意は決して大木攻撃にないといふことを示してくれと頼んだぢやなかつたか、大に大木援護に務めて「希望」の主義綱領が新しいものに變つたことを大木君に示したいと願つたぢやなかつたか？」

庄兵衛は益々激した口調で打消して、

「イヤ即ち其主義綱領を君は阻害してゐると我輩は云ふのぢや、我輩の新聞は何も大木の提灯持にならうといふのぢやない、國家の爲にこそ盡せ、野心ある内閣大臣達の爲に盡すなど、は以ての外だ……。」

と之から庄兵衛大不興になつて、現下政治、内治外交上の形勢を罵り、内閣大臣が私慾の爲に位置を保つてゐることを説き、大木が自分に不深切なのを攻撃し、珍らしくも大變眞面目に、口角泡を飛ばして怒鳴り散らした、八ッ當りをくつた由利こそ大迷惑、庄兵衛は遂に我を忘れて突立ちあがつて、

「戯談ぢやない、大木は少くとも我輩の同胞ぢや、してみれば我輩等の肩を持つてくれべきのぢや、我輩は此度「希望」新聞を買つた、從來専心大木攻撃に努めてをつた新聞を買収して、それからといふもの彼の都合の宜い文字を以て大に彼を迎へて、彼の便利の爲に務めてをる、君にも彼を謳歌することを許してをる、然るに如何ぢや、彼は今日迄何を我輩に向つて仕てくれたか、何一つ我輩の利益になることをしてくれな事は無いではないか、實に無禮千萬ぢや！」

由利はオツト辯護して、東歐に於て演野は相當に大木の爲に便利を與へられてゐる、大木氏は演野の爲に地方の有力な人士に壓力を加へ、萬事演野の爲に門戸開放をやつて相當の力になつてると言繕つた、が庄兵衛は依然大不機嫌、

「其位のことでは當然だわ、彼の位地に居れば株の相場に變動を起す事情なんぞ宜く解つて居らんけりやならん、宜く解つてをれば前以て我輩に洩してくれる位は仕てくれても宜のぢや、それが如何ぢや、未だ嘗て其様な好意を我輩に示してくれたことはないでないか、今日迄君に彼奴の所へ行つて貰つて、それとなく何か聞出さうとしたことは何遍あつたか知らぬが、未だ一度として何一つ聞出して來た事は無いではないか、君だつて殆んど毎日逢つてる人間ぢや、それが何一つ聞出せぬとは餘り人を愚にした仕打ちや……。」

「イヤ相良君、然う云はれると我輩は困る、大木君は其處へ行くと公明正大だからな、ベテンの秘密は嫌だと云つとるツ。」

「ハ、ア大層立派な口を利くな、其立派な口を郡代に對しても利いてるかい？ 大木は我輩には馬鹿正直を守つて、郡代には有らゆる便宜を與へてをる。」

「そりや郡代は仕方がない、郡代には必要がある、當局者は郡代の機嫌を取つて置かんければならん、然うでないといザ國債を起すなんどいふときに困る。」

「だから云ふのぢやよ、その穢い猶太人は倒さんけりやならぬと……、國家は猶太人種に賣られて了つとるぢやないか、買はれて了つとるぢやないか、國籍さへ判明せぬ獨逸人だか佛蘭西人だか判らぬ人間に、國權を自由自在にされてをる、實に耻辱此上も無い譯だ、獨佛間に戦争でも始まつたら如何ぢやらう？ それを第一に念頭に入れて考へんければならんわ、宜しい、今後大木が我輩等の役に立つてくれんければ、我輩も亦彼の役に立たぬ、宜しい、其積りでをつて貰はう、君も然う思ふが宜いわ。」

判りきつた話だと思つて矢野は黙つて指の先で八字髻を捻くつてゐたが、由利は大木と相良の兄弟を兩方とも旨く綾なしておかなければならないから、仲へ入つて實は大弱り、仕方が無いから好い加減に、

「イヤ悉皆道理、併しマア、氣短にせず猶少し待つてくれ給へ、何か事件が無けりや我輩も手腕を顯す機會が無いといふものだからな、其内に悉皆大木君の信用を擲にして、自然何事も打明かされるやうにして、而して何か聞出したら一分間も待たず君の所へ駆つけて君の耳に入れるといふことにしやう、其積りで居てくれ給へ。」

庄兵衛は言ふ丈け云つて了つたのだからそこは流石、機嫌も再び元へ戻つて、笑ひ顔、
「イヤ我輩が兎や角う云ふのも、皆君達の爲に外ならぬのさ、我輩も随分これで苦勞をし、馬鹿々々しい損もして來たのだからなア。」

五

矢野と相良の話は元の新聞の事に立戻つて、

「矢野君、今のはなしの取引所の冊子を一つ巧く作らへることを考へてくれ給へ、君は洒落が巧いから其を籠めて書くのも面白い、不真面目な世間には餘り真面目は歓迎されぬ、可かね。」

矢野は真面目の文學者を以て任じてゐるのだから、庄兵衛の云ふことには反對だが、何も仕方が無い然うしやうと約束して、此から三人可笑しい世間話に移つて、段々機嫌になつて、例時のやうに打解けて了りました。

此方に曾根悦良は今日の書くものを書終はつたが、疾く女房が吉報を齎して歸つてくれれば宜いと、内心待兼ねてをりますと、そこへ他の編輯員が一人来る、二人くる、いろ／＼と世間話をする、其間にも悦良は最早妻が来さうなもの、兎に角先刻の小さな應接室へ行つて待つてゐようと、其室へ行つて戸を開けると、これはしたり室内には、米本が隣の主幹室の戸へ耳をつけて、一生懸命矢野と相良の話を立て聞をしてゐると、娘のおなみは人が来はせぬかと傍に見張りをいたしてゐるところでムいいます。

飛んでもないところを發見したので、悦良は可厭な氣がしたが、今更引込む譯にもいかないから、黙つたまゝでゐると、米本は間が悪いから他人のことにして誤魔化さうと、オド／＼と、

『お入んなさることは出来ません、未だ依然相良さんが御在でござんす……、私は今此室で御呼びになつたやうに思ひましたから參つたのでございますが……。』

立聞きしてゐるのを看られた米本は、巧く此場を誤魔化さうとしたが、胸の一物は悉く判つてをります、其理由は、米本は過般女房が溜めて遣していつた虎の子の四千圓の金をさらけ出して、萬國銀行の株八株を買入れたが、株が段々騰つてゆくのもう／＼嬉しくつて溜らない、何かして此上大騰りに騰つて、一と身代拵らへたいと、夢中になつて其事ばかりを考へてをりますから、庄兵衛の前になり後になり、其一擧手一投足に注意をいたし、庄兵衛を神のやうに敬ひ尊んで、何か嬉しい事を聞

出さうとワク／＼いたしてをりますので……、尤も彼が斯う夢中になるのも、自分の爲に金を儲けたといふのでない、唯只娘の事を考へてからの事で、八株を六百五十圓の相場で勘定すると此代金五千二百圓で、買つた價段四千圓を差引くと、最早既に千二百圓の利得になつてゐるから、これが一株に付猶且百圓も騰がらうものなら、株は六千圓になつて即ち娘の戀婿が無ければならぬと云つてゐる持參金額が出来て、娘も喜ぶといふもの、旨い有難いと、米本は獨りでホク／＼、斯う考へて、彼は嬉し涙に眼を濡しながら、里子にやつてあつたのを手許へ引取つて、慈母のやうになつて育てて小さな世帯に父一人子一人の水入らず、おなみの顔を見ては喜んで其日を送つてゐるのでございます。

ドギマギしてゐる米本は出放題の言葉を發して、猶も飛んだところを見られたのを繕はうと、

『曾根さん、今娘が、別に用も無いが通りかゝつたからといつて私んところへ參つたのでござんすが、途中で貴君とこの奥様に御逢ひ申したといふことで。』

おなみも亦口を出して、

『今アノ笛田町の方へ曲つておいでのところを御見受け申しましたが、大層御急ぎと見えて駈けて御いでいございました。』

悦良は父子の言葉に驚いたが、容子が判らない、

『エ？ 笛田町で御逢ひだつて？』

云ひながら猶且聞たゞさうとしてゐると、此時イキセキ駈込んで来たのは女房まる子其人、そこで取敢ず隣室へ連れていつて話を聞かうと、戸を明けると、其室には司法部受持の一記者が居合はせたので、仕方なく廊下の突當りに近い方の右側に在る床几へ腰を懸けて、さて小聲で話を始めた、

「如何だつたえ？」

「如何だつて辨じて来ました、だけど中々骨が折れたのよ。」

偉いと思つて悦良は大に女房の技倆に感心した、之からまる子は小聲の早言で一伍一什の話をしたか、何にも隠さぬ有の儘。

六

一體まる子の里方毛利の人達の此頃中からの娘に對する態度は大分に異つて、先時よりも親愛の念が薄くなつて来た、それは如何したのかといふと、毛利の父も母も、或る情熱——相場といふ情熱に犯されて、其方に氣を奪られて、義理や親愛の方には情が疎かになつてきた、其話は世間に有ふれた話だが、斯ういふのだ、元來毛利の父といふのは、體軀の頑丈な頭髪の禿げた、頬鬚の白い人、母といふのは、瘠せてはゐるが中々活氣のある人で、資産は夫婦共同になつてゐるが、何しろ遊んで居ても一年一萬五千圓からの収入があるのだから、生計向が寧ろ樂過ぎて、爲ることが無く夫婦とも反つて困

つてるといふ仕合せ、斯く元來が無事にやつて来た人達であるからして、爲る仕事としては只だ金を受取るといふことより外には無い、相場など、来たたら頭から貶しつけて、愚と云はうか盗坊と云はうか不潔極まると云はうか、相場を行ふ奴の氣が知れぬ、寧ろ惘然至極のものだなどと、大に取引所や株や相場の事を攻撃をしてをりました。

然るに、過般纏まつた金の戻つて来たのがございましたが、其金を如何して置かうかと考へた末、此で公債を買つておくことにいたしました、金を公債にしておく、之は何も相場でない、安心な金の置場である、利殖法である、と頻りに辯明を云つてをりました。

ところが其日からといふもの、毛利先生毎朝のやうに、朝飯前新聞を手に取るが疾いか第一に取引所の相場付のところを注意して見る、それが定例のやうになつて了つた、サア悪い事に根が生える、毎日相場の上つたり下つたりするのに目がつく、見てゐると如何も面白い、頭が其方の情熱に燃されてくる、公債や株式が種々の足拍子で踊るのが如何にも面白くつて溜らない、自然と相場社會の毒を含んでゐる空氣にかぶれてくる、自分が纔か二三十萬の金を作らへるのに三十年も醜態したのが、相場では運好くば只の一日に何百萬といふ金を作らへられる、と此んな事を想像してくると、逆も大人しくしては居られない、今迄の事が馬鹿々々しくつて溜らない、食事の度毎に妻をつかまへては話す、何故相場を行つては惡からう、行きやうに由つては毫も差支は無いと、毛利先生伶俐さうに

相場の行法を講釋して聞かせる、口で説明するところは天晴計謀を帷幄の裡に運らす大將軍、相場の事には一ト廉最早何もかも心得て、百戦百捷は定と口を極めて説立てます、すると、毛利の妻傍から大心配、貴郎が譬へ一文でも金を相場の冒險事に使ふならば、自分は淵川へでも身を投げて死んで了ふといふと、流石に毛利も驚いて、否それは只理屈を話して聞かせたまで、只の説話、今相場を行ふのちやないと、安心はさせて其場は済したものの、此に偶然した機會が現れて来て夫婦を相場道へ引込んだ、其因縁は外でもない、毛利夫婦は兩人共兼々庭園の内へ四阿を一軒作りたといふ心願を抱いてゐたが、それには金が二三千圓要るので、是非其資金を作らへたいと祈つてをつた、ところが、或日のこと、毛利は嬉しさに震く手に、十圓紙幣を百枚にしたのを三束握つて女房の前へ来て、どうだ、これは今取引所で儲けて來たのだと投出す、固より相場事は良くないことだから好んで仕たのではない、儲かるのは確だつたから試つたもの、二度と再び行りはせぬ、唯只四阿を作らへたい一心に、一寸一六勝負を賭つてみたのだ、一度きりだから心配するなと、毛利辯明らしく述立てると、女房腹は立つてみたが、これと同時に吃驚した喜悅か込上げて来て、不満も云へず小言も出さず、其儘に済して了つた、次の日には毛利平氣で、直賣りに手を出してみる、女房への辯明が面白い、損を限つて見積つて置いて行るから心配はないと、行つてみると、數を平均すると利得の割になつてゐる、何だ、割合に利得がある、他人が儲けるのを黙つて見てゐるのは馬鹿の骨頂だと、理屈が段々付いて來

て、幸か不幸か到頭定期へも手を出しはじめ、初は金高を小さくやる、段々慣れつこになつて氣が太くなつて、高も増して行る、方法も暴くなる、遂に本當の相場師となつて了つた、女房は傍で溜らない、善良な一家の主婦として良人の此行跡に夜の目も寝ず、憂慮はするもの、少しでも毛利が儲けたことを見聞するときは眼を閃めかして喜ぶのか怒るのか、それで依然、其様な商賣をやる貴郎は、終局には疊の上では死なれぬと、口癖に豫言をしてをります。

かういふ風に、女房は頻りに良人が大相場を行るのを、喜ばないで居るが、獨り女房ばかりでない女房の弟の城大尉も此事に就ては義兄を非難して、彼は喧しく云つてをります、大尉は退職年金千八百圓を貰つてゐる身體だが、それ丈では逆もやりきれない、矢張取引所へ出入して相場を行つておりますが、其行法は最も眞面目な最も小さな現物の取引、一日差引いたところで二十圓も家へ持つて歸ればそれで宜いといふ誠に謹慎やかな行法だから、大な損はせず安心なものでございます、姉は娘まる子が曾根へ嫁づいてから室も明いたし第一餘り家が廣過ぎるから、自分の家へ来ては何うだと申出て呉れるのだが、親類などへ同居しては窮屈で勝手な眞似も出来ないから斷つて、野見町の閑靜な貸間を借りて、始終若い女などを引入れては楽しんでをりますので、相場で儲けた小金は此女達への半襟簪 其他飲食代に使つて了ふといふくらゐのものでございます、彼は始終毛利に、相場は決してするものでないと異見立を致しますが、すると毛利が、そんなら貴様は何うしたのかと問返すと、

城大尉は激しく手を振つて、それは事が違ふ、私は貴郎と違つて一萬五千圓の年收があるのではなし、政府が呉れる年金が目腐れ金に過ぎないで迎も暮してゆかれぬから、仕方なく相場をやる、好きこのんでやるではない、第一相場は算盤珠から勘定すると割が合はぬ、儲けても仲買手数料と取引所手数料を取られるし、損をするに上には此手数料を拂はせられる、即ち儲けても損しても大きな手数料は取られるので、取引者は仲買と取引所に奉公をしてゐるやうなもの、巴里株式取引所が此名目の下に収入れる高が一年大まい八千萬圓、是丈は客や仲買が懐から拂ふ金だと、城大尉は此金高を振舞はして、取引所の相場の間尺に合はぬことを論じます……。

七

まる子は忙しい中を斯んな話を掻撮んで良人悦良に話して聞かせて、

「で、今日は私は生憎なところへ打突つたんです、阿父さんが取引所で何か損をしたので、其事で阿母さんと争議つて居るところぢやありませんか、してみると阿父さんは此頃は始終相場を行つてると見えるんです、先時は彼様に人間といふものは地道に働いていかなくツちや不可ないなんぞと、屢々私達に云つて聞かしておいでのが何うでせう、昨今はまるで相場狂、考へると本當に可笑しいぢやございせんか、で兩人喧嘩をして、阿母さんは阿母さんで、新聞——「金融時報」を振舞はして、そん

な事は些とも聞かない、私は初から價段は下がると思つてゐたと、頻りに怒つてお在だと、阿父さんは阿父さんで、憤然になつて、次の間へ駆けてつて他の新聞——左様でした「希望」新聞を持つて来て、「希望」にはこれ此通り斯う掲てゐると、各自に自分の新聞を楯に取つて議論をしておいでのです、此節里で取つてゐる新聞でつたらそりや貴郎大變よ、本當に家中新聞だらけで、阿父さんも阿母さんも朝ツから新聞と首ツ引になつてお在のです、それから私の考へますのに、阿母さんは相場ツていふと彼様に憤然に怒つておいでですが、其實矢張内々相場をおやりのぢやないかと思ひますの。」

まる子の話巧手に、情ない場合にも拘はらず悦良は笑出さずには居られない、まる子は猶も、
 「そこで私は思切つて私達の困つてゐる話をして、執達吏の手續を中止させるにはお金が必要から、二百圓丈は是非貸して下さいと頼んだのです、すると両親は貴郎大聲で怒つて、何だ、人を馬鹿にするな、今相場で二千圓の大損をしたといふ場合なのに、如何して二百圓の金が貸せると思ふ、人を馬鹿にするにも程がある、人の難儀を察せぬのかなんて、貴郎大變に怒るぢやござんせんか、其劍幕ツたら本當に私は見たことがございませぬ、いつも彼様に私を可愛がつて、あんなに優しくして下さつて私の云ふことといふと何でも聴いて下さつたそれが、今日の仕向ツたら本當に無いんです、氣でも狂つたのぢやないかと思つたんです、汗水垂らして作らへたお金で、如彼やつて安樂に穩に何事もなく暮していけるのに、何も慾の爲に喧嘩をしたり面白くない眞似をして、世の中を送らなくツても宜い

ちやござんせんか、本當に解らない人達でござんすの。』

『おまへ夫きり無理に頼みはしなかつたらうね?』

『否、私は何處迄も主張しました、何處までも頼みますと、今度は兩親は話を貴郎の事に持つて來たんです……、私は何も隠しはしません正直有の儘を申します可ござんすか……、兩親は貴郎の事を兎や角申すのです、此事は貴郎に云ふまいと思つて居たんですが、矢張り出た……、貴郎の身の上の事を兎や角云つて、新聞記者だの文士だの筆の職業は碌な職業でない、困るのは初めつから判つてる、とんだ家へ娘をやつたなんて、さんく悪口を云ふぢやござんせんか、餘り酷いことを云ひますから、今度は私の方が腹を立つて其ま歸らうと致しますと、丁度城の叔父さんが御入來のです、貴郎も知つてお在の通り叔父さんは大變に私を可愛がつてくれたのです、叔父さんが入來したので、叔父さんの前では真逆打ちやらかしておくことも出來ず、其内に阿母さんが私に鳥渡と云ひますから、何かと思つて行きますと、別の室へ連れていつて、五十圓文け私の手に握らせて、是丈けあつたら幾日か猶豫して貰ふことが出來やうから、其間に工風をお仕と斯う阿母さんがいふんです。』

『五十圓! 纒たツ? それツばかり仕様が無いぢやアないか、そしておまへはそれで承知をしたのかい?』

悦良は不満の體で少し敦圍いたが、まる子は冷靜な道理の頭腦に落着いて、優しく良人の手を捉へて、

『マア、後を熱く聞いてください、私は承知して其の五十圓を受取りました、受取りは仕しましたが五十圓の端金では貴郎は屹度執達吏へ御持果せはなさるまいと思ひましたから、私は其五十圓を有難く貰つて、それから里の家を出て、直ぐと其歩で執達吏の楓町の役場へ其を持つて行きました、ところが貴郎、役場では何うしても其金を受取つてくれません、此場では此金は受取れない、受取つても公賣執行を延ばす譯にはいかない、萬事債權者皆崎の請求に由つてしてゐる事だから、皆崎から話が無ければ何とも出來ないと、何と云つても聞入れないぢやござんせんか、憎らしいツたらありやしません、あの皆崎の奴、私は滅多に他人を恨んだり憎んだりしません、彼奴ばかりは本當に可厭で憎らしくつて溜りませんの、けれども仕方ありません、今は直接に皆崎に話すより外はありませんから、直其足で笛田町の皆崎の家へ駈つけて、さんく説付けた揚句、矢張五十圓を受取らして、そして執行は二週間丈け延ばして貰つてきたのでござんす、マアこれで一ト安心、仕方がないぢやござんせんか。』

八

女房の殊勝な行法に、悦良は顔に大なる感動の色を現はして、遂には眼の裡へ宿らせた露の滴を、

落さずには居られなくなりました。

『おまる、濟まん、夫程迄に心配してくれて、本當に氣の毒だつたねエ。』

『何の氣の毒も何もありません、此上貴郎にばかり心配させるのは私は嫌でござんす、私はどんなに面白くない思をしたからつて厭ひません、貴郎さへ心配なく御職業が出来るなら、私はそれが嬉しいのです。』

まる子は然う云つて而して其まゝ笑つて、これから皆崎の宅へ行つた話をする、間齋が金の貸借に關する汚い紙屑見たやうな書類の裡から首ばかりを現してゐたことやら、まる子に向つてツンケン亂暴な接遇法をしたことやら、目の前で一文残らず皆濟しなければ竈の下の灰までも浚つて持つてゆく脅迫話を併べたことやら、餘り面が憎いからまる子が悉皆素破抜いて、大變嚴重に催促をなさるが元來此證書は貴方が紙屑同様の古證文を多寡が二足三文で買つた中から發見だしたのを、元金三百圓とあるのに宜加減に費用を加へて大枚七百三十圓十五錢にして眞面目臭つて請求なさるので、本當に此様な旨い商法は世間には澤山ないと冷かしてやつたことやら、然うしたら流石の間齋ギウの音も出ず、憤然になつて、最初證文を買ふときから代金の高かつたことだの、其印形の本人が判らなかつたので二年といふもの彼處此處奔走して之を探し出すまでの苦心は並大抵ではなかつたの、其様な骨折と費用とは償つて貰ふのは固より正當の要求、取られるのは其人の責任だと言除けたことなどを話し、遂に

兎や角云ふ癖に成たけ手利かな法を用ふるのが自分の主義だなど、不減口を叩いて、矢張五十圓を受取つたと、模様を話して聞かせました。

悦良は女房の總て殊勝な仕打に、一々感心するばかりか、嬉しくつて溜らない、ア、能く行つてくれた有難いと、愛情がゾク／＼出て來て、首を引寄せて接吻をしかゝると、恰度此時編輯員の一人が前を通りかゝつたので、急いで止めて、而して更に小聲で訊く、

『小遣は今幾ら残つてる？』

『三圓。』

『宜しい三圓あれば二日は生活せる、最早金を借りぬで宜い、第一借金を申込んだからつても斷られるに相違ない、それに金談は誠に可厭だ、明日一つ「ファイガロ」新聞社へ行つて、僕の書いたものを買つてくれるか如何か訊いてみやう、嗟矣今書いてる小説が疾く脱稿ると、幾干かになるのだがなア！』

今度はまる子の方から接吻して、

『巧いきますよ、大丈夫、貴郎之から私と一緒に家へ御歸んなさるでせう、ねエ、サア參りませう、先刻栗島町の角の魚屋で旨しさうなのを發見しておいたから、青魚の一と鹽を買つて歸りませう、今夜の御菜は精進揚よ……。』

悦良は同僚に校正を頼んで、女房と社を出で歸りました。此方には庄兵衛と由利、之も打連れて社を出やうとする、社の入口のところに馬車が一臺留つてゐたが、廳で開戸を開けて出て来たのを誰かを見ると、別人ならぬ三田男爵夫人、夫人は此方の兩人を見て莞爾と笑つて、軽く會釋して、而して身輕にスタ〜と新聞社へ入つていつた、夫人はかういふ風に時々只何とはなしに矢野のところへ寄るのであるが、庄兵衛は夫人の人を蕩かすやうな眼容に密に胸を踊らしてをりました。

九

夫人はツカ〜と主幹矢野の室へ入つたが、別に座わらうとも致しません、別に用は無い只通りすがりに寄つたばかり、何か變つた事は無いかくらゐを、聞いて歸るのが定になつてるのでございませぬ、矢野は昨今は昔時と違つて、一足飛に相等の財産を作らへ〜ト廉の紳士となつてゐるのであるが、夫人の矢野を見ることは、依然以前、矢野が毎日父荒川伯のところへ平身低頭株の用を訊きに來た時と同じに考へて居るのでございませぬ、荒川伯は随分亂暴な性質の人で、大きな損をした時などには、屢く矢野を靴で足蹴にしたことなどがあつた、それを夫人は今でも覚えてゐる、が其んな事は構はない、今では矢野が相當な位地に坐つてゐるので、人の知らない相場の材料を開出すことが出来るか

ら、足繁くやつて參り、又親しくしやうとか〜つてゐるのでございませぬ。

『どうです、今日は何にもございませぬか？』

『左様、何も聞きませぬア。』

夫人は矢野から何も無いと斷られたが、こりやア無いのぢやアない有つても云はないのだと思つて、依然矢野の顔を笑ひながら見てをります、而して話を持込んで段々端緒を引張り出さうと、昨今世間の問題になつてゐる伊太利と奧太利普魯西との間の戦争の話を致して、此戦争の御蔭で株式會社は恐惶も同様、伊太利の公債などは大變な下り方、其他の公債も株式も一般に大下落で、自分は今度の受渡に大分の持高があるから、此調子が何處までゆくか向背が極らぬので困つてゐるなど、話を持かけると、矢野もさるもの、夫人の話を宜加減に受け留めて、

『夫人、貴女は貴女の旦那様といふものがあるから種々御訊きになつたら宜いぢやござんせんか、旦那様は大使館といふ今度の事件に就いてはイの一番に耳にすることの出来る位地にお在のですから、之より都合の宜いことはありはしません。』

夫人は人を輕蔑した風をして、

『駄目々々、亭主ツたつて、私の亭主は何にもなりや仕ない、あの人は全然無用よ。』

矢野は猶ほ抑擡半分の話を進めて、遂にはそれとなしに、夫人が關係を有つてる檢事總長神村成共

のことを當こする、神村は夫人に關係を有つて、夫人が相場をする其金を出してやつてるといふことは、知らぬ人はないのでございます。

「何か變つたことがあるでせう、ねえ貴郎、何處から聞いたでせう、ねえ貴郎知らぬ譯はありはしないわ。」

と夫人は飽までも追究する意氣組、終局には哀願するやうに、我眼を矢野から放しません、

「ねえ、後生だから知らして頂戴、貴郎屹度何か知つてるでせう、ねえ貴郎、ちや不親切だわ。」

何處迄も蒼蠅い、實は矢野も此女と一度遊んでやらうと思つてかゝつたこともあつたのだが、夫人の方は寄付けない、何だ株の御用聞き、父に足蹴にされた奴、そんな奴は眞平と、旨々と弾かれて了つたので、それから憎くつて、内心には大怒り、嫌味を交せて言放つ、

「不親切？ そりや御門が違ひませう、私が親切にしやうと思つたつて、貴女の方が不親切なのだから仕方がない。」

云はれて夫人は顔色を變へ、目に稜立て、起上つて、其まゝ背を後にして、スタ／＼と行きかゝると、矢野の方は一向平氣、もつと押搦つて馬鹿にして素破抜いてやらうと、

「貴女は今入口のところ相良君に御逢ひでしたらう、何故貴女は其相良さんに訊ねてごらんならん、相良さんなら貴女が何んな事を御訊になつても斷ることは出来ませまいぢやないか。」

云はれて夫人は暴々しく引戻して、

「貴君そりや何を仰有るのですか。」

「何でも貴女の可いやうに御考へなすつたら可でせう、貴女何も然う御澄しなさらんでも宜しい、私は貴女が相良君の家へ行つてお在のを見て知つてゐるんです、チャンと知つてをるのです。」

素破抜かれてムラ／＼と怒つたる夫人、矢張華族といふ自尊の頭腦で、ナンノ人を馬鹿にするなどいふ風はあるが、今日は故意とそれを抑へて、明確落着いた聲音で云除けた、

「ハア、さうでございますか、飛んでもない御間違、貴郎時候の加減で些と御逆上の氣味でござんせんの、私は未だ貴郎の仰有る相良さんの御世話にはなりません、なりたくないでござんすからハイ。」

「ハ、ア、然し貴女は心得違をなすつて居らッしやる、宜ぢやありませんか、今からでも遅くはありませんせ、貴女は始終何か初耳を聞かう／＼としてお在のですから、それには相良君を捉まへて、寢物語かなんかで、種々のことを御聞出しなさるが一番宜しい、篤くお考へなさい。」

身に滅道があるから此上強い言は云へない、考直して夫人は笑つて了つて、此方から進んで矢野の手を握つて、而して別れて參りましたが、夫人の手を握つた矢野は、其手がいかにも冷に感じられたので、ハ、ア此女、あの骨ッぼく瘦せて冷たい神村の老爺とも何の途永持はすまいと、心の裡に考へ

ました。

+

いつの間にか日も六月に入つたが、其月の十五日に遂に伊太利は埃太利に向つて宣戦を致しました、一方に普魯西は、其時から二週間経つか経たぬに不意の進軍をなして、一舉にハンノーフェルを占領し、兩ヘツス、バード、サキソンをバタ／＼と侵略して了つた、此間に立つて佛蘭西は如何かといふと、何の行動をも取りませぬ、事情に明るい人々の密々取引所内で語るところを聴くと、佛蘭西と普魯西とは秘密の協約が出来て、ビスマークがビヤリツツで佛皇帝と會合したのは其爲だと云ひ、佛國が中立の態度を執つて黙視してゐるのは報償を求めんとするからだ、こんなことでございます、所が株式の相場は如何かといふと、随分烈しい下落を來して、何の公債も何の株も皆やられてをります、サドフ事件の報が七月四日に着いた時には市場は悉く悲觀に陥つて、戦争は永びくだらうと取沙汰され、買人は皆無、何處へ行つても彼處へ行つても、賣注文は雨のやうに出でゐるといふ光景。

七月四日のこと、庄兵衛此日は遅く夕方の六時に新聞社へ來て見ると、矢野が居ない、此節矢野は何んな用事か知らんが鳥渡々々社に居なくなることがある、思ひも寄らぬ時に歸つてくるかと思ふと眼が弛んで總體に茫然してゐるといふ容子、これは矢野龍吉金廻が好くなつて來た爲に酒と女の二道

樂を始めて、不規則不品行になつた爲でございませぬ、今日も何處へ出懸けたか居りませぬ、又他の人間も誰も居ない、居るのは米本只一人、米本は取突の室で卓の端のところ飯を食つてをります。

仕方が無いから庄兵衛は手紙を二本書いて、歸らうとすると、由利が慌たしく入つてきた、見ると、顔を眞紅にして其舉動がいかに仰山、入つて來た戸も開ツ放して置くといふ慌てかた、

『相良君、相良君ッ。』

詰りさうに呼吸をついて、兩手を胸のところへやつてをります。

『我輩は、我輩は今大木君のところから來たのだ……、車が無かつたもんだから駈けて來た、相良君我輩は一大新聞を君に持つて來た、外でもない、今日大木君のところへ一大電報が入つたのだ、我輩はそれを見て來た、眞に一大事件ぢや、一大報道ぢやッ。』

大概それと覺つた相良、激しく手を振つて暫しと留めて、先づ以て急いで戸を締める、此方から戸の外を見ると、疾や既に米木が戸の前に迂路々々して耳聳てゝをります。

『何だ由利君一大事件とは？。』

『他ぢやアない、一大電報といふのは斯ういふのぢや、埃帝は遂に佛帝の居停仲裁を承諾し、而して威尼斯を佛帝に割讓することを承諾し、佛國皇帝は普魯西王及伊皇に向つて休戦を申込んだと、斯ういふ電文であるのだ。』

主客兩人、一時無言でをつたが、少し経つて庄兵衛、

『ちや平和か。』

『無論だ。』

庄兵衛は身體を押へつけられたやうに感じたまゝ、未だ何の考案も浮ばない、只

『ウムー、場面は未だ弱氣にばかり向つて居るな！』

と獨り言をしてゐたが、口は機械的に開かれて、

『此報道は君未だ誰一人知つてるものは無いのちやね？』

『誰一人どころちやない半分も知りませぬ、全體此電報は全くの秘密親展ちやから、明日の官報にだ

つて載る氣遣ひは無し、今から二十四時間は巴里市中へ知れつこないのちや。』

何事か思案してゐた庄兵衛、此時電光の閃めく如くに起上つて、更に又戸締を見、夫を一遍開けて

戸外に誰も聽いて居ぬかをあらため、半分は夢中の人のやうに、其まゝ由利の前へ立塞がつて由利の

フロツクコートの兩端を捉まへて動かさない、

『黙つて、靜に靜に、メタツ！ 天下は我輩等のものちや、郡代と郡代の與黨さへ此事を聞込ま

なければ天下は我黨のものちや、解つたか、エ？ 君宜いか、此事に關しては一言も人に洩し給ふな、

誓つて人間といふ人間に洩してはいかんぞ、友人にも妻子にも斷々乎として洩し給ふな、一陽來復ど

ころの沙汰ちやアない一大天佑ちや、恰度矢野も居らぬ、知つてるのは天下君と我輩ばかり、一つ大に作戦計畫をやらう、と云つたからつて何も我輩一人で何かを仕やうといふのちやない、自分一人で儲けやうとするのちやない、君は無論仲間ちや、萬國銀行の同僚は皆同じ仲間ちや、只謀略は密ならざるべからず、密ならしめんとすれば諸人に語るべからずちや、若し明日の立會前に少しでも嗅付けられるやうな事があつては萬事休焉となるのちやから、可かな由利君？』

由利は庄兵衛に秘計を語られて、其の作戦の巨大なのに悉く心を動かして、秘密は屹度守る旨を約束した、此の上は一分一秒時も猶豫はならぬ、此に兩人は手分を致して、作戦計畫に従事することに取決めた、庄兵衛は最早手に帽子を持つてゐる、立かゝつたが一寸留つて、思ひ出したやうに、『ちや何だね、此報道を君が齎したのは、大木が君に頼んで我輩のところへ告げさしたわけなのだね？』

由利は澄したものを、

『無、無論……。』

無論さとは云つたものゝ、心は大に躊躇した、其筈、無論どころか全然嘘なのだから……、電報の來たのは事實だが、それを大木が由利に見せたり由利に頼んで内々相良に知らせたりしたといふのは全然嘘、由利が今朝大木のところへ行つたときに、大木が一寸座を立つた間に、卓の上に乗せてあつ

た電報を横眼でデロリ盗み見たので、それを由利は大木から示された振をやつたのでございます、尤も由利は大木相良の兄弟が仲を好くすれば自分に取つても好都合、然うなれば此嘘も方便とならうと考へたので、第一兄弟は滅多に逢つて話などをする事も無いからと、安心してかゝつたのでございます、それとは知らぬ相良は大満足、

『流石に感心ぢや、此度といふ此度は兄弟らしい、有難い、サア〜出懸けやう〜！』

十一

此方の次の間には相變らず米本が只一人、何か聴取らうと一生懸命耳を澄まして立聞してゐたが、何にも判然と聴取れぬ容子、見ると彼は非常にワク〜して、今此空気の裡に或る大きな餌食があるのを嗅付けて、金銭の匂に心を激して、宛然猫が生魚の匂に咽喉をゴロ〜させてるといつた容子で、相良と由利が出てゆくのを、心惜しさうに見送つてをります。

猪庄兵衛と由利兩人は此で大活動をやらなければならぬが、困難なことは此大運動を人の氣のかぬ内に、且つ早速の間に行つて了はなければならぬ、宛然手品をつかふやうなもので…、そこで戸外へ出るが否や二人は手を分つて、由利は夕方場内に立つ小場立の方で働らく役目に回はり、庄兵衛は時刻は遅いが關係の才取りや大小の仲買を探し回はつて夫々買注文を發すことに致した、此買

注文も一ト口に澤山發しては人の疑惑を招く因だから、成丈け少しづつに分つて彼處此處へだすといふ風に致す、それから仲買達を此方から仰々しく一々訪ねては矢張不審を招くから成丈け偶然出會したやうに拵へ、事の序に注文を發したやうに仕組むことに申合はせた。

都合の好い時には好いもので、大通りへ出ると庄兵衛偶然矢田部に出會した、そこで庄兵衛いろいろ笑談などをして、終に大注文を渡したが、態とでないから大注文も大注文らしく聞えない、夫から一町ばかり參ると、向ふから來たのは矢田部の義弟土井の妻になつて美婦人、庄兵衛挨拶をすると、其婦人の話に今夜は土井が來る晩だといふ、そこで庄兵衛自分の名刺へ鉛筆で一ト言二タ言注文を書いて、土井に渡すやうに頼んで別れる、それから又歩きながら考へると、増島信平は今夜學校の同窓會があつて、其方へ行くといふことを聞いてゐるから、其同窓會の開かれる料理屋へ行つて偶然來たことのやうにして逢つて、注文を渡さうと、これから先回はりをして其の料理屋へ參つて、しかも今朝發しておいた注文を少し變へて、大注文を渡しました、斯ういふ風に、人に氣がつかぬやうに、いくつにも分つて種々の手口に注文を發したが、未だ猶且買ひたいと思つてゐると、爰に非常な僥倖といふのは、庄兵衛只今申す料理屋を出て十二時過ぎ家へ歸らうとすると、途中でバリエテ座歸りの馬島小吉に出逢つたので、一緒になつて往來を山屋町の方へ歩きながら種々と話をし、其序に買の注文を渡した、只一圖に意氣張つて注文を出すに反つて不審に思はれるといけないから、庄兵

衛は故意と買ひたかないやうな口前を粧ひ、友人共に頼まれたからといふことにして、成瀬其他數名の仲買への注文を渡した、斯くて庄兵衛漸く家へ歸つて、寢床へ入つたのが一時過、今日斯くの如く強氣に立つて買注文を發した高は合計五百萬圓を超えました。

翌日は朝七時といふ疾い時刻に、由利は最早庄兵衛の家へ出懸けて、前夜の小場立で行つた商内の模様を話し、買へる丈け買つたが、併し餘り大業に觸らしては只相場を煽るばかりでいけぬから、そこは巧く行つたと、委細の報告を致しました、由利が出した買注文高は約百萬圓、考へるともつともつと買つても宜いと、兩人は更に大に手を回すことに相談した、何しろ未だ其時間はある、今日午前中は此方のものだ、イヤ併し新聞紙上の模様は何だらう、前以て世間の模様も見てをかねばならぬと、二人はブルブルもので、有ゆる新聞を手に取つて片ツ端から目を通したが、新聞は未だ何にも知らぬ、未だ戦争は續く積りで書いてゐる、サドワの戦報の長い記事や電報で紙面が埋まつてゐる、休戦にならうとは夢にも知らぬ容子だ、若し午後の二時まで此まゝでゐれば、場は一時からだから二時迄は一時ある、其一時間の内に、否三十分もあれば、悉皆と作戦が整つて、彼の猶太の一族は屠殺盡滅して了へるのだ、愉快ツと庄兵衛は満身の喜悦、勇氣は天下を呑んでをります、此に兩人は、一時一刻も失ふことが出来ぬから、再び袂を別つて、更に濡手で粟の何百萬を掴まうと、他の方面へと押出した。

今朝庄兵衛は一軒の用向を済ましてから何だか歩行いてみたい氣がするので、途中で車を返して了つて、夫から第一に何處へ行つたものだらうと、空氣の裡へ鼻を突出し嗅ながら歩行いて、第一に行つたのが小部の宅、相變らず金貨の音がチャリン／＼やつてをります、悪い心持は致しません、其音は何だか自分の成功を諂つてくれるやうに思はれる、そこで小部に逢つたが、一件の事は無論曖氣にも出さず、第一小部も何にも知らぬ容子でございます。

小部の家を出て今度は増島信平の店へ行つたが、これは別に新しい注文を出す爲ではない、昨日出した注文は如何な風かと聞く風を粧つて見せました、此店でも未だ矢張何にも識らぬ容子、只例の福本が一人類に庄兵衛に附纏つて、種々と容子を聞たがつたが、これは福本は庄兵衛が相場や金融の事に就いては中々偉い人物だと信服してゐるからでございます、福本は關係してゐる川村花子の爲に此頃は中々金が要つて引足りない、如何かして資金を作らへなければと思ふが、雇人の身分では爾う自由にもならぬ、そこで此頃中から内々相場へ手を出してをりますので、それにつけても庄兵衛の思惑は間違はあるまいから、其にならつてゐれば宜いと、それで見込を訊くのでございます。

十二

庄兵衛は増島の店を出て、夫から三方軒へ寄つて、大急ぎの食事をしたが、食事をしながら見ると

いふと、元田と山縣が來てゐる、如何なことを云つてゐると、庄兵衛耳を澄して聞くと、弱氣の張本元田は相も變らず、今日は山縣までも一緒になつて悲觀説を出して、株はもつと下るといふ愚痴論を言合つてゐる、庄兵衛心の裡にホク／＼たらざるを得ません。

庄兵衛は其まゝ三方軒を出て、取引所前の廣場へきたが、時計を見ると十二時半、立會の時間には未だ半時間あるが、人の寄つて來るのを見るのも面白い——と庄兵衛は平素申すので——其邊をブラ／＼してをります、暑さは中々烈しい、太陽は真向に腦頂を照つけて、日陰といふものは殆んどなく、疾く詰かけた相場師や見物人は取引所廊下の大圓柱の僅かの日陰を撰つては息をついてをります、庄兵衛横手の明地に在る樹蔭を見るといふと、皆崎間齋とおせんが居たが、此方を見つける途端に、何か勢きつて頻りと話を始めてゐる、臆がて二人は此方へやつて來さうな風に見えたが、思返したと見えて又止めて了つた、二人は何事か探出したたのもあるか、年百年中取引所内の襪襦買紙屑拾ひとなつて熊鷹眼で其處此處見てゐるやアがる彼奴等……と、庄兵衛は其んな事を考へて、鳥渡胸の裡に不快な感を感じた。

が此時自分を呼ぶものがあるから、誰かと思つて振返つて見ると、例の床几に腰を懸けてゐる毛利と城大尉、此二人は今爭論をしてゐる最中でございます、毛利は大尉の爲る相場を頻りに吝くさいと罵つて、一日に十圓や二十圓儲けたつて何になる、夫ツばかり、田舎の小料理屋で骨牌を行つたからツて儲けられる、外聞が悪い、吝嗇は止め、今日は相場が屹度又下ると日月の煌として欺く可からざる者だから、どうだ小ツぼけな直などは止めて一つ大に賭つたらば、ねエ相良さん然うぢやないかと、相良迄證人に出して論じ立てる、毛利は相場は下ると固く見越してをるので、資産有丈をも出して賣つてみやうとしてゐるのでございます、面と向つて云はれてみると、庄兵衛も困つて了ふ、仕方が無いから只ニヤリと笑つて、不得要領の容子を作りながら、考へて見ると此毛利はコツ／＼と働く罪の無い人間、ツツク製造を營つてゐた時分に交際つて其性質は知つてゐるから、滿更虚事を言つても氣の毒だと思つたが、此場合正直なことは毛頭言る譯のものでないから、相場師の必要性なる冷酷な頭腦を其まゝ、庄兵衛宜加減のことを申して置いた。

毛利に對して宜加減な返事をしながら少し困つてゐた庄兵衛は、此時他へ氣を奪られることが出来た、と申すのは外でもない、三田男爵夫人の馬車が前を通つたのでございませう、夫人の馬車は聽て番久町のところでハタと留つた、之を見送つて居つたる庄兵衛、此時偶然と心に浮んだのは夫人の良人三田男爵のこと、埃太利大使館參事官をしてゐるのだから、休戦の事に就いて何か耳にしてゐない事は無い、さすれば夫人も其事に就つてゐやう、知つてゐるは宜いが兎角婦人の淺墓な拙劣をやつて、事を世間にバツとさせて了つては大騒ぎだ、知てるかそれとも知らぬでゐるか、庄兵衛大に心配になつたから、其まゝ往來を向側へ横斷つて、夫人の馬車へ寄るともなしに迂路々々してゐると、

馬車はビタリと留つたきり、馭者は馭者臺に鯨子張つたきり、宛然馬車と共に立往生をしてゐるやうだ、が聽て馬車の一方の硝子窓が下されたから、庄兵衛急いで側へ寄つて、懇懇に叩頭をいたすと、夫人は相良を見つけて開口一番、

『オヤ相良さん、相場は未だ下るやうでござんすね？』

と問懸けた。

庄兵衛は、何豈亭主から休戦の事を聞いて知つて居る癖に彼女奴空ッ惚けてゐやアがる、其とも奔にかけてみる氣かと思つたが、此方も飽までも知らぬ顔して。

『左様、御説の通りで……』

と云つたきりであると、夫人は心配さうに庄兵衛を眺めてゐる、熟々其容子を見るといふと、夫人も矢張衆人と同様何も知らぬでゐるらしい、此に於て庄兵衛ホツト一息、安心を致してをると、夫人は猶も、

『そんなら相良さん、何にも私に話して聞かせて下さることは無いんですね？』

『何にもありません、貴女の御存じの事ばかり。』

これで庄兵衛は夫人に別れる、別れながら庄兵衛心の裡に、

『さあ見るが宜い、折角俺の可愛がるのを思はないから罰が當るのだ、人われに辛ければ我又人に

辛しだッ。』

庄兵衛は夫人を、モノにしようと思つてゐるが、未だ本意を遂げられない、面白くなく思つてゐるのだが、何時か一度は手に入れやうと透をねらつてをります。

庄兵衛取引所の廣場へ戻つてくると、遙か向方の上野町の方から郡代らしく思はれる人がやつて來たのが眼についたので、又もや心に冷乎とした。

遠くだから小さくは見えるが確に郡代に相違ない、例時の通り歩行き方の緩くりした、少し蒼白い顔を前へ真直にした、通行人が大勢居やうが居まいが傍に人無きが若くに、宛然只一人で天下を濶歩してゐるといふ容子である、庄兵衛は郡代から眼を離さない、遠くから其一舉手一投足を觀てゐると、仲買の成瀬が郡代の側へ來て一緒になつたので、庄兵衛は又冷乎、が一言二言云つたかと思つたら成瀬は失望らしい風をして別れて行つて了つたので、庄兵衛は安心した、段々郡代の容子を見ると、平日と異つたところは無い、此様子では今度の休戦一條は流石の郡代其人の耳にも未だ入らぬのであるらしいと、庄兵衛稍安心をしてゐると、益々安心のゆくことが出來た、といふのは、歩いてゐた郡代例時の通り子供達への土産のボンポンを買ふ爲に買つけの菓子店へ立寄つた、市場が動揺してゐるときには彼は決して此菓子屋へ寄ることは致さない、それが如斯平氣で寄るところを見るといふと、何事も思つて居ぬと見て宜しいと、庄兵衛は胸撫下ろした。



十三

遂に時計が一時を打つ、場の開始の鐘が鳴る、彌々今日の立會となつたが、此日の立會は實に記憶すべき一大立會、滅多に見ない慘況を呈したる暴騰の爲めに數知れぬ破滅者を出したる取引所史上金融史上特筆大書すべき日で、後から考へると宛然一つの譚のやうな大混亂の日であつた。

蒸かへされるやうな炎暑の内に、立會は始まつたが、寄付には株は矢張前日と同様下る一方、ところが、何處から出たか、チラホラと買の手振りが見えて来た、彼處此處にバラ／＼買ひに出るものが現はれて来た、今立會の戦闘が始まらうといふに先つて射撃者が急に火蓋を切つて

人を驚かしたやうに、人々は驚いた、併し此時は買方が未だ左程でないから、人は只何となく不安の念を以て呆然と頭重に進んでいつたが、買人は段々増してくる、刻一刻に色めいてくる、買人氣は場内からも場外からも客席からも參觀席からも、只増してくる一方。

ガヤ／＼する人聲の裡に、耳立つて聞えるのは圓柱の下に陣取つてゐる成瀬仲買の聲、夫から場内の増嶋や谷田部や土井の聲、價段がいくら高くつても枚数がいくら多くつても、幾らでも、持て来いといふ買乗、ハテナ此四五日下る一方だつた株が、何處から斯う急に景氣づいて狂氣染た人氣になつて来たのだらうと、考へてみるが誰も其據つてくる所が解らないから、此混亂中に何を如何して宜いか手の出しやうが無い、併し原因は解らぬとしても、買手ばかりだから相場は上がらざるを得ない、そこで氣配はだん／＼と騰貴に向つて參りました。

こゝぞと庄兵衛は更に新しい注文を馬嶋の手で成瀬へ發す、すると此時福本が前をチヨ／＼駆け来て来たから、庄兵衛は呼留めて、注文書を認めて増嶋へ渡すやうに頼んだが、其注文書は固より注文文、もつと幾らでも買へる丈け買へといふ注文だ、庄兵衛を信仰してゐる福本は、渡された注文書を見て、ハ、ア相良が是程に買ふのだから買つても宜いと、自分も自身の勘定で相當の買注文を發しました。

今時刻は二時に十五分前、即ち此瞬間でございます取引所場内の隅々限々に、霹靂一聲一大變報が

傳はつたのは……、外でもない、埃太利は威尼斯を當佛國皇帝に割讓して、爰に戦争は終局を告げることになつたといふ大々的變報……、が此大報道は一體何處から來たのであるか、誰一人それを告げ得るものが無い、其辭誰も彼も其を口にす、併し煙の無いところに火の手は擧がらぬから、誰かしらん報道を言觸らしたものがあつたに相違ない、サア一犬虚を吠えて萬犬實を傳ふ、噯は夫からそれへと擴がる、人々は周章する、戸惑する、不安の念を生じる、相場は何の株も何の株も一足飛に騰る、満場の騷擾ツたらぬ、遂に大引の鐘の鳴る前には、大概の株は四十乃至五十圓の暴騰を見たといふ、實に凄じい光景、それから其又跡が大變、敵味方入り亂れて生命から夢中に戦つたのであるから、戰場には死傷算なく、殺氣空濛、戰塵地に捲くといふ實景でございます。

受渡の日になつて慘害の程度が判つたが、其額といつたら非常なもの、殊に後になつて現て來た死傷者の數は夥しく、殆んど意外でございました、例の弱氣の大將元田の如きは最も手酷い負傷を被つた者の一人でございます、平常強氣を以て誇つてゐる山縣も、今日といふ今日は流石に兜を脱いで降參の體、毛利の損失は約五萬の上に出たが、彼が此様に大損をしたのは生れて初めてでございます、三田男爵夫人も大の負傷で、證據金が拂ひ切れ切ないで大煩悶、人の噂に由ると流石の神村も金を出すのを斷つたと申すことでございます、此ところ夫人に亭主の話を一ト言でもしやうものなら、顔を蒼白くして大立腹、大使館然も埃國大使館參事官として此度の電報は眞先に知つて居なければならぬ

善寧ろ大木大臣よりも早く耳に入れてゐたらうに、それを自分に知らしてくれぬといふは何事、其んな亭主は何が亭主、憎い恨めしいと、夫人は切齒扼腕の態。

個人の損害は只今申上げた通り、それからこの諸大銀行殊に猶太人の大銀行の受けた打撃は非常なもの、殆んど手も足も出せないかと思はれるほどの損傷でございます、郡代は自分一人丈で八百萬圓といふ大損をいたしたが、郡代ともあらうものが如何して休戦の一大報を耳にしなかつたか、誰も彼も不思議でならない、財界には不可抗争の權力を掌握してゐる郡代、内閣諸大臣を手下のやうに願使してゐる郡代、彼の前には帝王も國家もあつたもんでない其郡代たるものが、此んな愚な目を見るといふ、これも畢竟まかり間違つた運命で、道理にも據らぬ論理にも合はぬ、所謂災難でございます。

十四

一方に於て風評は段々擴まつて、相良庄兵衛は偉い人物だといふことが悉く認められて了つた、一寸一ト歎當てたばかりで、彼は弱氣連が損した高の殆ど全部を收獲して了つた。自分の懐中へ入つた金ばかりが二百萬、跡の残りは萬國銀行の金庫へ入つた、といふのは表向き、實は取締役の懐中へ流れ込んだのは確でございます、濱野敏之が此戦利品から得べき分け前は約百萬

圓ございました、此高は、正直な勝負で猶太人と争つて獲た金だと説明しても中々解らなかつたのを、相良は纔と納得させて取らせました。

由利も此仕事に大手傳をしたといふので大層割の宜い分配に預りました。それからして其他の關係者、醍醐、福岡子爵等、皆夫れ相當の利益に浴しました、それもこれも皆敏腕卓越なる支配人の御蔭と、御目出度いこと有難いこと、誰一人相良に向つて感謝の意を表せぬものはございませぬ。

殊に内心庄兵衛に如何禮を云つて宜いかわからぬで困つてゐるのは福本、庄兵衛に倣つて工面して買つた結果が、一萬圓といふ今迄有つたことのない大資産を起したので、サア嬉しくつて溜らない、一萬圓あれば花子といくらでも遊べる、夕景なんぞ瀬藤と糸枝を誘つて色男色女二タ組で少しくらの洒落た料理屋へ行つて贅澤もされると、物も手につかぬ位のホク／＼喜び。

こゝに一人忘れたのは矢野龍吉、此事件を知らせないで置いたので本人ブツ／＼怒つてゐたが、併し總花の分配があつたのでオサマつて了つた。

唯一人諸人の後に残つたのは米本、庄兵衛と由利との會談を立聞して、大金儲の匂を嗅いたいけ、何にもならず、寧ろ嗅がないで知らなければ、知らぬで宜かつたので、何にもならないから大失望でございませぬ。

相良庄兵衛の此第一回大成功は、恰度佛蘭西帝國の大發展と同時に成つて、帝國も此時が隆盛の頂上に達した時なのでございませぬ、佛國は埃太利に威尼斯を割譲させたので國中は歡呼喝采で大景氣、此日株式取引所では相場亂高下の爲に慘害著しく死屍縱横といふ有様であるのに、市中では戸毎に旗幟を押立てイルミネーションを施し、萬民舉つて奈翁第三世陛下に謳歌するといふ有様、皇帝の勢望は大したものでございませぬ、尤も議會中の反對論者は種々な説を放つて、今は勝つても決して油斷はならぬ、將來は報復の反つて恐るべきものがあらうなど、不吉な言論を稱へるものもあつたが、其等の聲は歡呼笑聲に葬られて了つて、巴里の大都会はさながら祭のやうな大騒いでございませぬ。

さて庄兵衛は此日の夕方相場の大成功に心浮立つて、市中を歩行いて、今古堂町から金座大通りをやつて參つたが、到るところ軒提球燈國旗幔幕イルミネーションで眼も眩きばかり、其又人出と云つたら宛然芋を洗ふやうでございませぬ、今日相場界の大當りを一人で背負つたのであるから、庄兵衛は心の裡に、此祭りのやうな大騒は自分の爲に人が爲てくれるのではないかとまで慢じて、得々としてをりました。

斯う萬事得意の裡に、庄兵衛只一つ心に懸る事があるそれは外でもない、兄大木が此度の事で恐ろしく立腹してゐるといふことだ、今度の株式の暴騰は由利が大木の所で卓の上に在つた電報を偷み見たのが原因になつたといふことを覺つてから、大木悉く腹を立て、早速由利の出入を差止めたとい

ふことだ、自分は兄が好意で電報の趣を秘密で知らせてくれたこと、思つてゐたのが大違ひなので、今更有力な兄に反對に出られては困るから、庄兵衛當惑を感じないわけにはいかない、しかし最早どうも仕方が無い、何豈に今は兄だつてさして恐るゝに足らぬ、此方は此方で行るばかりだと、勝ち誇つたる庄兵衛心を取直して、光り輝いてゐる群衆の中を掻わけかきわけ、山屋町の自宅へと歸りました。

十五

それから二ヶ月経つた九月の事、庄兵衛郡代に打勝つた勢ひに乗じて、段々と圖に乗つて、猶一倍萬國銀行に勢ひをつけ且つ之を利用して、郡代を引込ましてやらうといふので、計謀を進ませること決心した。

去四月下旬開會の株主總會で報告された損益勘定で見ると、銀行の第一年期に於ける總利益金額は、資本増加の際に徴收した一株に付二十圓の割増——増加株數五萬株だから此割増金百萬圓を——籠めて合計九百萬圓あるが、其の内から第一に未済になつてゐた創業費を悉く償却をいたし、第二に株主の定例配當五分を、第三に取締役手當一割を引去り、次に準備積立金には法定の一割の外に特別に五百萬圓を計上し、殘額一百万圓あるそれは更に第二配當として一株に付十圓の割で株主へ配當した、之は實に上々の成績、殊に開業してから未だ二年と経たぬ新銀行の成績としては、滅法もない

成績である。

熱情の高まつてをる庄兵衛は此機逸すべからずと、更に一突進をしやうと、又もや第二回資本金増加を企てた、即ち前回倍額に増加相成りたる資本を、更に倍額に致す案、五千萬圓を一億圓に増加して、増加株數十萬株は前回通り現株一株に付新株一株の割で引受けさせる、と斯いふ提案、遂に之を第一に重役會で承認させ、而して九月十五日に開會相成つたる臨時總會で旨々と可決させて了ひました、只今回は發行價格を六百七十五圓と致したので、一株の割増が百七十五圓となつたが、此金額は直ちに之を準備積立金に繰込んで了つた。

資本増加の説明は此ういふので、——事業は着々成功を以て進んでゆくし、第一、銀行の着手しやうとする事業は頗る大事業であるから、資本は多々益々多きを要して、しかも收益も之に伴ふから、短日月間なるに拘はらず再度の増加は怪しむに足らぬ、今回も事業に伴ふ増加である……と斯ういふ説明でございます。

さて此資本増加は直と相場の上に見られて、此一ト月來七百五十圓前後を上下してゐた株は、三日内に遂に九百圓を稱ふるに至りました。

濱野敏之は頭取として臨時總會に列席する爲に歸京することが出来なかつたので、妹のところへ心配した手紙で、何んな理屈が有るか知らぬが無暗矢鱈の業務擴張資本増加は寒心の至りだと言つて寄

越し、今度も依然先時のやうに船越登記役場で虚偽の申告をしたに相違ないと、疑點を言つてよこしました。

全く敏之の推量通り、増加した株式は悉皆引受済になつては居りません、株主が引受を欲しなかつた分は銀行自身が持主となつて責任を引受けてをる譯で、其拂込は實はされてない、只筆先で例の阪谷の名前にしてあるのでございます、獨り此のみではない、此外にも未だ銀行重役だの使用人だの分で只名義丈のものが大分あつて、此等眞實引受人の無い持数が凡三萬株、金高にすると千七百五十萬もございませぬ、これは獨り法律違反であるばかりか萬一の事があると危険千萬な話であつて、從來の實地に照して見ても、自家の株券を賣買する銀行又は會社は、必ず失敗に歸すると云はれてをる恐ろしいございませぬ。

敏之はそれやこれやを心配して言つて寄越したのだが、かつ子は今は至つて平氣、貴兄は私が先時に仕たやうな心配を今仕てゐなされる、それは私も初めは心配した、が其心配は餘計の心配、心配したのは愚だつた、今自分は始終側で監督つてゐる、一緒になつて行つてゐるが、曖昧なことは無いのみか、反對に感心をするにばかり、皆筋道は判然立つて論理に合つて、怪しいことは毫も無い、と此んな返事を出しました、其實を如何かといふと、かつ子は何にも知つてゐない、庄兵衛大概の事は押隠して彼女には告げぬのであるのだから知つてゐる理由はない、皆宜くいつてゐると思つてゐる、第一此頃彼れ

かつ子は、悉皆庄兵衛に信じ入つて、所謂眼が無くなつてをりますから、痘痕も笑靨に見える道理で、何でも彼でも好いやうに思つてゐるのでございます。

十二月になりましたが、株は到頭千圓臺を抜いて了つた、さて、反對の大銀行連は如何かといふと、萬國銀行が勝誇つてゐるそれにも拘らず至つて平然たる態度を粧つて、郡代の如きは途中で逢つても、平氣な顔容に無意識の歩行き方、相變らず例の菓子屋へ立寄つてボンボンを買つてゆくといふ體たら、前にも申し上げたる通り、郡代の今度の損失は八百萬にも上つたのでムいですが、それを拂ふに至つて平氣、苦情も云はず嫌な顔せず、それが表面ばかりかと思ふと、昵近の人に聞くと、蔭でも矢張腹も立てず、恨めしい一言一と言洩さず、素直に拂つたから、反つて驚いたと、斯ういふ事でムいます。抑も郡代が此様な大損をすることは滅多に無いことで、若し假に損をした場合があつても、何豈損は損で仕方が無い、辛いが好い経験になるのだと、平氣でをるのでございます、しかし、人にも物にも冷靜な頭腦を有つてゐる彼れ郡代も、今度は随分考へた、たとへ亂暴無算の、理屈も見込もない相良の行法で、論ずるには足らぬけれども、今度は此儘では濟まされぬ、逆も堪へ得ることでない、流石の郡代三郎右衛門此時からして始終相良の舉動に注意いたし、いつかは復讐をやつてやらうと、心に用意を致しました、で世間では萬國銀行に對して歎願の聲を以て迎へてゐる此方に、郡代のみは内心不審を以て迎へて、如此な疾い不自然の成功は有り得べき道理がない、必定山師の行法に相違な



い、基礎の脆弱い虚偽で固めた見懸倒しに相違ないから、黙つてゐても倒れて了ふ、不義の富貴は浮べる雲だ、マア／＼見てゐれば宜いもの、併し今の千圓相場は未だ極詰りとはいかぬだらう、猶少し上へゆくだらう、併し夫からは下るばかり、それを待つてゐれば宜い、無理な策を施して、此方から下げるに及ばぬ、道理に任しておけば宜い、相場事業といつたつて矢張り道理の外には出ぬ、不自然に無理に高くしても、下るものは下つて了ふ、即ち其機さへ外さずば、黙つてゐても金は儲かる、マア黙つて千五百圓位まで騰らせて、其聲を聞いたなら戦闘開始だ、千五百になつたら賣を始める、前以て悉く策戦計畫を立てゝおいて、最初は少しづつ賣つて出て、それから各受渡期毎に賣高を増してゆく、

弱氣シンヂケートを作るにも及ばぬ、自分一人で澤山だ、伶俐な人間は理屈が判つてゐるから、期せずして同一方略に出るに相違ない、圖に乗つて聲ばかり大きい萬國銀行、成上りの萬國銀行、故意と猶太人經營の銀行に脅迫の態度を粧つてゐる萬國銀行、打棄つておいても自滅をすると、郡代の見込は此ういふので。

十六

庄兵衛は銀行の店を假普請で置くことが出来ない、遂に英町に手廣い古家があつたのを買入れて、それを取毀つて、夢想してゐる宮殿的の建築をして我事業の本據としやうと、到頭思ふ通りに定めてしまつたが、後で人の噂を聞くと、此事は郡代が傍から秘密に煽動して實行させた氣味があるといふことで、郡代の底意は言はずとも明白だ、さて此華麗壯大を極めた大建築は、他の取締役達には異議も有つたが、庄兵衛は何か此か押付けて賛成させて了つて、十月の中旬から職人も入る運びとなつた。最初の石礎は壯嚴な儀式までも行つて据付けられたが、式に列席した庄兵衛は、其日の午後四時頃、歸りがけに新聞社へ立寄つて、式の次第を吹聴旁々他の新聞社へ話しに行つた矢野の歸つてくるのを待合はしてゐると、恰度社へ三田男爵夫人がやつてきた、夫人は矢野を訪ねて來たのであるが、矢野が不在なので、折から庄兵衛が居合はせた爲に、此に偶然逢ふことに相成つたが、庄兵衛は何なりと

も御話の出来ることなら致しませうと、心好く出迎へて、廊下の突當りの別室へと案内した、入った室の戸は内部からビシヤン、内部で兩人何事を談じたか又致したかは判らぬが、種々な雑談のあつた外に、庄兵衛日頃の思ひのたけを掻き口説き、夫人は脆くもその情に絆されてしまつたらしい。

ところが飛んでもない事が始まつた、といふのは外でもない、恰度此時かつ子も新聞社へやつてきた、かつ子は今日何か用事があつて門丸町迄来た爲に、序でもあり旁々社へ寄つたので、彼女は時々此んな風に、別に用があるでもなく、鳥渡庄兵衛に話があるか又は尋ねたいことがあると、時ならず新聞社へ來ることがあるのでございます、第一小使の米本はかつ子が口を利いて入れてやつた男であるから、此社へ寄ると能く世話をしてくれるので、心置きなく鳥渡々々參る、さて今日もかつ子來て見ると、受付室間近に米本の影が見えないから、別に遠慮なく廊下を奥へ通つてゆくと、廊下で米本と擦違つた、米本は相も變らず、取引所内の秘密を聞出さうと、閉時さへあれば矢野や相良の戸の鍵の穴のところへ耳をつけて、立聞をいたしてをります、もう今日では此が一つの病氣のやうになつてるのでございます、今しも庄兵衛三田夫人を奥の一室へ連込んで密々話をしてゐるから、矢張相場の密談ではあるまいかと、米本耳時て、聞いてみると、これはしたり意外の珍事！聞いた此方が赤面するといふ間の悪い事なので、變な顔容して笑ひながら、戻つてくる其道で、米本はかつ子に出會つたので……。

かつ子は行きかけて訊いてみる、

『相良さんは御室でせう、エ？』

米本は、何やら口の裡で云ひながら袖引留めて、嘘をいふ暇もないから仕方なく、

『ハイ、室に、御出でムいます、御出でムいます貴女御入りなさることは出来ません。』

『入れないつて何故？』

『何故つて御婦人の方が一人來て御出でムいます。』

婦人客と聞いたかつ子、顔が看る看る蒼白くなつたのは、何と不審ではムいせんか、此方に米本は、何にも事情を知らないから、眼を細くし首を縮め、ニヤリと笑ひながら、容子でもつて怪しいことを覺らせた、かつ子は聞くのも夢が夢中、

『誰？ 女の方つて何誰？』

米本は名前を隠す譯は少しもない、殊に思になつてるかつ子の爲だから、忠義顔に耳元へ、

『三田男爵夫人です、時々やつて御入來になります……』

かつ子は暫らく身體が動かなくなつて了つた、此廊下は薄暗いから顔色の蒼白くなつたのは見えな
いが、かつ子の心中は辛い切ない、云ふに云はれぬ嫌惡な思ひ、その人を疵つけた行爲に呆れて茫然
して、即ち身體が釘付けにされたやう……、如何したら宜いだらう、寧ろ踏込んで飛かゝつて、生恥

かゝしてやらうかしらんと、とつおいつ悶えるばかり。

が如何したらの思案はつかぬ、モヤ／＼心を掻きむしつてゐると、今新聞社へ良人悦良を迎ひに來たまる子が、元氣好くやつて來て、かつ子に言葉をかけました、まる子は此頃かつ子と懇意になつたのでゝいます。

「アラ奥様でいらつしやいましたの、失禮、私達今晚は芝居へ参ります、本當に纏とのことござんす、嬉しくつて溜りません……。」

ガラ／＼喋つてゐるところへ、悦良も出てきて、遂に夫婦は、手に手をとつて嬉しきうに出掛けてゆく、かつ子は若夫婦の元氣な話に、思はずも興を覺えて、一寸莞爾、

「御愉快ですこと、いつていらつしやい。」

云ひは云つたが、其聲は依然頓へてをりました。

兩人を見送つて今度は自分も出掛た、かつ子今は庄兵衛を愛して、心は全く捉はれて了つたのでございませす、今日意外な幕に遭遇して、心は驚愕と哀愁に打たれて、人に言はれぬ外聞の悪い恥辱に、獨り心を惱ますばかり。

發覺

一

それから二ヶ月経つた十一月の或る日のこと、空は薄曇りであつたが、暑からず寒からぬ好日和、かつ子は午飯を仕舞つて、直ぐと其まゝ仕事をしやうと、例の繪圖室へ入り込んだ、かつ子が今従事つてゐる仕事といふのは外でもない、自分と兄敏之が嘗て東歐に滞在中東洋鐵道の大事業に就き彼處此處旅行をして種々と取調をしたときに取つて置いた見聞の手控帳がある其手控を、此大企業に就いては後來の好い歴史記録にもなるから猶一遍見直して集録しておけと兄から言越したので、此二週間前から醒観それにはッカリ従事つてゐるのでございます、此日は割合に時候が温かいので、かつ子は暖爐の火を消して了つて、窓を開いて、卓の前に坐わる先に鳥渡、隣家の、芳村家の、露出しになつてる大樹で其邊が一面に青暗くなつてゐる景色を眺めた。

かつ子は三十分ばかり仕事をしてゐたが、頭腦は自分の身の上のこと働いてばかり、庄兵衛と三田夫人と關係があるといふことを偶然した機會で聞込んでみると、既に身を任した覺えのあるかつ子は、酷い切ない思をしない譯にはいかない、そこで二人の關係に氣をつけてみたい又知りたい氣

は山々生てくるが、そこは伶俐なかつ子、凝乎と堪へて、其様なことは如何でも宜いと、我れと我心を抑へてみる、何豈自分は彼の人の妻ではない、一生懸命になつて我を忘れて嫉妬をするほどに思つてゐる男でもない、自分も最早十九や二十の身どころか、三十を七つも越えてゐる身體、亭主を有つて懲々した経験もあるし到底無分別な真似は出来ない、道徳の念が鳥渡身體から離れた刹那に、飛んでもなく爲すがまゝに身を弄ばれたもの、自分は本心は何處迄も正しい積り、何の關係も無いつもり、とすると庄兵衛が何うしやうと此うしやうと、眼を閉つて識らぬ振りして、痛痒感せぬでい譯だ、愛人を見ると思はず、母が兒を見る如くにして、それで宜い譯合だ、とかつ子はいろ／＼と考へて、其氣にならうとはするけれども、倍て矢張段々と煩悩が湧いて來て、然うも亦思はれなくなる、今日も千々に心を奪はれて、仕事も段々遅くなつたが、纒くのことと夫れを忘れて、平かな心になつて、十分ばかり又調物に従事つてゐた。

すると、そこへ取次の書生がやつて來て、長吉——前日暇を出された庄兵衛の車夫——が尋ねて來て是非貴女にお目にかゝりたいと、何と云つても聞入れずに待つてゐるが如何しやうといふ、此車夫長吉は庄兵衛自身何處から雇つてきた男であつたが、ちよい／＼不正直なことを働いたので、昨日といふ日に庄兵衛は暇を與つたのでございます、其様な奴であるからして、かつ子は成べく逢ひたくない、斷らうと思つたが、考へ直して、兎も角も逢つてみることに致しました。

長吉といふのは身長の高い一寸男振が好くつてそれを鼻にかけてゐるといつた人物、髯も襟元も綺麗に剃刀が當つてあつて、厚顏しい容體でノコ／＼と上つてきた。

「イヤ濱野さん、今日參たのは他の事でもござんせんが、私の買ひたての襦衣を二枚一二度着た許りのを、洗濯して貰はうとお竹さん(相良家の女中)に頼んだところが、それを其優失されましたんで、辨償して貰はうと思つてもお竹さん承知をしてくれませんが、私だつてもそれをどうも失くなしッばなしにて置かれるのは大迷惑、詰まるところ責任は雇主の貴女に在ること、存じて、へい何卒御代で宜しうございますから御辨償を願ひたく、それで御願に參つたやうな理由でへい、何豈代金は七圓五十錢で宜しいんで。」

一體斯ういつた家事に關しては、かつ子は中々殿しい方で、殊に斯んなことで議論などをするのは嫌だから、言草なしに七圓ばかり拂つて了はうとも思つたが、餘り長吉の言ぐさがズウ／＼しく、第一不正直の證據が上がつて昨日暇を出されたばかりなのだから、オイそれといふ氣になれない、

「何だつて？ 七圓五十錢貰ひたいッて、汝何を云ふんだね、私は汝に一文だつて上げる御金は有りやしない、第一旦那から堅く命令られて、長吉が來たつて何もするなと悉皆禁められてゐるんだよ。」云はれて長吉膝を進めて、脅迫の態度を執つた。

「へエ？ 旦那様が其んな言を仰有つたんでげすか、成程御道理、大方そんなことたらうと思ひやし

た、成程御道理千萬、と申上げたいが、そりや旦那は御考違ひをなすつてらッしやる、悪いことをするのには私ばかりぢやござんせん、私だつてチャンと知つてるんでげす、貴女が旦那の小指だつていふことくらゐは、チャンと存じてをるんでげす。」

思はず顔を紅らめたかつ子、起上つて長吉を追返さうとしたが、相手はかつ子のまゝにならない、わざと一段聲を高めて、又ベラ〜と喋りだした。

「濱野さん、イヤサ相良の奥さん、貴女だつて旦那が一週間に缺かさず二度、午後の二時から六時まで何處へ何をしに入來ッしやるか、御存じぢやアムすまい、エ？ 如何でござんす、聞かしてお上げ申しやせうか？」

二

かつ子の顔は見る／＼蒼くなつた、有ゆる血が心臓の方へ逆戻りをした爲でございませう、此二ヶ月仄に聞いて知つてはゐたが、全然聞くのを避けてゐた其事柄、それを今爰で酷くも靨面に聞かされるのだから堪らない、かつ子は激しく手を振つて、

「そ、そんな言は云はないで宜い、さつさと此處を御歸り！」
突出さうとしたが長吉、態とかつ子のよりも一層聲を張上げて、押被せ口調で、

「相手は三田夫人でさア、三田男爵夫人でさ。一體夫人は神村さんの有になつて、神村さんは幸丸町通りの、三澤町へ曲らうツていふ角の果物屋の裏の小じんまりした家の二階を借込んで、夫人与勝手な真似をするところにしてあるんでござんすが、此家の旦那は内密で其家へ這入込みなざるんでさア。」

聞くに堪へかねたかつ子、手を伸ばして呼鈴を押して、誰かを呼んで、長吉を戶外へ引張り出して貫はうと思つたが、家人がやつて來たところで此様なことを聞かれては大變と、又躊躇つて了ひました、長吉は猶も續けて、

「如何して私がそれを知つたかてえと、それは其家に働いてゐるおくらといふものこれは私の懇意でござんすが、それが何も彼も見て、見せつけられて、それで知つてるんでござんさア。」

「御黙り御黙り、そんなこと聞かないで宜い、サ、サ七圓五十錢此にある、これを持つて早く御歸り。」
長吉を歸すには金をやるより他に方法がないと思つたから、かつ子はいかにも不快で溜らぬ風をしなから、七圓五十錢の金を長吉の前へ投出した。

正直なもので、金の顔を見た長吉は言葉つきも急に叮嚀、

「何豈濱野さん、私だつてこれでも貴女の肩を持つて上げてる積りなんですよ、今御話した家は、ソノ水菓子屋の裏の、何豈容易に譯りまさア、コーツと、今日は…木曜日、時計は何時かしらん、オ

「四時だ、恰度旦那の行く日で行く時刻だ、如何です濱野さん、御案内ませう、一つ秘密で行つて御覽なすつたら？」

かつ子は一言も發せず、顔色を蒼白くしたまゝ、長吉を戸の外へ押出しかつたが、長吉は依然言止まない、聞くに堪へない言を並べてゐたが、もう目的を達したのだから、到頭此を出ていつた。

跡にかつ子は暫らくの間、身動きもせず茫然と考へたまゝ、聽て力なく起上つて、其まゝ卓の上へ突伏したが、其途端に、堰を拂つた溜涙は一時に迸つて、卓の上を時ならぬ洪水と變じさせた。

全體長吉の話の中にある下女のくるといふのは、至つて腹の黒い女で、三田夫人が密男を拵らへてゐるのを利用して一つ金儲をやらうといふので、様々な寸法を作らへた、即ち神村が金を出して借りてゐる幸丸町の家へ、夫人が庄兵衛を引張込んでゐるといふことを神村へ知らせ、其證據を見せたらば褒美として二百圓を貰はうと、斯う要求をいたしたので……、ところが吝嗇の神村、二百圓は中々出さない、種々と押問答で價切つた揚句が七十圓に減つて、庄兵衛が夫人と密會してゐる時に戸を開けて現場を見せたら直ぐと其場で金を手渡しすると、斯う約束を致したのでございます、全體この神村が借りた家といふのは、神村が夫人と勝手放題の密會の場所にする爲であるから、神村が來ない日には夫人も來てをらぬ譯、おくらは全くの留守番で、仕やうと思へば何でも出来る、おくらが長吉と懇意になつたのも其んな爲で、段々親しくなつてくると、長吉夜などにもやつてくる、主人が勝

手な真似をした室で自分達も勝手な真似をする始末、第一庄兵衛の家へ長吉を住込ませたのもおくらの口入で、おくらは長吉を大層正直で能く働く人間だといつて、世話をしたのでございます、何しろ斯う云つた風に、兩人共謀になつて悪い事を考へてをりますので、夫人が他の男と關係してゐることを、長吉は突如亭主の男爵へ手紙で素破抜かうといはしたのを、おくらはそれでは面白くない、第一金になる點から云つても損だからと、遂に神村を目懸けることにいたしましたのでございます、で今日の木曜日を當日として、兩人は悉皆打合して、おくらは神村を待つてゐるのでございます。

さて庄兵衛は、平時の通り四時を合圖にキチント幸丸町へやつてきたが、男爵夫人は早や既に參つて、暖爐の前の長椅子に、長々と體軀を横たへて待つてゐた、一體夫人は女で相場を行らうといふ位のものであるから中々事業家で、時間の尊いことを知つて之を守ることは頗る固い、爾ういつた風に爲る事が冷酷で鞏固して男勝りのところがあるが、此相場が好きといふところが庄兵衛の付入つた點で、夫人の意を迎へては種々と取引所の談話をする、何かにつけて相談相手になる、到頭關係をつけて了つたが、其内に庄兵衛の御蔭かどうか判らぬが、運が預かつて大變に相場が當つて、福々になつたところから夫人はそれを庄兵衛の助言の御蔭と思ひ、庄兵衛を福の神と崇め、遂に此上なきものと信用して了つたのでございます。

おくらが暖爐を強い加減に焚いておいたので、室の中は少し熱過ぎるくらゐ、時刻は四時だが戶外

は段々と薄暗く、窓はピツシヤリと締切られ、窓懸布は悉く下ろされ、二つの大洋燈の火は露出の儘
兩人を照してをります。

三

庄兵衛が室内に入つたか入らぬ間に、神村も車から降りて入つて来た、檢事總長神村成共、一時宮
中で〇〇職を勤めて、陛下にも御覺え目出度く、早晚内閣へ入つて一椅子を占めるだらうと云はれて
ゐる人物、年齢は五十を一つ越した、瘠せた、皮膚が黄味を帯びてゐる、身長の高く無髯の嚴めしい
風采の、深い皺に刻まれて何となく難かしさうな男、例時の通り落ち着いた重々しい歩行き方で入つて
きた、平素彼は薄暗くなつた時刻からやつて来るから近所では何んな人だといふことを知つてゐるもの
はございませぬ。

入口に待構へてゐたおくらは早速に出迎へて、小聲で、

『入來ッしやい、貴下何卒私の跡へ跟いて来て下さいまし、決して音響をおさせなすつては不可ませ
ん。』

と云ひながら、肝腎の室の入口とは異つた方へ行きかゝるから、神村は少し躊躇つて、何故室の入口
の方へ行かぬのかと、不審に思つてゐると、おくらは極の小聲で説明、平常使ふ此方の戸は必定内部

から鍵を支つてあるに相違ない、外部から入らうとするには案内を乞はなければならぬ、案内を乞
へば兩人は身仕度して取済まして了ふに相違ない、とすると眞の證據にならぬ、度々自分が見た通り
を御覽に入れるには、突如踏込まなければならぬから、それには正門から入つてはいかぬが、此に
一つ都合の好いことは、此室には猶一つ、物置に使つてゐる室が付いてゐる、其室に隣の室へ行くやう
になつてゐる口が付いてゐて、其入口は締切りになつてゐるが、鍵は其物置に置いてある古机の抽斗に放
り込んだまゝになつてゐるから、物置から忍び込で、其鍵でソツと開けて突如飛込めは、眞逆此口から
誰も入らうとは思はずに油断してゐるに相違ないからと、おくらは斯う申すのでございませぬ。

『何でもマア私に任せてお置き遊ばせ、細工は粒々仕上げを御覽じろでござんす、そして行損なりや、
私だつて御禮を預けないのでござんすから。』

おくらは先に立つて行つたが、其物置といふ室へ入つたかと思つたら一寸見えなくなつて了つた、
神村は一人になつたので、其邊を見回すと、片隅にはおくらのだらう此騒が暴露次第逃出す爲に自分
の手荷物がチャンと作らへてある、誠に早手回はしのこととございませぬ。

おくらは聽て又出て来て、物置の戸を締めながら、

『貴下、少し御待ちなさらなければ不可ませぬ、今二人で話をしてゐるところでございませぬから』
仕方が無い、神村はおくらの顔を凝乎と視詰めて、其まゝ身動きもせず立往生をしてゐたが、考